文學士和田鼎先生序

頌鐵後藤先生編述

國際戰爭史 後編

明治
39 9 17
閱交

發行所 旭文堂

自序

文明時代に於ける戰爭は由來一種の手段のみ、之を以て最終の目的とすへきものにあらす、日露の戰爭即ち亦是れなり、然れは我軍隊か開戰以來百戰百捷古來未曾有の勳功を建てしは、吾人固より感佩謝する所を知らす雖とも、同時に吾人は一般國民に對して多大の希望なき能はす、即ち吾人の希望する所は世人か各自其務むる所に隨ひ戰後の經營を全ふし、以て國利民福の增進を企圖すること是れなり、然らすんは我軍隊か最も高價なる血稅を以て購ひ得たるの效果は、竟に徒爾にして終らん而耳、元來日露戰爭の終局か頗る龍頭蛇尾の憾あるもの、強ち當局者の責のみと謂ふへからす、畢竟は富國强兵の實未た完からさりしも亦其一因なり、然れとも失敗

は成功の基、焉ぞ知らん今日の屈辱は他日の大發展を企圖せしむるの神意に非さるなきを、要は國民一般今後決心の如何にあるのみ、余が謭劣自ら揣らす敢て此戰史を編述する所以、蓋し以て我軍隊の難闘苦戰勇敢無比なるの實況を叙し、其血税の甚た高價なる所以を明にして、他の發憤を喚起せんと欲するの微意、唯た頁數限りあり、未た其詳細に漏るゝあるを憾みとする而耳、讀者希くは諒焉。

明治丙午八月戰艦鹿島横須賀安着の日

著者識

日露戰爭史後編目次

黄海大海戰の詳報……一
日本海の大海戰……二〇
ノーヴイクの最期……三四
遼陽の大決戰……四一
勇敢なる歩兵第二十聯隊……八三
首山堡の激戰……九〇
黒英臺の激戰……九四
敵國軍用ジヤンクの拿捕と敵の掃海艇爆沈……一〇〇
義勇艦隊の創設……一〇一
敵巡洋艦レナの武裝解除……一〇五
郡司大尉の遭難……一〇七
國民後援會の毛布募集……一一五
旅順港口の强行偵察……一一七
軍人特別賜金の規定……一二〇
軍艦平遠の沈沒……一二一
露帝の手書と黒鴉公の宣言……一二四
勅語の下賜……一二九

遼陽占領後の小戰鬪……一三〇
沙河の大會戰……一四〇
本溪湖の大苦戰……一七八
軍旅山の激鬪……一八二
小原聯隊の血戰……一八六
三塊石山の夜襲……一九一
山田部隊の大苦戰……二〇一
左翼軍の戰鬪經過……二〇九
歪頭山の攻撃……二一〇
第三回國庫債券の發行……二一三
十月十三日の小海戰……二一四
バルチック艦隊の發航とハルの狂行……二一五
西大將等の凱旋……二三六
韓皇慰問の勅語……二三七
俘虜處罰規定の發布……二三七
南山占領後の旅順攻圍軍……二三九
旅順攻圍軍の前進……二七四
劒山の激戰と敵の逆襲……二七九
老座山及大白山の攻撃……二八二

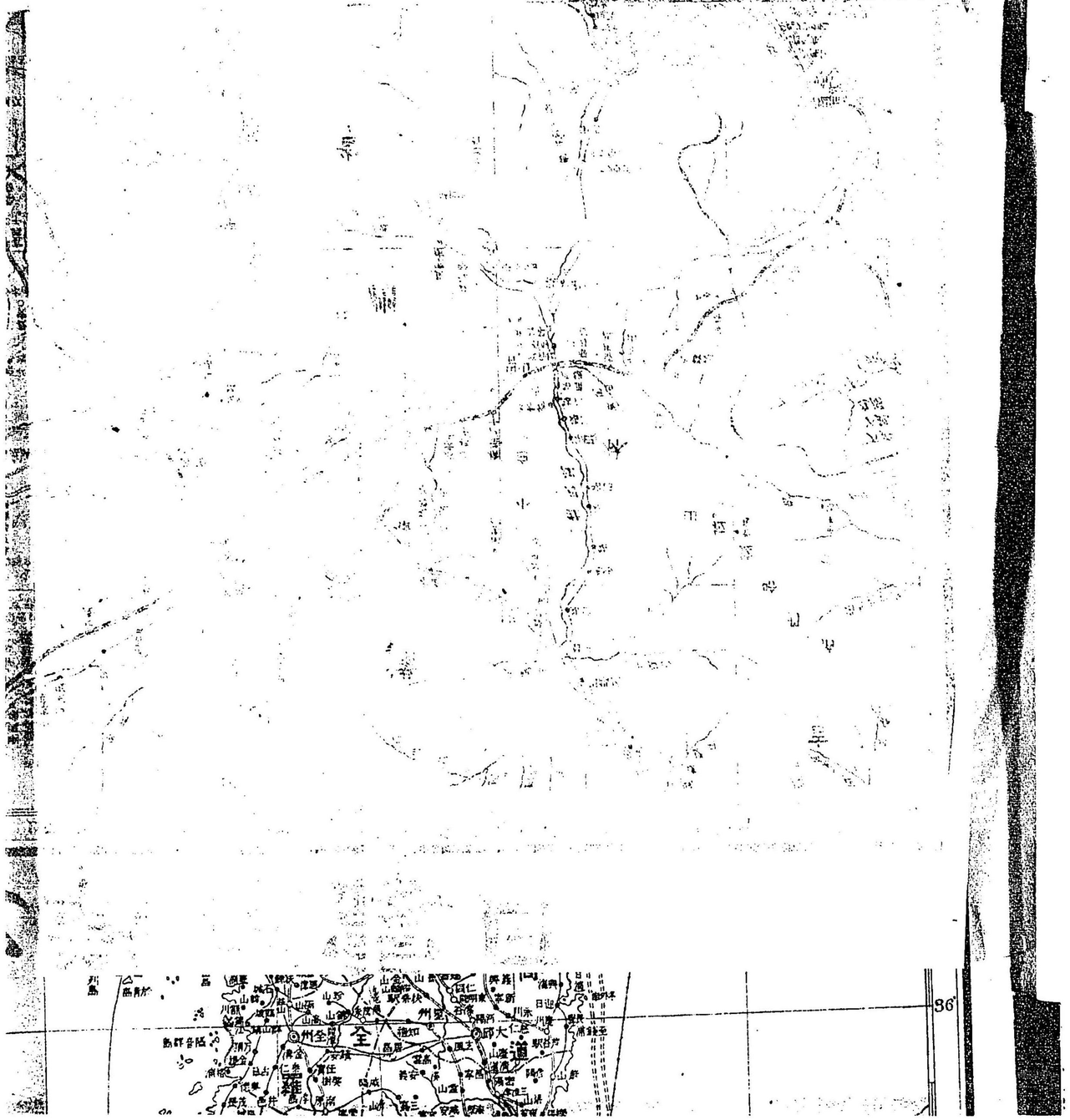
兜山の戰……二九一
凹字形山の占領……二九六
于大山梨嵐子の占領……三〇四
大孤山小孤山の攻撃……三〇七
至仁の聖意と勸降軍使……三一一
高崎山の攻撃……三一五
百七十四高地の占領……三一一
盤龍山西砲臺の占領と工兵隊の殊勳……三一五
鉢卷山海鼠山の攻撃と山本少將の戰死……三二五
二〇三高地の攻撃……三三一
東鷄冠山北砲臺の攻撃……三四〇
二龍山散兵壕の占領……三五五
松樹山砲臺の攻撃……三六四
P砲臺の攻略……三六六
クロパトキン砲臺の占領……三六九
二子山の攻撃……三七二
此間に於ける敵軍の報告……三七六
露國極東軍總司令官の更迭……三八三
沙河の對陣……三九五
……三九六

第二回外債の發行……四一一
軍艦濟遠の沈沒……四一二
北韓軍斥候の小衝突……四一五
戰時中の帝國議會……四一六
開城前の海陸旅順攻撃……四一七
赤坂山の占領……四四三
二〇三高地の占領……四四七
左翼方面死傷者收容休戰の顚末……四六六
屍體收容交涉の不調……四七二
水雷艇隊夜襲の實況……四七六
聯合艦隊へ勅語を賜ふ……四八〇
白襷隊の奮戰……四八一
東鷄冠山北砲臺の占領……四八六
二龍山の占領……四九六
松樹山の占領……五〇三
鳩灣一帶の占領……五〇九
望臺の占領……五一一
盤龍山新砲臺烏帽子山の占領……五一三
病院砲撃に關する交涉……五一七

東鄕大將の入京……五二二
旅順開城……五二四
乃木、ステッセル兩將軍の會見……五四九
旅順入城式並招魂祭と祝捷會……五五六
宣誓將校の歸國……五六二
敵要塞內に囚はれ居たる我勇士……五六三
敵の砲壘及艦船の爆破……五六六
ステッセル將軍最後の報告……五六九
開城前後旅順口內の狀況……五七二
獨逸皇帝乃木、ステッセル兩將軍に勳章を賜與す……五七八
旅順陷落の際に於ける露帝の詔勅……五七九
ステッセル最後の訓諭……五八〇
敵兵の營口、牛莊來襲……五八五
黑溝臺附近の會戰……五九一
立見師團の激戰……六〇四
關東騎兵隊の奮鬪……六一二
牛居の大惡戰……六一六
城廓方面の襲撃……六一七
露探の處刑……六二一

紀元節の軍人恩賜……六二五
二月中滿洲各方面の戰況……六二七
奉天附近の大會戰……六四三
清河城、馬群丹及烏帽子嶽の占領……六六九
萬寶山附近の激戰……六七一
月堡子の占領……六七四
華族砲兵隊の奮戰……六七六
第十八聯隊の氷上戰……六八〇
李官堡の大苦戰……六八四
最左翼軍の大迂回戰……六八八
騎兵隊中の奇兵隊……六九四
鐵道破壞決死隊……六九五
滿洲軍總司令部の奉天入城式……六九八
奉天會戰前後の彼我北韓軍……六九九
鐵嶺、奥京、開原、昌圖府、法庫門の占領……七〇一
敵將の再更迭……七〇七
第三回外債の募集……七〇八
四月中の滿洲軍戰鬪……七〇九
第四回國庫債券發行……七一四

露國內部の騷擾……七一四
冬宮砲擊事件……七一五
露都の同盟罷工……七一七
セルジス太公の暗殺……七二二
オデッサの騷擾と黑海艦隊の反亂……七二三
第五回國庫債券の發行……七二五
閑院宮殿下の御凱旋……七二六
五月中の滿洲軍……七三三
敵騎の野戰病院襲來……七三四
北海に露艦の出現……七三六
日本海最後の大海戰……七五七
ロ提督捕獲の顚末……七五九
敵戰艦捕獲の實況……七六〇
各地通電敵將の戰報……七六六
ロ提督最後の命令と戰後の報告……七七一
樺太攻擊の海陸軍……七八四
媾和前の滿陸韓海軍……七八五
北韓方面の戰況……七八八
滿洲方面の戰況……

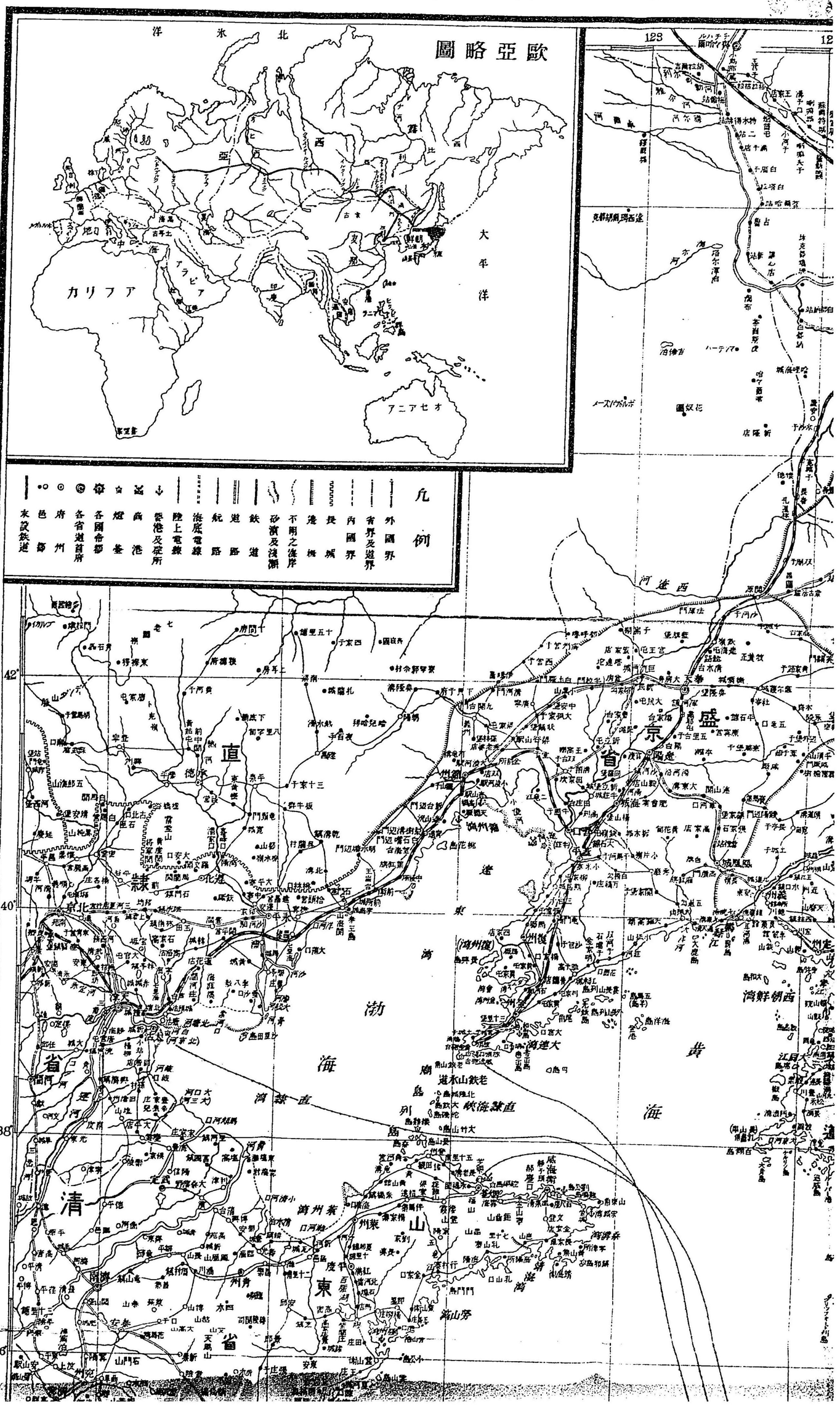


日露戰爭史 後編目次 畢

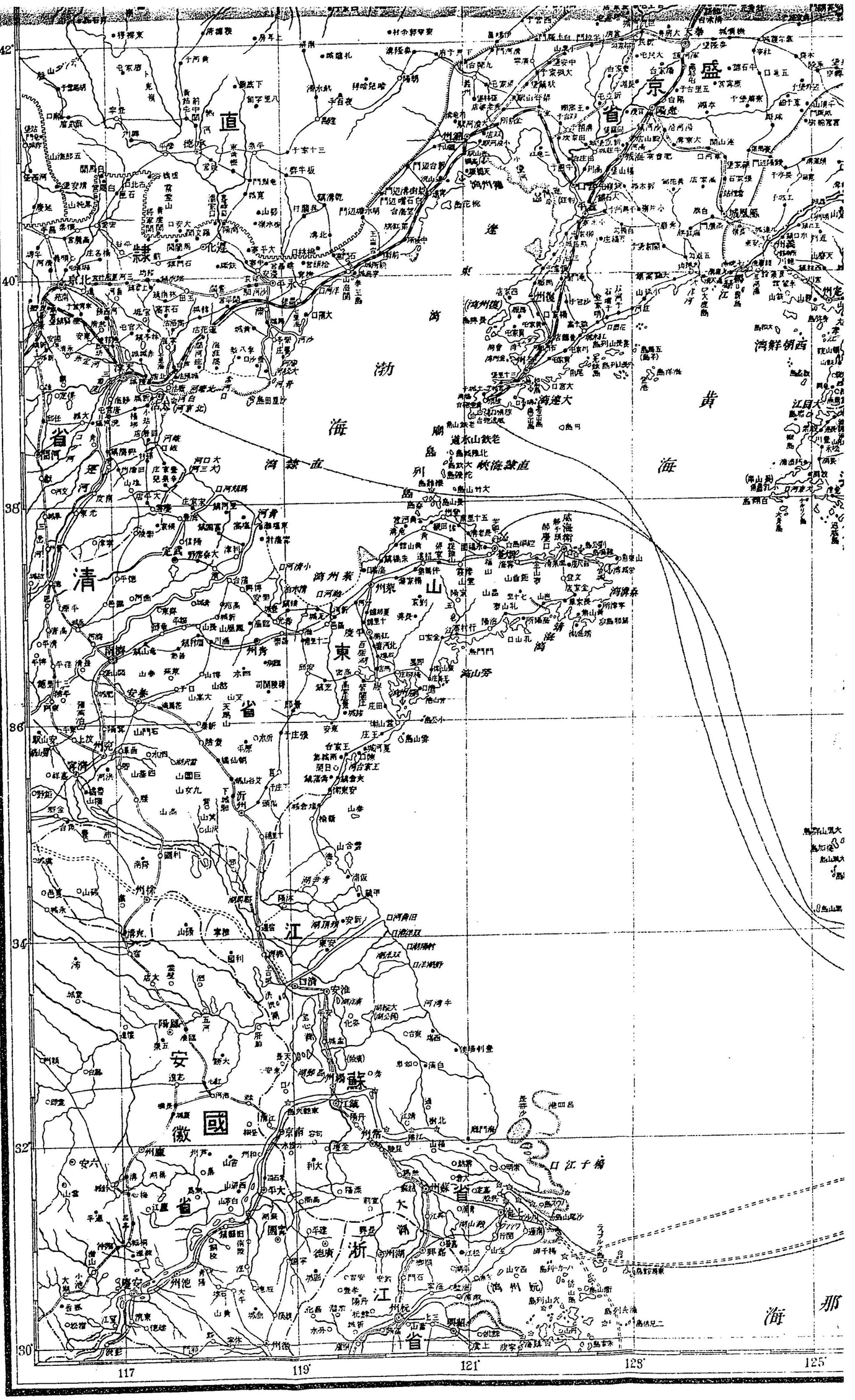
目次

日露休戰條約……七九一
日露戰爭我海陸軍の損害……七九三
日露媾和條約の成立……七九四
平和克復の詔勅……八〇三
日韓新協約……八〇五
海軍觀艦式と陸軍觀兵式……八〇七

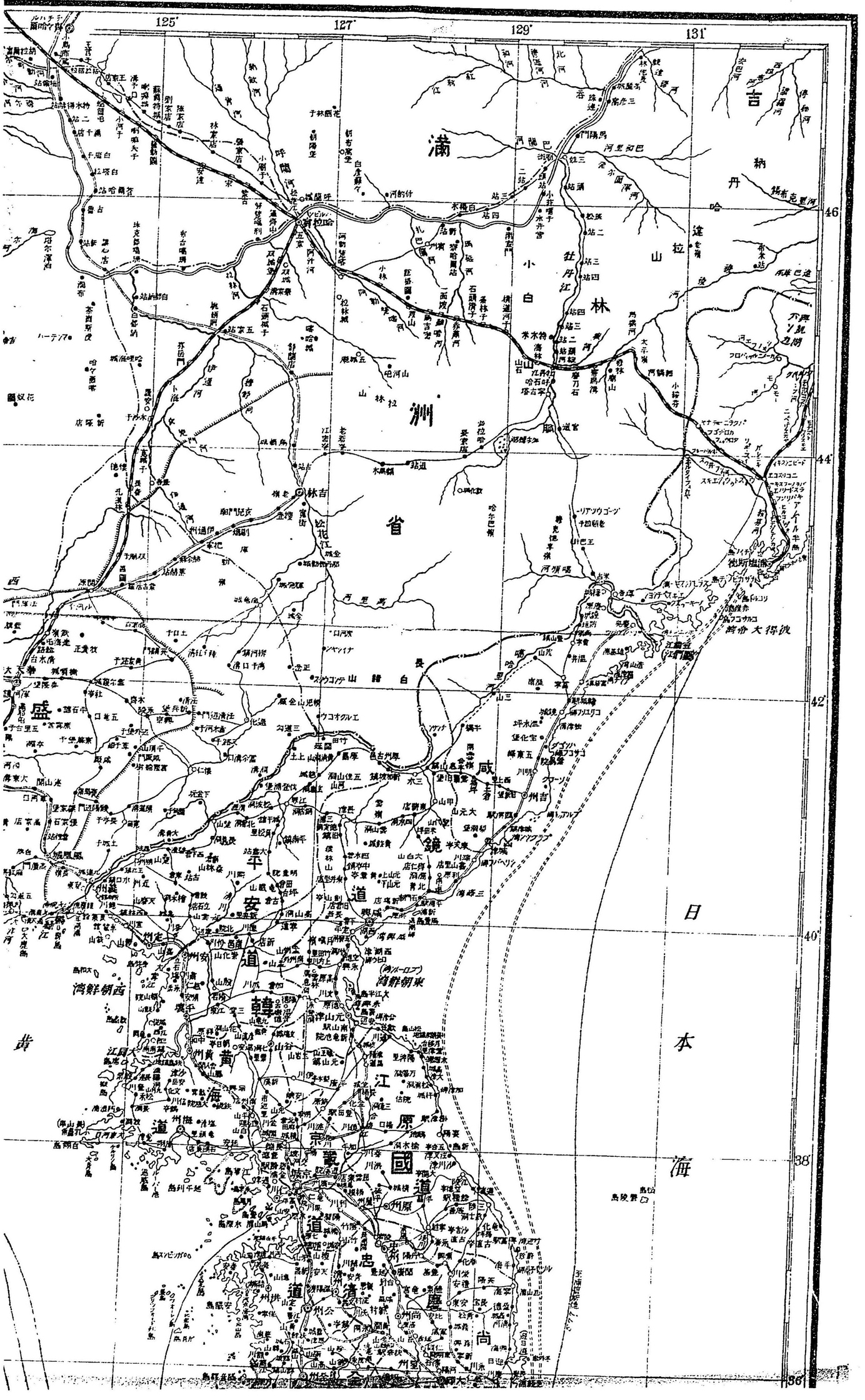
地明細新圖



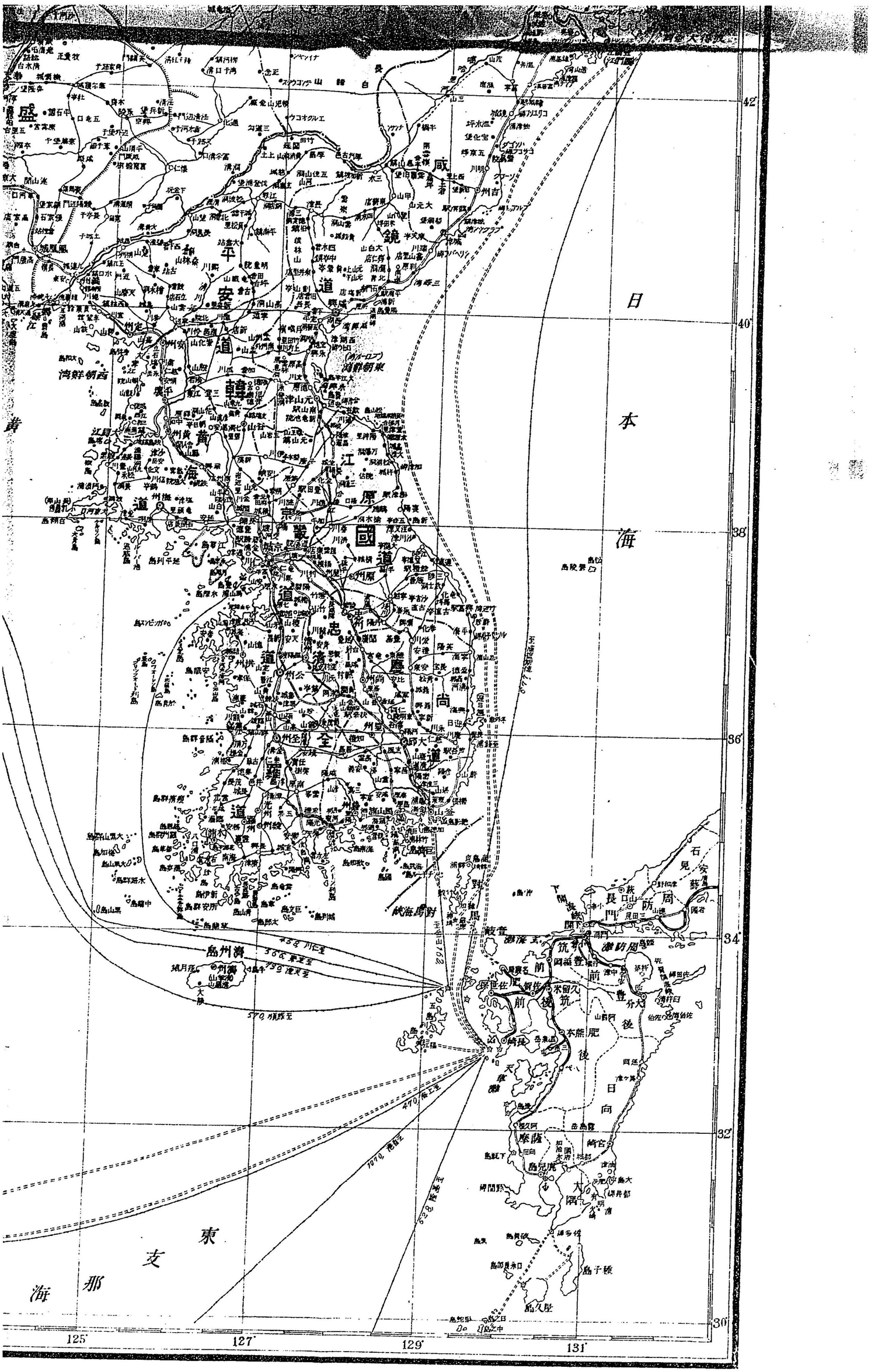
歐亞略圖
北氷洋
大平洋
アラビア
カリフア
アニアセオ
凡例
外國界
省界及道界
內國界
長城
邊柵
不明之海岸
砂濱及淺瀨
鉄道
道路
航路
海底電線
陸上電線
要港及碇所
商港
燈臺
各國帝都
各省道首府
府州
邑鄙
未設鉄道
直隸省
京都
盛京
清東省
山東
渤海
黃海


42°
40°
38°
36°
34°
32°
30°
117
119°
121°
123°
125°
直隸省
奉天省
吉林省
黑龍江省
山東省
河南省
山西省
陝西省
甘肅省
江蘇省
安徽省
浙江省
渤海
黃海
東海
那海
朝鮮
日本海
遼東半島
山東半島
朝鮮海峽
對馬島
濟州島
琉球群島
臺灣
澎湖列島
北京
天津
瀋陽
長春
哈爾濱
濟南
青島
南京
上海
杭州
蘇州
武漢
鄭州
西安
蘭州
太原
石家莊
徐州
安慶
南昌
福州
廈門
汕頭
廣州
香港
澳門
海口
重慶
成都
昆明
貴陽
桂林
梧州
南寧
拉薩
烏魯木齊
西寧
銀川
呼和浩特
包頭
大同
張家口
承德
錦州
營口
大連
旅順
威海衛
煙台
膠州灣
連雲港
蚌埠
合肥
九江
武昌
宜昌
沙市
岳陽
長沙
衡陽
株洲
韶關
柳州
貴州
雲南
四川
湖北
湖南
江西
福建
廣東
廣西
安徽
江蘇
浙江
河南
山東
山西
陝西
甘肅
寧夏
青海
新疆
西藏
內蒙古
遼寧
吉林
黑龍江
渤海灣
遼河
黃河
長江
珠江
淮河
海河
松花江
嫩江
額爾古納河
黑水
烏蘇里江
興凱湖
洞庭湖
鄱陽湖
太湖
洪澤湖
巢湖
高郵湖
微山湖
南四湖
白洋淀
衛河
運河
京杭大運河
津浦鐵路
京漢鐵路
京奉鐵路
京綏鐵路
隴海鐵路
滬寧鐵路
滬杭甬鐵路
粵漢鐵路
湘桂鐵路
滇越鐵路
中東鐵路
南滿鐵路
安奉鐵路
膠濟鐵路
正太鐵路
道清鐵路
同蒲鐵路
平綏鐵路
北寧鐵路
津浦鐵路
京漢鐵路
京奉鐵路
京綏鐵路
隴海鐵路
滬寧鐵路
滬杭甬鐵路
粵漢鐵路
湘桂鐵路
滇越鐵路
中東鐵路
南滿鐵路
安奉鐵路
膠濟鐵路
正太鐵路
道清鐵路
同蒲鐵路
平綏鐵路
北寧鐵路

日露交戰地月



125°
127°
129°
131°
46°
44°
42°
40°
38°
36°
滿
洲
省
吉
林
盛
咸
鏡
平
安
道
韓
黃
海
道
江
原
京
畿
國
道
忠
清
道
慶
尚
日
本
海



日本海
東支那海
平安道
韓國道
黃海道
江原道
忠清道
全羅道
慶尚道
咸鏡道
盛
長
防
周
筑
前
後
肥
日向
大隅
薩
島州濟
42°
40°
38°
36°
34°
32°
30°
125°
127°
129°
131°

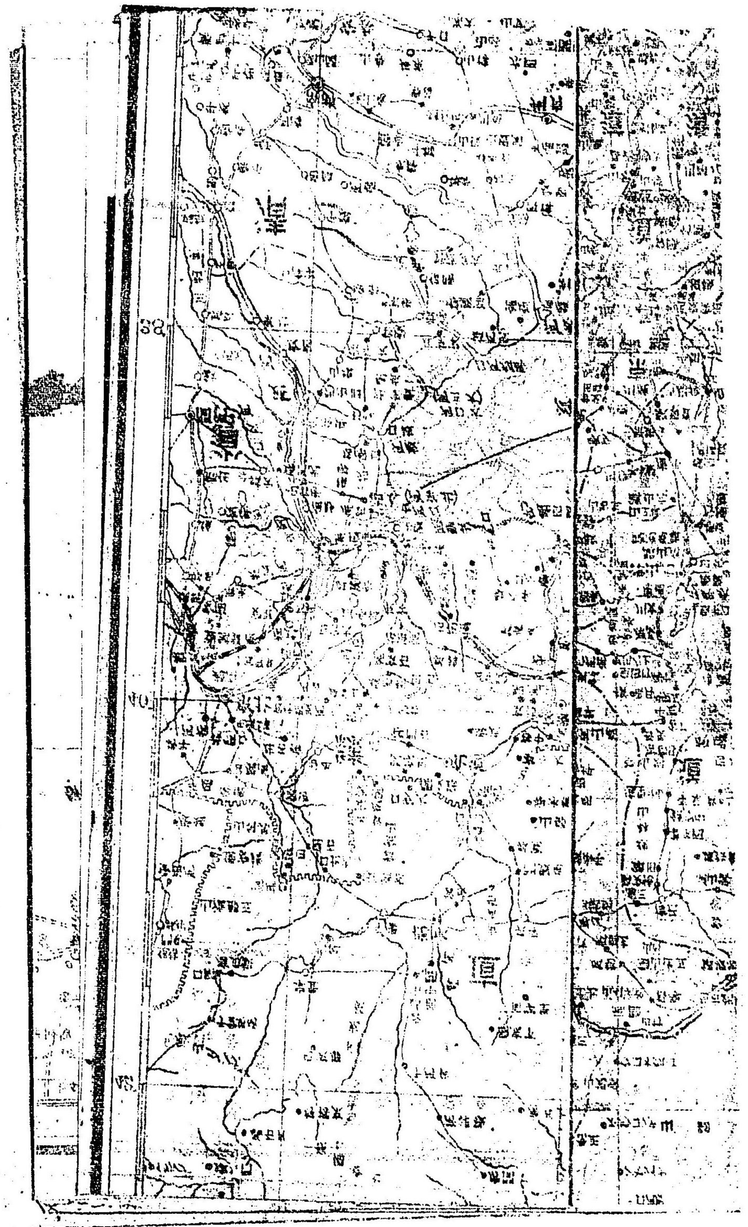
日露戰爭史 後編

黃海大海戰の詳報

後藤頑鐵編述

余は曩より日露戰爭史の後編を叙述せんとするに臨みては、重複ながら前編に於て頁數の容るゝ限りに於て、事の精細を缺くの已むを得ざるに至りたるを補はんが爲めに、勢ひ筆を再び黃海の大海戰に起さゞるを得ず、然らずんば前後の照應を失して此未曾有なる日露戰爭の顚末を知悉するに、多くの遺憾なき能はざるを信ずればなり、讀者幸に諒焉。此大海戰に次ぐは東鄕大將の報告は既に前編に載せたり、而して尙ほ當時旗艦三笠にありて其實況を目睹したる聯合艦隊海軍中佐の談話こそ、最も其實際を詳にしたるものなれば更に之を左に抄錄すべし。

それで十日天氣は極く宜しくございまして、南の風がソヨ〳〵吹く位でありまして波濤も起りませぬ、少し霞み掛つて居りまして極く遠方は見えなかつたのでありました、先づ十里以內は見えたやうであります、所が早朝から敵艦の出動に就て色々の情報が旗艦の三笠へ來たのであります、其大略を申しますれば、敵艦が順次に旅順港外に出つゝあ



るとか、或はレトウイザン、アスコリッド、ノーウイクが港外にある、或は敵の主力艦隊が見えると云ふ報告であります、鳴村參謀長が私に言はれますには、何時も東京から客があると云ふと、何か不思議に敵艦の行動があることになつて居るから、君は甘い時に來た、多分今日は物になるだらうと云ふことを言はれました、自分も切めては露西亞の艦の影だけでも見て行きますといふと、大變な土産になりますと云ふことを申して居りましたが、遂に私の望み以上に此甲鐵艦の戰爭を、三笠で見ることが出來ましたのは、人は千載の一遇と云ひます、私は萬載の一遇と考へまして、自分一人は私に喜んで居る譯であります。

扨て東鄕長官には、此敵艦隊に關する色々の報告に依て、特に敵艦隊は南下するものと判斷されまして、艦隊を率ゐられて先づ本隊で敵を擊つと云ふ御考へで遇岩の方に往かれました、遇岩の方へ往かれまして、恰度午後零時頃には遇岩の南東方凡そ三里ばかりの所に、本隊は到着しましたのであります、それから其處に往てから十浬の速力で西南西に奔つた、零時三十五分になつて、愈〻敵艦隊が旅順の方からして南東に向て走つて來るのが見えた、其距離は凡そ二萬米突(十海里)ばかりでありました、それで敵の勢力を擧げて見ますと云ふと、戰鬪艦が六隻に、巡洋艦が三隻で單縱陣をなして居ります、其順序はツエザレウイツチ是が旗艦であります、レトウイザン、ポベーダ、ペレスウイット、

セバストポール、ポルダーワ、アスコリッド、ヂャナ、パルラダとそれからずつと後の方に病院船が一隻あつたです、それからノーウイクは驅逐艦八隻を率ゐて、敵艦の左側の後の方に居りました、此處で東鄕長官は成るべく此敵を沖の方へ誘き出さうと云ふ運動を取られたのです、さうすると敵は斯ふ云ふ風に下つて來て、此處で本隊は(M)單縱隊陣からして單横陣になつた、此處等の運動は頗る見事であつた、是れは豫て十分に訓練して居らるゝからして斯う云ふ咄嗟の際でも實に甘く往つたのだと唯私は竊に思つて居りました、其内敵は針路を變じて行くのでありますから、自然に遠ざかるから我も亦針路を變じて斯う向けられた、詰り此處で單縱陣になつたが逆列て三笠は後とに居つた。所が敵は又南に下るのであります、此前を壓迫する爲めに、又々針路を變換して三笠が先きに單縱陣になり、漸く屈曲して敵を壓迫しました、夫れから色々變化しつゝ、敵は逃げる目的でありますから、東鄕長官の率ゐて居る本隊は之を追掛けつゝ、眞の駢行でなくても殆んど駢位になつた、それからして敵は一時頃に一萬一千米突の距離で向ふから擊ち始めた、此陣形を變へた時に向ふは擊つた譯であります、それからコッチも始終此運動を取つて、向ふの距離が近くなつてからして此方は擊ち方を始めたのです、それで詰り追擊に移つて來たのでありますが、敵の艦隊は一番近い三笠を望んで集彈した、それから二時半に向ふのやつは始め單縱陣であつたのが、アスコリッドへ此方の彈丸

が命中したもので、他の巡洋艦と共に段々怖しくなつたものと見えまして、甲鐵艦の蔭に出て仕舞つて、詰り小隊縦陣になつた、それから益〻此方の艦隊は敵の本隊と駢行して、其距離は凡そ八千米突位八千米突と云ふと詰り四浬になります、此邊に居る時分になか〳〵砲撃が激しかつたです、其中に向ふが少し針路を變へたかどうか分らぬが、段々彼我の距離が遠くなつて來ましたからして、三時半頃から此方か撃たなくなつた、さうすると向ふも撃たなくなつた、それで兩方睨み合つて五時半頃迄居つた譯です、此處で段々遠くなつて砲聲が中途で止まつて居りましたけれども、此方の艦隊は敵艦隊の前に出で之に近づかんとする爲めに、速力を全速力に增した、即ち後に居ると損ですから、之を追越して近寄つて烈しく撃つと云ふ目的で速力を增したのです、三時五十分に彼我の距離は追々近寄つて往つた、それですから段々此方は左の方に寄せて益〻接近するやうになつた、敵の殿艦が此方の一番先の三笠の前方に居る、段々速力を增したものでありますから、此邊で近く追付くことになる、五時三十五分頃には敵の旗艦が七千三百殿艦が七千五百米突の距離に至つた時に、敵の殿艦から先づ撃ち方を始めた、此時全速力にしたのは確に私等の見て居つたのでは、十六節半は出たらうと思ひます、激しい時には十七も出ましたらう、それだから段々追付けた譯なんです、それで今の殿艦のボルタワから撃ち始めた、之が第二回の開戰の始りです、それから五時四十三分に我が一等巡洋

艦二隻が、六艘の本隊に向つて加つたから、餘程此方が優勢になつた、五時五十六分に敵の彈丸が三笠の十二インチの砲塔の左側で破裂した、其激動の爲めに此砲塔を指揮されて居りました伏見若宮殿下は胸部を御打ちになつた、砲塔と云ふものには蓋が付て居つて人間が這入ると閉めて仕舞ふ、此隅から見て居られる、普通の人は此砲塔の上から首が上に出る位になつて居る、そこへ向ふの彈丸が來て上の方で破裂したのです、私共前に居りましたが非常な音がしたやうです、砲塔が猛烈なる激動を受けたものですから、殿下は胸を御打ちになつた、砲塔が動かなくなつた、此砲塔が動かなければ鐵砲が動かぬ譯です、是れは其當時應急の工夫で大砲は直ぐ後とで撃てることになつた、殿下の御着服の破れたのは詰り其激動の爲め起つた空氣の作用で、あゝ云ふ風に裂けたものではなからうかと思うて居ります、併し殿下には極めて御輕傷でありましたのは實に國家の爲めに喜ぶべき次第であると考へて居ります、それから六時一分頃に兩方の距離が迫つて來て、七千米突位になつた時に、敵の四番艦の檣が折れて仕舞つた、丁度申合せたやうに同じ二本立て居つた檣が折れて低ひ檣になつて仕舞つた、それから六時十二分に又敵の一彈が三笠の艦橋の左舷前部に當つて破裂した、丁度一番上のコンパスのある所には、司令長官、參謀長、艦長を始め八人居られた、其下に海圖室がある、之は木造の極く粗末なるものです、所へ彈丸が來て破裂したものですから、其海圖室の横

に居つた藤瀬中尉、信號長、信號兵、軍樂手などが斃されて仕舞つた、其彈片が上に來まして八人居られる中の四人艦長、參謀官が二人、少尉が一人怪我されたのは此時です、其時は私共は此下に居りましたが、此ブリッヂに多少彈丸の穴が明きましたから、ソコにあつたバチッに水の這入つたのが引つくり返へる、血と水とを混じた人間が上から落ちて來ると云ふ騷ぎでありました、それで此處に居られました長官に、何の怪我もなかつたのは、實に天佑だらうと思つて居ります。

艦に新聞にも出で居りましたが、司令長官の從僕が居りましたが、之れは元と私が艦隊に居た時から知て居た、長官には長く御伴をして居るのでありますが、夫れが五時頃にブリッヂの下の方で怪我した、兩脚共やられたが、始終長官の御身に就て怪我があつてはならぬと心配しまして、參謀長の從僕に頼んで、私と副官がブリッヂの向側に居りました時分にやつて來まして、長官が司令塔の內に御這入にならぬと危くていけませぬから、ドウか這入て下さいと頼んで來ました、副官も大に熱心なことに感じまして、副官は上に登つて往つて、長官に色々其事を申上げて長官を引張る樣にして下へ御連れ申し、此ブリッヂの下に在る司令塔の中に長官を引込んだのであります、之れは下らぬ樣な話でありますけれども、詰り從僕如きもの〻熱誠と云ふものが、遂に司令長官を動かす事になつた譯でありまして、私共實にそれを見て居つて感心したです、詰り斯う云ふ風に

軍人でない雇人までが、非常に長官の身の上に就て考へる位でありますからして、我帝國の連戰連勝を得るは當然の事であるだらうと思ひました。

それから矢張斯う風に往きつ〻ありました間に、何時までも駢行して居りますから、段々距離が近くなつたので此方の彈丸も敵艦に能く中る、又向ふからの彈丸も能く此方へ來る丁度六時三十七分頃になりまして、我艦隊から擊ちました十二吋の彈丸が敵の旗艦に中つた、丁度司令塔の邊に破裂したやうに確かに私も見て居りました、さうすると敵の旗艦は非常に右の方へ傾いて、さうして左に廻はり出した、それで是は沈沒すると私共想像して居りましたが沈沒致しませぬで、あとの方で元の傾きは直つたでありますが、是がずつと廻はり出して往つたものだから、此二番目の艦も旗艦に續いて廻はつた、さうして四番目に艦と衝突しさうになつたもので、後の此艦(五番目の艦)は、うんと出て來た近い所は三千五百米突位になつたのは此時の距離です、思に此時の彈丸は司令塔に中つて司令塔の中には、舵を操る所がありますから、其舵にでも中つて夫れが爲め取舵一杯になつたのではあるまいかと思ひます、夫れは想像でありますが、兎に角舵に故障があつたのであらう、さう云ふ風に旗艦が廻て皆後に續いて廻るから此方の彈丸は中るに都合が好い、且つ同じ所に廻て居るから同じ所を擊つて居れば中る、故に我艦隊が集彈射擊するに都合が好い、是に於て敵の陣形は右往左往と亂れて各艦樣々の向になつてか

ら、此方は直に取圍んで仕舞て有らゆる鐵砲を浴せ掛けた、向ふの距離が近いから大抵中る又向ふから擊つても能く來たです、それで其擊方が激しいものだから、一時はグヂヤ〳〵して居る敵の陣形が我命中彈の爆煙の爲めに見えぬこともありました、七時頃になつて敵の砲火は大變減つて來たです、さう云ふ風に居つて、向ふが亂れ此方が非常に猛擊して居る間に、又日本の他の一戰艦が他方面から此處へ馳せて來た、それと共に海防艦が二隻二等戰艦が一隻之と同時に來たものだから、此邊をヒヨロ〳〵して居つた敵の驅逐艦が、日本の本隊に向つて來やうとして居つたのが、此一隊から擊たれるから皆逃げて仕舞つた、六時三十七分から八時二分迄烈しく砲擊を加へたものだから、此邊の形は色々になつた、丁度我は一等戰艦が五隻、一等巡洋艦が四隻、二等戰艦が一隻、海防艦が二隻居りましたから、都合十二隻で之を取圍んで擊つたことになるから、其彈丸を拵定して見ると大變なものを擊込んだらうと思ふですから、此等は非常に敵が損害を受けた時であらうと思ひます、彼のツエザレウイッチの膠洲灣に這入て弱つたと云ふのも、此時非常に擊たれたからであらう、敵の巡洋艦は二時半迄は擊れましたが、一發アスコリッドが喰つて逃げたから、終始擊たれることはなかつた、併し此混亂した時に我一隊が取圍んで擊つたものだから、敵の巡洋艦は此時に大損害を蒙たであらうと思ひます、此の如く取圍んで居る中に日が暮れて來たから、跡の始末は彼の澤山の驅逐艦や水雷艇が

居りますから、之れに命じたので、驅逐艦や水雷艇は段々此方に近寄て參りました、時に八時二三十分で日は全く暮れました、それで敵艦隊は驅逐艦水雷艇の襲擊するにも拘らず一つも探海燈を點けて居らなかつた、而して其晩は非常に闇い夜であつた、兎に角晝間の戰爭で餘程の損害を受けたであらうと云ふことが想像されます、それから本隊の方は夜の八時二分から戰鬪はやりませぬが、翌朝になりまして情報に依つて敵の艦隊は、旅順の方向に退却すると云ふことが分つたものでありますから、各封鎖に就きました。此戰鬪に於て始めから三笠は先頭に立つて往くものでありますから、是へ皆幾んど彈丸を浴せ掛けられ、割合に死傷も多くございまして、多少の損害を受けたのであります、けれども一向重要の部分には何處も損害は受けて居りませぬに、他の艦を見ると云ふと負傷者も無ければ、彈丸一發も中らぬと云ふ艦もありましたから、翌日は直に今の封鎖位置に就て旅順の監視をした程で、戰鬪力には少しも缺ける所はなかつた、下士卒の方に就て見るも、彼等は皆非常に落着て能く働いたです、前の方で人が倒れやうが一向平氣で自分のすることを務めて居ります、雇人でさへ先刻申しました通り色々働くのでありますから軍人たる者の働くのは勿論であります、斯う云ふ風に戰爭に參與したる日本の艦隊は皆無事でありますし、兵員もさう云ふ風に落着て働いて居りますから、此次の戰爭に於ても十分勝利を得るだらうと考へて居ります。

尙ほ此日松島艦にありて奮戰したる某將校が、其鄉里に寄せたるの書は、一般の戰況と共に、松島艦戰鬪の狀況を詳にするものあり、即ち其概要を左に揭ぐ。

（前略）此日天晴れ波靜に南東の輕風徐に來り濃氣薄く遠景を遮り、暑からず寒からずの好大氣にて、艦員一同爽快を覺へ、敵出でなば斯る天氣ぞ望ましきと語り合ひ居たるに、午前七時を過ぐる頃、旅順口東側にヂャナ型一隻、老鐵山下東側にアスコリッド驅逐艦九隻及び掃海汽船八隻を認め申候、彼等何事をかなすならんと港口を望視致し居候に、敵艦は續々港外に出で來り、戰鬪艦六隻巡洋艦四隻驅逐艦數隻は城頭山下に於て隊列を整へ、九時半頃南を指して進航を始めし有樣は、敵ながらも健氣に面白く感じ申候。敵は旗艦ツエザレウイッチ（戰艦）を先頭とし、レトウイザン、ペレスウイット、ボペーダ、ポルタワ、セヴアストポールの五戰艦之に次ぎ、アスコリット、バルラダ、ヂャナの三巡洋艦病院船一隻は其の後尾に連り、巡洋艦ノーウイクは驅逐艦八隻を隨へ敵の右側前方に控へ、十時半過敵艦隊は老鐵山高角を出で航路を西轉して渤海灣に闖入せんとするもの〻如く察せられ候、先是敵艦隊の脫出南下を始むるや、無線電信は我聯合艦隊の總艦艇に警を傳へ、豫て期したる各戰隊の配備は時を移さず完成し、腕を扼して機を俟つのみに相成候、當時我戰隊は最も敵に接近して敵の動靜を窺ひ、絕えず之と觸接を保ち、今日より積年の鬱憤を晴さんものと勇み立ち申候、艦員一同は過し二十七年の當時を追想して感慨措く能はず、鏡の如き此黃海に千歲一遇の好運に會するを喜び、意氣衝天とは如斯有樣かと相考へ候次第に御座候、時早や午食に近ければ、腹が空てはたまらじと午食を急ぎし武夫の心の中こそ頼母敷けれ。

午後一時艦長海軍大佐川嶋令次郎殿には、總員を後甲板に集めさせ、いとよろこばしげに艦員一同に訓されけるは。

今や期待したる敵は其全力を擧げて出動せり我軍の志氣と戰鬪力とは大捷を期して餘りあり、吾人は千歲一遇の此大海戰に參與する武運に會す、各員奮勵勇鬪して其本分を盡し、國家の希望を滿し、譽を千歲萬歲に殘すべしと。

次に　天皇陛下皇后陛下皇太子殿下の萬歲を三唱し、了て軍艦松嶋の萬歲を三唱す、茲に至て士氣旺盛の極と云ふべきか、衆皆勇氣凜乎として喜色滿面に溢る、實に未曾有の大戰千歲の一遇嗚呼何等の快ぞと一同雀躍仕候。

午後零時五十分頃渤海に向ふが如く見られたる敵艦隊は、航路を南東に變じ進行を始む、我第一戰隊及春日、日進は敵の航路を遮る如き運動を執り候爲め、敵艦ノーウイク及驅逐艦は敵の非戰鬪側後尾に占位し、第一戰隊以下は敵の先頭を回りて其南方に出て、茲に始めて戰鬪は開始せられ、彼我砲火の遽然又閃然たるを薄濛の中に望見仕り候ひしが、少時にして艦影を水天髣髴の中に失し申候、午後二時四十分頃に至り彼我兩隊砲火を交

えつゝ並航するを認め候、然るに我第一戰隊以下の機活なる運動と精巧なる射撃に惱まされ、敵の後尾に位置せる巡洋艦隊は、大に狼狽したるものゝ如く、皆戰闘艦の非戰側に出で、敵の隊形は自然に不規則なる二列縦陣の如きものと相成、唯ゝ戰闘を避け南東に逸走する如き観有之候、第一隊以下は敵艦隊の距離漸く遠かりたるを以て、午後三時二十分頃射撃を中止し、專ら追跡に努めたるが、約二時間の後第一戰隊以下は徐々と後方に回頭して、敵の少しく前方に出で、午後五時三十分頃山東角の北方四十五浬の地點ご黄海の眞中にて再び戰闘を開始し、漸次敵に接近し敵の先頭を壓迫して猛烈なる射撃を加へ候へば、我砲撃は益ゝ顯著なる効果を呈し、下瀬火薬の爆發は實に目覺しく見事に有之申候、激戰約一時間の後敵の先頭艦ツエザレウイッチの司令塔第一戰隊より發射せる十二尹彈の爆發するや、其舵機を損じたるものゝ如く、急に左に回轉して自己の列中に突入しければ、敵艦隊は是れより亂を生じ、各艦或は右に或は左にし、一所に集合せる如く相成候、斯くと見るより第一戰隊以下は漸く北方に變航して敵の前路を包み、八雲も亦其後尾に來りて掩撃頗る努めければ、敵は益ゝ潰亂して各艦各自西方に逃れんとするものゝ如くなりしが、恰も我戰隊(松嶋は勿論)の一部及び淺間は、此好機に戰場に到達し敵の北方より之を横撃し、第一戰隊以下と相應じて益ゝ敵に迫りしかば、敵艦隊何かは以てたまるべき、四分五裂の狀態に陷り申候、時に日沒して暮色蒼暗たり、是に

於て各戰隊は日間隨從し來れる我驅逐隊水雷艇隊に戰闘を譲りて、各所要の配備に就き敵の南下に備へ申候。

却說戰闘の大體は右に述べたる如き始末に有之候是より我松嶋の樣子を申上げんに、松嶋は會敵の時機熟するや午後七時頃旗艦に進ひ、ガーフに黄海々戰紀念の軍艦旗を翻へし檣頭高く戰闘旗を掲げ、嘹々たる戰闘の號音吹奏せられて、發砲の準備甲板の撒水等萬般の準備は立ろになり、數百の健兒沈靜部署に就て下令を俟ち居候有樣は、勇烈とや云はん、壯快とや云はん、一入愉快に感申候、七時三分打方始めの號音終るや、滿腔の忠勇と貫日の至誠を込めたる我砲は、今や將に崩壞せんとする敵艦隊に向ひ猛撃を加へ候へば、我に向ひしアスコリッド外二隻の巡洋艦は、此勢に避易して航路反轉遁逃の態度に變じ申候、此時亂れ立たる敵の戰闘艦隊も、我に近き來りければ背後を見せし巡洋艦隊も、再び舵を取直し我に向進候も、時既に後れ、敵艦隊は隊列壞亂西するあり、東するあり南に偏するあり北に向ふあり、混亂また混雜停止する所を知らざる勢なりければ、我戰隊は好機逸すべからずと猛撃愈ゝ相努め申候、大凡七時四十分頃より同四十八分頃までは、彼我の砲戰最も猛烈にして我砲彈の命中するもの多く、黒煙を發して炸裂するの狀實に壯觀にして又慘憺を極め、敵彈の我前後左右に落下するもの亦甚多く、將に之が打撃を蒙らんとせるの危機も屢ゝ有之候ひしも、遂に一彈の損害も無之、獨り砲

火を逞うし候次第に御座候、本艦の主砲三十二珊の巨彈は、敵の戰闘艦ペレスウイツト型に命中せし樣子にて、少からぬ損害を與へたる事と存居候、此戰闘に於て全員最も沈着勇敢敵の猛烈なる砲火の下に笑て能く其職務を盡し、本艦の能力を發揮して遺憾なからしめたるは、艦長閣下も御滿足の御事にて、我々一同も愉快に覺へ申候、我良好なる猛射は敵に少からぬ損害を與へ候事と確信仕り、一同欣喜罷在候、實に憎らしき露艦に一大打撃を加へ候ときの心地御推察被下度候、我々戰闘員が最も遺憾に堪へざるは、戰闘將に酣にして必迫の佳境に入らんとするとき、日全く沒して暗憺たる夜陰黄海を掩ひ、未だ撃滅の時機に至らずして戰闘を驅逐隊艇隊に委するの不得止りし事にして、昔し信玄が歌ひし清見潟の月にはあらねど『唐土の空にも關のあるならば日をばとゞめてたゝかはましを』と申したき心地致し、入相が誠に惜まれ申候、右の次第にて日沒と共に戰闘は中止せられ、我戰隊も所要の方に進み對敵の用意怠りなかりしが、當夜驅逐艇隊は思ひ思ひに敵に迫り夜襲を試みたれば、暗憺たる夜陰の中に閃烈なる電光轟然たる砲聲は、終夜異樣慘愴の光景を呈し申候、此の壯烈なる晝夜の戰闘に於て多少損害死傷を生せし艦艇も有之候へ共、我戰隊特に松嶋は寸毫の損害一人の死傷も無之、天佑とは申しながら艦隊乘員總て健全に有之候條御安心被下度、又右戰闘の結果に就ては詳ならざるも、其夜アスコリツド、ノーウイク及び驅逐艦は南方に逃れんとして第六戰隊の猛撃を

受け、死力を盡して膠州灣に逃げ込み、其後アスコリットは上海に逃れ、ノーウイクは浦鹽に遁走を企てしも、憐れやコルサコフの寒海にて千歳、對馬に擊沈せられ、ツエザレウイッチは進退自由を失して膠州灣に武裝を解かれて世界に汚名を流し、パルラダは擊沈と見え全く行衛不明の有樣に有之、四散遁逃せんとしたる驅逐艦は、或は捕はれ或は坐礁破壞し、戰闘艦五隻巡洋艦一隻及び病院船一隻は、十一日悄慘として漸く旅順口に逃げ込み申候次第に御座候、堂々威風を呈して出動せる露艦隊今は敗衂蹙する所を知らざる悲境に陷り、寧ろ憫然に有之候、先は我軍大勝利帝國萬歳と申すべく候、尚一層奮勵努力有終の戰果を收めんことを期し居申候、(後略)

此の如くして露艦逸出の窮策は全く失敗に終り、却て其勢力を殺ぐの多大なるに至れり、然ればこそ毎に詐言を逞ふして失敗を糊塗するに巧みなる敵將等も、流石に蔽ふこと能はざりけん、左の如く有の儘に報告したるこそ可笑しけれ、即ち露國海軍少將マツセウイツチの公報に曰く。

旅順艦隊は八月十日黎明より出港を始め、午前九時に至り戰闘艦六隻と、巡洋艦アスコリツド、ヂャナ、パルラダ、ノーウイク幷に水雷驅逐艦八隻は、悉く海岸に出航せり、而して日本の第一戰隊は戰闘艦朝日、三笠、富士、八嶋及び敷嶋と、巡洋艦日進及び春日より成り、第二戰隊は巡洋艦八雲、笠置、千歳及び高砂より成り、第三戰隊は秋津洲、

出雲、松島、嚴島及び橋立と戰鬪艦鎭遠幷に水雷驅逐艦約三十隻より成り大に勢力を集中して我に對抗せり、我艦隊は只管日本艦隊の戰列を突過するの目的を以て進航せしが、敵の水雷艇は我進路に浮動水雷を投じ、大に我艦隊の進航を困難ならしめたり、我は四十分間戰鬪の後午後一時に至り敵の戰列を通過し、山東角に向て進路を採れり、敵は全力を擧げて追蹤し來り、終に漸く接近して五時再び戰鬪を開始し、若干時間は彼我孰れも優劣なく、熾に砲撃を繼續せり、戰鬪中我艦隊司令官戰死、ツエザレウイツチ艦長は負傷して人事不省に陷り、同時に同艦は機關部及び舵機を損傷せられ、已むを得ず四十分間停船するに至り、之が爲め他の各艦は其周邊を回航せざる可からざりし、是に於てウフトムスキー公艦隊の指揮を執り、ツエザレウイツチは先任將校に於て艦長を代理し、黄昏に及び同艦は艦隊の後續すること能はざるのみならず、既に之を見失ひたるを以て、單り浦鹽斯徳港に遁走せんと欲して針路を轉換し、夜に入り水雷襲撃を蒙り、天明に及び山東角附近にあることを發見せり、但し夜半より艦長自ら再び全艦を指揮したり、而して本艦は損傷多大にして到底浦港まで達すべからざるを以て、終に司令官より修理の爲め膠州灣に赴くの許可を與へたり、戰鬪中我戰死者は海軍中將ウイッドゲフト、幕僚航海術士官海軍大尉アザーリエフ、參謀海軍少尉エルリス、航海長海軍大尉ドラギチユーウイツチの四人にして、負傷者は幕僚砲術士官海軍大尉ケトリンスキー、先任參謀海

軍大尉ケードロフ、參謀海軍大尉クシンニロフ、巡洋艦長イワーノフ、副長シユーモフ、砲術長海軍大尉ネニユコフ、水雷士官海軍大尉ピルキン及び海軍少尉レオンチエフの八人にて、本官も亦輕傷を負ひたり、但し下士卒の死傷は未だ詳かならず、午後九時膠州灣に入り、同地に於てノーウイク及びペッシユームヌイの二艦に會合せり。此苦戰に際し、將卒上下を通じ一齊に絶倫の勇悍を彰表せしは、親しく目撃したる所にして、茲に之を報告するは本官の最も光榮とする所なり。

尙ほ外國新聞記者がツエザレウイツチを訪問して、得たる同艦員の談話なりとして傳ふる所に曰く。

我が艦隊は敵艦隊の圍を破り、浦鹽斯徳に直進すべしとの命を受けたるものにして、十日旅順口を出發し、午前六時に於て若干隻の水雷艇及び數隻の小巡洋艦を認めたり、バーヤンは沈置水雷に觸接したれば内港に引き還して船渠に入れり、十一時頃に至り旅順港外約二十浬に於て、四隻の甲鐵艦、三隻の甲裝巡洋艦、三隻の保護巡洋艦、約六隻の小巡洋艦、四十隻の水雷艇より成る日本艦隊に會し、戰鬪一時間半に亘り、我が旗艦特に日本艦隊の攻撃を受けたり、然るも能く遂に其圍を破るを得、唯だ他艦艇の運命を明にせざるが爲め、我等は山東に向け汽走せり、日本艦隊即ち我等を追驅し來り、午後四時三十分山東海岸に於て我等を攻撃す、斯くて二時間の戰鬪に依り、我等は具に日本砲

彈の惱ます所となり、日本艦隊亦頗る惱めり、午後五時三十分頃一砲彈我が艦橋上に破裂し、同艦橋にはウイットゲフト提督、その參謀および若干の將校起立し居たり、提督の遺骸としては僅に其兩脚を發見し得たるのみ、艦橋たる要するに航海術將校及び三謀將校等に取り名譽の死處たらざるべからず、旅艦副長一名戰死し、參謀長マッセウイッチ提督を初め各將校盡く負傷し、その負傷せざるものは僅に一名あるのみ、艦長は腕部に負傷せり、然るも我等は再び日本艦隊の圍を破るを得、日本艦隊は我等を追擊する能はざりし、我等の目的は浦鹽斯德に赴かんとするにありたるも、舵機を損じたるが爲に、止むを得ず青嶋に入り助力を仰ぐに至れり、現在の情態に於ては出航すること能はず、之に必要なる修繕を加へたる後出航するを得るものなるや否やは不確なり、損害は戰死十二名負傷四十名にして多くは輕傷なるもマッセヴイッチ提督外八名は重傷なり、是等は何れも青嶋病院にありと云々。

以て知るべし、其損害の如何に多大なりしかを、而して此役芝罘に遁竄したる敵國驅逐艦レシテリヌイ捕獲に關しては我が行動の固より公法上一點の非難すべき所なきは勿論なりと雖も、狡猾なる敵將の常として レシテリヌイ艦長が露帝に電報したりと云ふ所を聞くに。

本艦（レシテリヌイ）は旅順より重要なる通信任務を帶び、二重の封鎖線を通過して芝罘に着したり、本官はアドミラル、グロウイッチの命に依り、同艦の武裝を解き且つ我旗を撤去し、其他一切の手續を適法に履行したり。

本官八月十一日より十二日に亘る夜間同港にありし際、日本人より海賊的攻擊を蒙りたり、彼等は水雷艇二隻及び巡洋艦一隻を以て本艦に接近し、而して恰も我と談判を爲さんとするが如く、一士官の指揮の下に一隊の兵員を送り來れり、本官は之に抵抗すべき武器を有せざりしを以て艦體爆發の準備を命じたり、日本人が自ら其國旗揭揚を爲し始めし際、本官は日本士官を毆打し、彼を海中に投じたり、續で本官は乘組兵員に命ずるに敵を海中に投ずべきを以てしたり、然るに我は力及ばずして日本は我艦を拿捕するに至れり、爆發は機關室及び艦の前部に於て起れり、併し艦體は沈沒に至らず、遂に日本人の爲めに港外に持去られたり、機關士一名火夫一名及び外四名輕傷を負ひ、本官も亦右腿に負傷したり云々と。

然れども事實は全く之に反せり、即ち我犬本營幕僚の報告に依れば左の如し。

第一驅逐隊（司令中佐藤本秀四郎）の朝潮（艦長少佐松永光敬）及霞（艦長少佐大嶋正毅）は八月十日夜四散せる敵艦隊を捜索の爲め巡行中、遙に敵の驅逐艦らしきもの一隻西方に急航するを認め、直に之を追擊したるも、夜暗の爲め其綜跡を失せり、尙翌十一日に亘り捜査を續行して其芝罘に潛入したることを知りたるを以て、附近領海外に漂泊して其出港を俟ちたるも日沒後に至り尙出港せず、藤本司令は敵驅逐艦が夜陰に乘じ出港して

我艦隊又は商船に危害を加ふべきを慮り、朝潮及び霞を率ゐて芝罘港に入りたるに、敵艦はレシニテリヌイにして未だ武裝を解きたるの形跡なきを以て、海軍中尉寺嶋宇瑳美を遣して敵艦長に對して明日未明までに港外に出づるか又は降伏するかを直接に交渉せり、然るに敵艦長は之に應せず、問答中部下に向ひ機械破壞發砲發火と命令しつゝ、突如として寺嶋中尉を抱へ共に海中に投じ、其他の一敵兵は我通譯を突飛ばし之を抱て共に海中に投じ、其他の敵兵も同時に我に對して抗敵行爲を始めたり、此間前部彈藥庫附近に於て火藥爆發し、爲めに我派遣員死傷するものあり、茲に於て我は終に敵艦を捕獲し之を曳き歸れり、我死傷戰死下士一、重傷下士以下四、輕傷朝潮乘組寺嶋中尉、通譯及び下士以下九と。

即ち知る彼が巧に口舌を以て事實を湮造し、以て列國の同情を得んとするの慣用手段なることを。

日本海の大海戰

旅順に於ける敵國艦隊か怯懦殆んど爲すなきに反し、縱令ひ其行動の正々堂々ならずとするも、再三再四、或は北海を却掠し、或は元山に或は對馬沖に其都度若干の功果を收め、或は金州丸の如き或は佐渡丸常陸丸の如き比較的我に多大の損害を與へ、而かも幸にして優

勢なる我が艦隊との遭遇を免れ居たる浦鹽艦隊も非運漸く廻り來りて、折しも旅順口艦隊が黃海に大敗北せし後數日ならず、蔚山沖に於て我が上村艦隊の爲めに發見せられ、友艦リユーリツクは其擊沈する所となり、他の二艦ロシヤ及びクロモボイ等は、今後再び出港する能はざる程の大打擊を被り、命カラ〳〵浦鹽港に逃げ還るに至りたるこそ氣味好くも亦哀れなり、其概要は前編所揭の公報に依りて知るを得べきも、尙ほ同海戰に於ける我艦隊司令長官上村中將の談話は、必ず一讀せざるべからざるもの、即ち左の如し。

戰爭は今が半ばなれば委細を語る能はず、一身上に關しては如何なる攻擊を受くるも少しも厭はず、只軍事上に就ては遠慮なく書き出さるゝときは、僅の事にてもヒヤ〳〵する事あれば、新聞の記事等には特に注意ありたし、抑も我艦隊は斯る重大の任務を帶び居るものなれば、露艦が東方の海岸に出て暴れ廻り、爲めに我商船の一二を失ふ事あるも暫く忍ばざる可からざるものあり、曾て我艦隊は或任務の爲めに十日間の航程にて或方面に赴きたる際御命令により俄に引返して某地點より東北六七十浬の海上に遊弋したれども、目指す艦隊にも逢はずして、空しく南方に徐々引返し來れる折柄、夜も未だ全く明け切らず、追々白み來り一天將に晴れ渡らんとせり、十四日の午前五時頃、敵艦三隻我に先ち南下し居るを認めたり、されば眞夜中頃には途中にて擦れ違ひとなり、彼我共に相並びて航行し居たるなるべきも、夜陰といひ廣き海上の事なれば少しも氣付かず、夜

明に至り而も警戒し居りたる我對馬海峽の方面に於て敵艦を發見し得たるは、是れぞ全く陛下の御稜威に依ると申す外なし、若我艦隊にして尙ほ一時間東北海上に索艦し居たらんか、敵艦をして安々と逸出せしめたるやも知る可からず、此時敵艦は飽く迄も通り行かんとするならんかと思ひ見てある中に、我艦隊の追尾し居るを認むるや否や、急に艦首を廻して北方に引返さんとしたるより、我艦隊は折柄東北に耀き渡る旭光を浴びて敵の前面を壓迫せしかば、敵艦は旭に向て狙ひを定め發砲するの止むなきに至り、我に利ありて彼に非常の苦痛を與ふるが故に、戰艦隊は絕えず此陣形を利用して敵艦に迫れり、敵艦は速力遲きリユーリックを殿艦とせし爲め、我艦隊の包圍中に陷りたるリユーリックを見捨つるに忍びずして、屢〻之を救ひ出さん爲め不利の位地に陷るを知りて幾度となく回航し來るより、益〻我艦隊の射的となり少なからざる損害を受けたるならん、されど十八節以上の速力にて出來得る限り必死に戰ひたる勇氣と、膽力ある敵艦の行動には敬服したり、更に感じたるは、遠が歐洲人の氣質として人命を重んずるの一事なり、リユーリックの將に沈沒せんとするや、既に兩手を失ひ片足を捥ぎ取られたる者にても、其體を材木に縛り置きて一命を全うせしめんとしたる如き、其の計畫の行渡れるには我艦深く感嘆せり、故に我下士卒等も捕虜の收容には大意にを用ひ、苟も生物とあれば鳥類までも運ばしめたり、出雲艦に收容したる小鳥は、能く人に慣れたるものなれば動物

園にても獻納せば一興ならん、我國の將卒は事既に茲に至りたると見るや、直に割腹するを常とすれども、彼等は死に至る迄任務に就き職務と共に倒るゝの覺悟あるの一段に至りては、露兵と雖も決して侮り難き者あり、現にリユーリックの沈沒する迄も發砲し居りて、各自の任務は充分に盡し終りたれば、今後は捕虜となるも餘命を全うせんとしたるものにて、彼等は確に軍人たるの常務を盡したりと自認し居れり、是れには自分も同情を表して尊く認めたり、其他捕虜と爲りたる露國士官に向ひて、露國內情を質問するも、露國將校にして云ふべき限りに非ずと答へ意氣昂然たる如き、眞に士官として恥しからぬものあり、敵艦の損害に就ては判然せざるも、火災を起し砲門を破壞したるを見ても、其戰鬪力を失ひたるは確かならんか、修繕終れば彼等は再び來り戰ふならん、恰も矢創を受けたる手負猪が隅に寄りて睨み居るに等しく、一息つきたる後又々駈け出せば死物狂ひとなりて荒れ廻るべきにより、我艦隊にても餘程注意し居らざるべからず、リユーリックにては艦長先づ倒れ、副長次で戰死し、次に航海長代りて指揮せしが、捕虜大尉の一人は、若しも其時航海長戰死せば今度は自分の番となる筈なりしに、遂に御鉢廻り來らざる內沈沒したりと言ひ居れり云々。

尙は此役最も奮戰せる殿艦磐手に坐乘し居たる、三須海軍少將の談話を下に摘錄せんに、

同少將は曰く。

やつて仕舞へばそれまでなれども、遉るまでがなか〳〵むづかしいもので、愈〻砲戰を開くそれまでの間は、頗る苦心しました、敵は戰ひをする積りでないから困る、たゞ我艦隊の勢力を分つと云ふ人騷がせを目的として、荒れ廻つて居るのであるから、此方からは却て相手にしにくい。

敵艦は最初より我國の海岸を荒らし廻はるのを目的として居つたであらうに、彼が此頃になつて暴威を振ひはじめたのは、彼に取りては寧ろ遲かつたのであるかも知れぬ、船の構造より見るも、速力多く炭載量大にして、長途の航海に堪ふる仕組であるから、最も能く巡洋艦としての性質を發揮したので、先方では偉功を奏し好績を得たりなど、大に喜んで居たであらう、我國に取つては少なからぬ損害を受けるのであるから、一日も早く此厄介物を打ち沈めてやりたいと思ふものゝ、我艦隊にも夫々の任務もあるから、ソコに來たコ、に來たと云ふて、無暗に追廻はして歩く譯にも可かぬ、元山沖の時にも常陸丸遭難の際にも、今度は確かにめぐり逢うであらうと、隨分氣を揉んで捜がしたが見あたらない、その時には實際濛氣が甚だしかつたので、何でも元山方面に逃げたであらうと夜を撤して追ひ駈け廻はしたが、翌朝霧晴れて視界は一面に廣くなつたけれども居らない、シテ見るとマタ沖ノ嶋附近にうろついて居りはせぬかと俄に氣にかゝる、尤も夫には相應の準備もあるから、ソウ無暗に逸出するものでもない、ソコでその邊にう

ろついて居たとすれば、歸航の途中に出會ふかも知れぬと、針路を轉じて往路と反對の航路を索敵運動しつゝ引返して來た、日本海も地圖を見るとは違つて廣い所であるから、容易く分る譯のものではないけれども、我艦隊おの〳〵警戒して充分に幅廣く展望の距離を執りつゝ南下したれば、居る以上はどこかで見當るに相違ないと、大に望を屬して來た所が、ナンノ此時敵艦は既に日本の海岸近く廻航して、北海道方面に往つて終つたので、實に失望した。

それに假令敵艦が見當つたにしろ、盡過ではどふすることも出來ぬのである、煙が見えたと云つた所で、向ふで逃げれば十浬も十五浬も離れて居るのを、戰闘線内にまで近附くには、彼我の速力の差如何に依つて餘程時間を要する、その中には日は暮る、どふも戰爭となつては敵が弱いからと云つて、獨りで相撲を取る樣な譯には參らぬ。

此間に於ける敵艦の損傷は案外に多大であると思ふ、敵の公報にはロシヤ號の損傷十一箇所とあるよう新聞に見ゆるけれども、其實幾數十箇所の中で最も大なるものゝみを數へて、其他のを抜きにしたのかも知れぬ、敵の砲彈は澤山來たけれども多くはそれ玉で、命中したのは至て少ない、よし當つたのもあるにした所で、何でもない所を通り過ぎたのが多いから、我艦隊では人よけ玉と云つて、敵の砲彈は成る可く人の居らぬ所を探して歩いて居るのであらうと笑つて居る、敵艦の損傷は大なるも修繕が出來上れば、マタ

來り戰ふであらう、六月二十三日にレドヴイザンが出で來た樣なもので、未だ〳〵決して侮ることは出來ぬ、損傷は大なるも修繕すれば十年持つものは八年もしくば九年しか持たぬと云ふ樣に、命數には影響するかも知れないが、一時の戰鬪力には差したる關係はないものである、その中には本國に在る他の艦隊も出で來ぬとも限らぬ云々。

此役殿艦盤手か最も奮戰したることは、前に記せる如くなるか、同艦分隊長水谷大機關士か其實兄に寄せたる書は、最も能く其狀を知るに足るへくれは、即ち之を下に抄錄す。

行動の辛勞を知るに足るへくれは、即ち之を下に抄錄す。

（前略）小生は本月十二日頃より風邪の氣味にて大分心地惡しく、爲めに私室に於て休養致居り候、十四日の朝の如き前日來能く眠りたる爲め午前三時頃より醒め眠に就く能はす、早や曉近くなりし模樣なれば、私室の艦窓を開き涼を採りつゝ心地よき朝風に浴し居り候處、突如敵艦見ゆと大聲を發し走るものあるを耳に致候へど、又々例によつて二十浬位も遠方に見ゆる敵艦にて、終日高速力にて追擊を試むるも得る所なく終ることなる可しと打案じつゝ、寢衣を脫し夏服に更衣し、上甲板に出で雙眼鏡にて南西の方向を望めば、僅に九千メートル位の距離にて確に浦鹽艦隊三隻を手に取るが如く眺むるを得たれば大喜にて之が配置に就き、人員を取調べ諸所の巡視を了へ、高速力の準備完く成るや、戰鬪の喇叭は吹奏せられ同時に打方始めの號音あり、間もなく第一回の發砲あり、

續て速力增加と共に機械の回轉は漸次增加せられ、殆ど全速力に至り、汽罐の蒸氣在力も稍や降下の有樣を呈せり、依て總員を配置に就け、自分は中央汽罐室に在つて專ら汽罐全般の指揮を採り、愈〳〵千歲一遇の戰鬪に入り申候、時正に午前五時二十三分なりき、僅に數分前迄には朝鮮海峽の浪靜かにして軟風吹ける涼しき海上も、忽ち變じて一大修羅場となり、各艦の砲臺より打出す砲彈は恰も百雷の一時に落つるが如く、四周を蔽ひて雲霧を生ずるかの如く、引續き發射せる砲彈の閃光は電の如く、艦の附近に落下する敵彈は悽じき水煙を揚げ波浪雪の如く、甲板上は忽ちにして鮮血迸るの壯絕悽絕なる光景を演出致し候、蓋し其眞景に至ては到底拙筆の能く盡くす所にあらずと存候、此の如き有樣にして交戰中は常に殆ど全速力に近き速力を以て駛走することなれば、機械室にあつては各重要の運動部に澆水することなれば、機關長を初め衆卒濡鼠の如くなりて、一分時間に百四五十も旋回することなれば、其危險なる眞に手品師の申す七分三分の兼合といふ有樣、何時何れより如何なる故障起るやも計られ申さず、其間常事者の心蒲は是れ又筆紙に盡くす可くもあらず、尙ほ汽罐の蒸汽在力は漸次降下の方に傾き易く、如何なる危險に立至るやも計られざれば小生の心痛も亦他人の想像以外と存候、併し自分は幸に本艦のことには熟練せるもの故自信も隨て强く、少しも狼狽することなく、能く衆を勵まし汽罐の監督に從事致候、亦部下の士卒も約五時間の長時間朝食もなさず、

温度百二十度位の室内に在て間斷なき激しき勞働に堪へ申候、且つ石炭繰り出し或は焚火に際し、粉煤室内に飛揚し著しき時は室内暗憺として四周能く辨ぜずと云ふ有樣にて、常人は到底呼吸も自由ならざる位、其間或は諸所より蒸氣噴出することもあり、或は敵彈の爲め故障を起すこともあり、一々急速修補をも加ふる等悽絶壯絶の裡沈着事に從ひ、繁忙極まりなき下士卒の勞苦と心配とは是れ亦常人の想像だも及ばざる所にて、今回の大勝は彼等の血の如き流汗と虹の如き慘たる呼吸との賜ものとし、深く感謝に堪へざる所に候。

此の如き戰鬪危險以外に非常なる危險を冒して高速力の發展に從事せる機關部員中、特に汽罐の配置に在る者は、最も早く疲勞するものにして、前述の如き間斷なき勞働以外に非常に神經を勞すること多く、汽罐より蒸氣の奔流する音、石炭を出し之を割る音、焚火口の扉を開閉する音、蒸氣の噴出する音、諸道具を使用する音、艦より打出す彈丸の音、敵彈の命中せる響等種々相混ぜる喧擾なる音響心神も喪失せん許りなり、而も我艦隊は打揃ひ高速力を以て常に敵艦隊を制し、有利なる戰鬪を繼續したれば、砲火を交へてより間もなくリユーリックは舵機を損じて進退自由ならず、且つ其速力のロシヤ、グロモボイより劣る爲め、兎角遲れ勝にして我砲彈集中の好標的となり、將に沈沒の域に至りたれば、之を聞きたる下士卒は何れも勇み立て、勇氣百倍して遺憾なく立働き申候、引續きロシヤ、グロモボイも大火災を起し、慘狀目も當てられぬ程度迄損傷を受けたるもの〻如く、愈〻吾々が追擊は猛烈を加へ申候。

小生は今回の戰爭程滿足を覺えたること無之候、其は最も完全に重要なる己れの責任を盡くし得たるを以てなり、凡そ近代の海戰は砲火と速力との戰鬪にして他は寔に其附屬物に過ぎず、殊に巡洋艦にあつては一層其の然るを覺え申候、近く今回の海戰に徵するも、敵艦リユーリックをして尙ほ二浬丈け多〻の速力を出し得る者とせば、或は沈沒の難を免れ得たるもの〻如く、幸に彼れ十八浬の全速力にして能く其の計畫速力を出したるも、前方の二艦に及ばざること遠く、終に力及ばずして孤立の有樣となり、吾集彈を受けたり、亦吾艦隊にありても常に機關の操縱宜しきを得たればこそ、集彈を以て能く敵に當るを得たりしなり、若し不幸にして一艦の後る〻もの有らんか、遂に敵艦多大の損害は輕微の損害と變じ、或は敵の一艦をも擊沈し得ざりしやも計られず、即ち人智の程度今日の如くにして形成せらるゝ軍艦にあつては、砲と速力は唯一の武器にて、他は寧ろ其補助に過ぎず、極言せば砲と速力以外のものなくとも、或期間戰鬪の目的を達し得ずとせず、而も今の世人は軍艦の砲力の重要なるを知て、速力が如何に重要なるかを知るもの少なく、大砲水雷あらば軍艦の資格あるものと思惟せるもの〻如し、(中略)某雜誌に隱れたる戰功者として某艦機關長の肖像を載せたるが如き、是れ亦誤れるの甚

だしきものにして、何故に隱れたるものと云ふか、畢竟甲板下の密閉せる室内に有て直接砲火を受けざるを以て隱れたりとするか、此の如くならば司令塔内にあるもの亦隱れたる戰功者ならざるべからず、誠に矛盾の甚だしきものと被存候、是等は軍艦の狀況に暗く如何にして其戰鬪力を發揮し得るものなるかを知らざるの致す所にして、大に諒とす可き所あれども、抑〻亦重要なる戰鬪者を社會に紹介するの方法を愼重にせるものと云ふ可からず、彼の蔚山沖の海戰の勿論其以前輕跳なる人士より多〻の攻擊を受けたる時期にあつて、吾艦隊の間斷なき索敵行動に從事し、其間二回敵艦に近接するの時機を得、長時間高速力を以て馳走せる時、最も多き苦心と勞苦とを敢てせし者は、艦隊の幹部と機關部員にありとす、然れども不幸にして天候等の爲め敵艦を逸すること一再ならず、痛嘆遣る方なきに當り、如上の苦心慘憺たる狀況に想到せるもの果して幾人かある、小生は軍艦乘員の大部分を占むる機關兵の爲めに悲まざるを得ざるなり、多〻の新聞雜誌は常に吾砲力の猛烈にして射擊の巧みなるを稱揚し、艦の操縱を破嘆するの記事を連載するも、戰鬪中數多の艦船が毫も其全速力發展に際し、機關の故障を生せず能〻吾戰鬪力を安固ならしめて、遺憾なく彼のリューリックに似たる不幸を見るが如きものなきに及びたるものなし、即ち常に有利なる位置にありて戰ふことを得せしめたるに與つて力ある、多〻の機關員及び機關兵に向つて何程の尊敬と慰問とを與へたるか、乞ふ少しく

反省熟慮する所あれ（後略）。

余が茲に此書簡を紹介するもの亦實は此水谷大機關士が言ふ所を諒とし、海戰に於ける機關部員の多大なる勳功の、決して他の戰鬪員に讓らざることを世人に知らしむるの微意あるに依るなり。

余は是れより例により、此大海戰に於ける敵將の報告を下に揭げんに、アレキシーフ大將は曰く。

日本艦隊と會戰後露艦隊は將に北方に逃去せんとする時、リューリック舩機を損ぜられたる旨信號せり、我艦隊は極力リューリックの救助を努めしも、其見込なきを知りたるを以て、アドミラル、エッセンは浦鹽に向ひて航路を取るべきことを艦隊に命じたり、グロモボイ及びロシヤ二艦は、北東に進航しつゝ戰鬪を繼續せしが、該航走中の交戰二時間に亘れり、右二艦ともに損害を被り、殊にグロモボイは其汽罐及び煙筒に大損傷を受けたり、水線以下又は水線附近に砲彈を蒙りたること、ロシヤは十一回、グロモボイは六回なり、右兩艦の死傷將校は全員の半數、下士卒は同じく四分一に達したり、右下士卒の數を精確に云へば、戰死者百三十五名、負傷三百七名なり、兩艦は應急修繕をなしたる上航行して本月十六日浦鹽艦隊司令官エッセン少將の報告最も能く之を盡せり、而して其詳細なるは、浦鹽に歸着せり。日く。

八月十四日未明ロシア（旗艦）、グロモボイ及びリューリック釜山と緯度を同じくして同地を距ること四十二浬、對馬の北方燈臺を距ること三十浬にあり、時に余は裝甲巡洋艦より成る日本の一艦隊が、我西北六浬に當り我と並行して同一針路を持せるを發見せり、右の艦隊は弩手型の軍艦四隻より成り、北方に針路を取りしが、速力優越なる敵は直ちに轉廻余は大海に出づるの目的を以て、全速力を以て航走せり。

して我と同一の針路を取れり、故に余は餘儀無くと戰闘をなさざる可からざるに至れり、戰闘は午前五時六十ケーブルの距離を隔てゝ開始せらる。

海峽の南方に當り、余は浪速型二等巡洋艦一隻の來り會せんとするを見たり。

好機會を得るや朝鮮沿岸に達せんが爲め直ちに右舷に回轉し、且つ速力を十七節に增し

て略ぼ目的を達するの機會を得たるが如くなりしも、敵は此時吾人の目的を看破し、之を妨碍せんが爲め、吾人に向ひ其針路を轉ぜり。

五分間ならずしてリューリックは列後に落ち、信號するに其舵機の破損したることを以てせり、余は「機關を以て運轉せよ」と答へ、依然として以前の針路を持續せり。

余は敵艦が凡て其砲火をリューリックに集中しつゝあるを發見したるを以て、自後余の行ひたる運動は、專らリューリックをして航機を修覆せしむるの目的にして、余はリューリックを掩護する爲め余の艦に對し敵の砲火を牽制せり、此時余は二等巡洋艦一隻、三

等巡洋艦一隻の敵艦隊に來り合せんとするを見たり。

リューリックは「運轉する能はず」との信號旗を揭揚したり。

前列に於ける回轉運動は、リューリックをして朝鮮沿岸に赴かしむるの機會を與へたり、午前八時余は「東方に行け」と信號し、リューリックは之に從ひ全速を以て此針路を取れり、艦首に立ちし波より見るに、全速を出したるものと信ず。

玆に於てかロシア、グロモボイは、互に四十二ケーブルを距てゝ北方に針路を取り、リューリックは三浬を距てゝ略ぼ南東の針路を取り居たり。

此狀態を以て戰闘の持續すること二時間、吾人は著大なる損傷を被れり、ロシアは煙突三基を寸裂せられつゝ高度の蒸氣を維持する能はず、且つ汽罐中其三箇は用を爲さゞるに至れり、午前九時三十分リューリックは著しく後れ始め、再び艦首を海岸に轉じ一方來援したる敵の二等巡洋艦二隻と戰ひしが、間もなく沈沒し始めたり、上村中將は裝甲巡洋艦四隻を以て吾人を攻むることと甚しく、吾人をしてリューリックを援くる能はざらしめたり、リューリックの尙ほ戰闘せる時吾人は絕えず敵を北方に誘致せんとするに力めたり、是れリューリックが比較的弱小たる敵艦二隻を殄滅し且つ舵機を修繕したる後獨立以て浦鹽に歸來することを得可しと豫想したるを以てなり、十一時前敵の砲火は最も猛烈なりしが、敵艦は五時間の後凡て吾人を捨てゝ去れり、是れ吾人が一般に怪む所

なり。

ロシアは水線下に十一箇所、グロモボイは六箇所の穴を穿たれ、兩艦とも半數以上の將校を失ひ、兵士の損害は二割五分に上れり、而して玆に再び戰鬪を試み若しくはリユーリツクに赴かんとするは不可行のことに屬したるが如くなりしを以て、海上の穩なるを幸ひ機關を止め、浦鹽に歸航することを得せしむるが爲め、損傷の修復に着手せり。

ロシア艦長ベルリンスキー大佐は戰死し、部下の將校若干名亦負傷せり、グロモボイにありては大尉二名戰死し他の諸將校は負傷せり、兩艦を通じて兵士の戰死百三十五、負傷三百七にしてベルリンスキーは海上に葬れり。

失敗を糊塗するに巧みなる敵將の報ずる所尙ほ此の如し、以て其損害の度の如何に大なるかを知るに足るべし、果して爾後浦鹽艦隊は再び活動を試むる能はざりしなり。

ノーウィクの最期

日露開戰以來旅順口の敵艦隊か、何れも怯懦遁竄を事とし、毫も鬪志なきが如くなるに似もやらず、僅に三千噸に過ぎざる小巡洋艦を以て毎に陣頭に立ち、奮戰勇鬪屢〻我が艦隊を艱ましたるものこそ、實に此のノーウイクなりき、即ち彼は二月九日の海戰を始めとして、二月二十四日三月十日同二十一日四月十三日同十四日、苟くも我主力艦隊が砲擊を試むるに當りて、彼れの突出せざることなきのみならず、或は我驅逐艦水雷艇を病まし、或は我陸軍を砲擊し其擧動の堂々たる、屢〻我將士をして感嘆の聲を發せしめ、加之本月十日僚艦と共に港外に脫出するや、獨り重圍を逃れ太平洋を迂回して遠くコルサコフに至りしも、遂に千歲對馬の二艦に發見せられて潔き最期を遂げたるが、今其狀況を叙するに當り、聊か其艦歷を述べて勇者を弔ふの意を表せんも亦武士の慈なるべし。

彼れは西曆千九百年（明治三十三年）獨逸シーショー會社に於て、三百十四萬九千三百十三留の費用を以て起工せられ、同千九百一年の歲末に竣工しにる二等巡洋艦にして、排水量三千噸、一萬八千馬力にして、一時間二十六海里の快速力を有し、四、七吋砲六門四十七ミリ砲八門三十七ミリ砲二門水雷發射管六箇を備へ、實に露國海軍第二期大擴張の設計に依り建造せられたるものなり、而も其艦形の計畫は全然故マカロフの理想に適合したるものにして、僚艦中に嶄然一頭角を現はし、アスコリツドと共に露國海軍軍人の常に誇稱する所なりしが、竣工の翌年九月二十九日、クロンスタットを出發して旅順艦隊に合すべく東航し、今回の破壞沈沒に至るまで役務に服して、其職に盡瘁せること一年十一箇月、其間我艦隊若くは陸兵と砲火を交ふること實に十餘回、就中彼が最も勇敢なる擧動を示せるは二月九日に於ける我艦隊總攻擊の際にして、當時七隻の戰鬪艦六隻の巡洋艦十三隻の驅逐艦等は、傲然砲臺の下に碇泊して、東洋の天地を睥睨しつゝありし其一刹那「勝敗の決

此一戰にあり各員一層奮勵努力せよ」との千歳不朽の信號旗を掲げし旗艦三笠の指揮の下に突進し來れる我聯合艦隊の猛烈なる砲撃は、彼等をして周章狼狽爲す所を知らざらしめたるに、彼れノーウイクのみは從容として錨を抜き、大敵に向つて抗戰し、一度は水雷を發射するまでに近寄り來りしと云ふ、然れども彼が斯くの如く大膽に、此の如く敏活に運動し得たるものは、決して艦質のみに因るにあらずして、別に之を操縱する艦長其人の精神と技量とに賴らざるべからざるや論なし、而して此敬すべき艦長は、海軍中佐フオンジヤッセンにして、彼は實に旅順海戰の功に依り、グオルギー勳章（我金鵄勳章に當る）を賜はりたる名譽の勇者なり。

此の如く敵艦隊に珍らしく始終勇敢なりし彼も、武運の末の拙なさは如何とも詮方なく、遠く北海の果にまで逃れ來りし甲斐もなく、哀れ墓なき最期を遂ぐるに至りしなり、今同艦長の報告なりとて、八月二十五日聖彼得堡發電に曰く。

八月十日ノーウイクは水線下に三箇の穴を穿たれたるが、戰鬪後艦はアスコリツドと共に日本艦隊を切抜けたり、然れども濃霧幷に機關修繕の爲めに招きたる遲延の爲め、余（ノーウイク艦長）はアスコリツドを見失へり、八月十一日余は石炭を搭載す可く膠州灣に入り、翌十二日日本を迂回して浦鹽に向ひ同地を出帆し、八月二十日コルサコフに達せり、同日四時余は新高型の敵國巡洋艦を認め、出港して之れと會戰せり、戰鬪四十五

分にして、ノーウイクは水線下に三箇水線上に二箇の孔を穿たれ且つ舵機を破損したり日本艦は戰鬪を止め電信を發し始めたり、戰鬪の了る頃我汽罐にして故障なきものは六箇あるのみ、加ふるに舵機の損傷を以てす、余は檢査を爲す可くコルサコフに歸らざる可からざるに至れり、蓋し余は其後夜を以て再び海上に突出するの計畫なりしが、檢査を爲すに及び舵機の到底修繕す可からざるを發見し、且つ敵艦若干隻の近接し來るものあるを以て、余は斷然淺洲に艦を沈沒せしむるに決し、將校幷に必要品は之を海岸に運べり、八月二十一日須磨形の巡洋艦は船の水上に現はれたる部分を砲撃せり、十日に於ける我死傷は水兵二名戰死し、軍醫一名負傷し、二十日に於ては戰死水兵二名輕傷十五名なりき。

尙ほ此攻撃に關し高木千歳艦長の談話に曰く。

千歳艦は十日の旅順海戰に參加したる中膠州灣に向ひ、敵艦追撃を目的にて警戒し居る際、十三日ノーウイクが濟州島附近を通過せしとの情報に接し、俄かに對馬海峽方面警戒の命の爲め某所に向ひたる途中、十四日午前濟州島附近の黑山嶋沖を通過せし時、ユーリック撃沈の快報を聞き、一同滿足して十四日午後某所に着し、程なく函館警戒の命に接し、直ちに日本海を直航し、十八日午後一時頃函館に入港し、種々捜索せしに、敵艦通過の速力より打算すれば、十八日頃には是非共此地を通過すべき筈なるに、其模

様なきを以て、三度宗谷海峽警戒の命を受け、十九日の朝函館を出發して進行の途中、敵艦國尻水道通過の情報に接し益〻航程を進めたり、二十日未明禮文島の北西に達し、彼是捜索せしも敵艦を見ず、此時對馬も後より來り共に手を分ちて索敵せしが、朦氣烈しく殆んど四海里の先を見る能はず、同海峽は二百海里に渡りて展望極めて困難なるも千歳は總ての點に於て勝れるものあるより、廣き方面を受け持ち、共に索敵せしも敵艦見えざるより、千歳は海峽監視の任務に當り、對馬をしてコルサコフ方面に向はしめたるに、夕刻に至り對馬より無線電信にて敵艦發見の報に接し、直ちに戰場に向ひたるも夜に入りたるを以て、敵艦の快速力と暗夜とを利用し逃走の虞あるを憂ひ、千歳自から港外を警戒し對馬をして海峽を監視せしめ、戰闘配置の儘徹夜警戒を加へ、二十一日未明港内に進めば、敵艦は已に陸岸近く擱岸し居るを見て安心して其模様を見るに敵艦には乘組員居らざる模様なるも、乘組員收容の爲めか又は荷物揚陸の爲めか一隻の小蒸汽にて數隻のボートを曳き行を見たり、之より公報にあるが如く敵艦を撃沈し、歸途に就きたり、思ふに敵艦の擱岸したるは對馬の砲撃にて損傷を受たる爲めなるべきも、敵にして押強く逸出せんには容易に逃げ出し居たるやも知り難けれども、敵は我對馬にて無線電信をかけ居るを知りて、對馬の外更に夥多の軍艦港外に警戒し居るものと推し、到底逃れ難きを悟りて自から爆發し陸上に逃げたるものならん云々と。

又同艦長は東伏見宮殿下御精勵の樣及ひ索敵の困難に付き語りて曰く。

申すも畏れ多きことは、東伏見宮殿下の御勤務に御精勵あらせらるゝの一事で、我々は唯恐縮し奉るの外なし、抑〻軍艦に於ける副長の任務は、萬般に付き艦長を補佐すると同時に、又主として艦内行政の煩務に就き直接命令を下し、一艦内萬般の整理上艦長を して顧慮せしめざるに在り、之を一家に譬ふれば、恰も家族の多き間に立ちて主として家政を整理する主婦の如き任務に當りて、最も煩はしき役目なり。

今日までの實例に徴すれば、一度副長の職を經由するに非ざれば艦長に任ぜざるの慣例ある如くなるも、我々の考にては各皇族方の軍務に服せらるゝは、御階級と順序とに從ひ、一軍一隊の主腦となり、常に之を指揮活動せらるゝに足るだけの御研究をなさるれば充分にして、指揮官の補佐役たる一艦の副長とか、又は軍隊の副官參謀などゝ稱する煩務までも、強ひて深く御勤務遊ばさるゝの必要あるまじと思はるゝに、依仁親王殿下には前陳の如き煩務の副長に就かせられて、實に御厭ひなきのみか、艦内にて衣食住の總てが普通一般の將校と毫も異なることなきまでに、御不自由を忍ばせられても御勤務あらせらるゝに至りては、我々は實に感泣するの外なし、世の飽食暖衣者は深く此邊の事を鑑みられんことを切望するものなり、それのみならず殿下が副長としての御勤務は萬事周到毫厘も行屆かざる所なく、及ぶ限り御精勵あらせらるゝに至りては、艦員一同の

敬服し奉る所にして、内地に寄港せし際にも、斯く迄御精勵あらせられては、御衞生上如何あらんかとも思はるゝがゆゑ、專任將校に御一任ありて御上陸あらせられては抔御勸め申上ぐることあるも、殿下には全く御職務を終へさせ給はざれば御上陸あらせられず、實に恐懼の至りと云ふべく、國民たるもの〻深く推察す可き所なり、内地寄港の際土地の有志者もしくは官吏等本艦訪問の際、殿下に拜謁を希望するもの多けれども、斯の如きは皇族の御資格と副長の御職務を混同視し、艦長の意に依て拜謁し得るものと心得居るものあるは事理を解せざるものにして、艦長の迷惑この上もなし。

ノーウイクの索敵に就ては隨分苦心もせしが、元來ノーウイクと本艦とは、常にかたき役なりし、我驅逐隊が港口近く偵察に赴くや、彼のノーウイクは自家の速力をたのみて追ひ駈け來るより、我驅逐隊の退却するその代りに本艦が出で〻追ひ廻はすと云ふ順序で、本艦の彼を視る尙ほ猫の鼠に於ける如くにてありし。

凡そ海上に於ける索敵法は、海軍の戰術中最も難事にして、單に敵の行動を想定して我の行動を定むるの外に手段なく、各國とも此方法の研究に汲々たるも、未だ得る所あるを聞かず、茫々たる海上にありては、視界僅に十五浬に過ぎざれば、若しも敵の行動に對する想定にして誤らんか、如何に奔走するも到底人力の得て及ぶ可き限りに非ざるなり。

又敵の行動に對する想定なるものは、俗に云ふ「あてずつぽう」にして、一定の理由あるに非ざれば敵にして想定以外の行動に出でんか、我に在りては之を如何ともする能はず。

これ陸上の索敵と全く其趣を異にする所以にして、陸上にては如何に多數の道あるも索敵し能はざることなきに反し、海上にては到る處道路あるを以て、最大視力を十五浬として海面上に道路を畫かんか、之に依りて索敵すべき艦數果して幾隻を要す可きや、況して前後を見分け難き例の濃氣ある時をや、今回ノーウイクの索敵に其効を奏したるは各方面より拔目なき情報を得たると、所謂「あてずつぽう」の想定が抽籤に當りたる如くに都合よく當りたる結果にして、彼のノーウイクがコルサコフに寄港したるは、彼には運の盡きたるものにて、我に取りては實に天佑と云ふの外なし云々。

遼陽の大決戰

遼陽城は實に敵軍の根據地として死守したる所、而して敵の滿洲軍司令官クロパトキン將軍は大本營を此處に置き、自ら二十有餘萬の大軍を率ゐて、四面の防備毫も怠ることなければ、之に對する我が軍の作戰計畫も亦最も愼重を極め、滿洲軍總司令官大山大將自ら三軍を指揮し、兵數亦二十餘萬、戰線四十餘里に亘りて、實に二十世紀に於ける劈頭第一の

大野戰たり、余は今此の大激戰の狀況を記述するに當り、先づ各方面の戰鬪公報を列記し而して後其詳細なる情報に及ひ、以て讀者が其顚末を知悉するの便に供せんとす。

先づ第一に遼陽方面大激戰の報を傳へたるは、八月三十日大本營よりの公報にして即ち左の如し。

二十九日夕迄の着電に依れば、遼陽方面の戰況左の如し。

第一軍は去る二十五日夜より二十七日に亘る激戰の結果、寒坡嶺より大甸子を經て大西溝に亘る峻嶺上に堅固に構成せる敵の陣地を奪取し、全く湯河右岸の地區を占領し、敵を遼陽方向に壓迫せり、其詳細は別紙第一軍戰鬪報告に讓る。

遼陽海上街道に沿ひ前進したる諸軍は、途中若干の敵を驅逐し、二十七日朝上石橋子より倭家屯を經て蘇馬臺以西に亘る線に達し、鞍山站より騰鰲堡に亘り、堅固に構成せられたる陣地に在る敵の攻擊に着手せしが、敵は抵抗をなすことなく該陣地を撤し、北方に退却するの徵候を認めたるを以て軍は直に之に追躡して前進せり。

翌二十八日朝遼陽海城街道以東の地區を追擊せし軍の數縱隊は、午前十時調軍臺、大石頭、八卦溝に達して敵に追及し、遼陽海城街道を退却中なる敵の退路に迫り、立山屯及沖家燈近に於て大に混雜しある敵の大部隊に對し、猛烈なる追擊射擊を加へたり、之が爲め敵は一層混亂して砂河以北に退却せり、同時遼陽海城街道以西の地區を前進せし軍

の一縱隊及砲兵團も、八卦溝及陶官屯附近に來着し、恰かも八家子西北の地區を退却中なる敵の大縱隊に追及し、猛烈なる追擊を以て敵を沙河以北に擊壞せり。

此の如くして遼陽海城街道方面に於ける諸軍は、敵を近かく遼陽方向に壓迫せり。

此方面に於ける鹵獲は野砲八門、彈藥車四輛、輜重車數十輛なり、以て敵の退却が如何に混亂せしかを知るに足るべし。

卻ち其所謂る第一軍戰鬪報告として、八月三十日午前大本營への着電は左の如し。

二十五日より二十八日に亘る戰鬪報告

軍に對せし敵は、紅砂嶺より寒坡嶺及大甸子北方高地線を經て大西溝北方高地線に亘り數月前より準備したる險山上の强固なる陣地に據り、極めて堅固に之を占領せり、之に反し我は良好の攻擊陣地を有せず、殊に其他の如きは本道附近の外之を用ふるの陣地を缺けり、戰況左の如し。

左縱隊は二十三日より運動を起し、少數の敵を驅逐しつゝ二十五日二道河北方高地より ペイリンヅイ南方高地に亘る線を占め以て翌日の攻擊を準備し、中央及び右縱隊は二十五日午後より準備運動に就けり。

二十五日夜半より中央縱隊は、全歩兵を擧げて敵陣の中央たる弓張嶺及其附近の險山に向ひ、銃槍突擊を行ひ、其の攻擊は大に功を奏し、同地附近の敵の本陣地は全く我が有

に歸せり、然れども敵は近く第二第三線の高地脈に兵力を增發して勇悍に防戰し、激烈なる小銃戰と爲り、二十六日正午に至るも毫も其度を減ぜず、加之大安平附近の敵砲は盛に我を射擊し、其歩兵は屢〻恢復攻擊に出んとするの形勢を示せり、然るに我は地形上有利の砲兵陣地を有せず、爲に同縱隊の情況は一時危險に陷らんとしたるも、遂に能く之を支持し、以て敵を湯河の谷地に壓迫するを得たり。

右縱隊は拂曉前より紅砂嶺、七盤嶺(弓張嶺の北方)及其中間の地點に向て夜襲を行ひ其左翼は敵陣を奪取するを得たるも紅砂嶺は遂に全く之を占領するを得ず、拂曉と共に激烈なる銃砲戰と爲り、連續黃昏に及ぶ。

左縱隊も亦拂曉より歩兵の首力を以て大西溝北方の高地に向ひ、攻擊前進に移り、其砲兵は大甸子北方及高峰寺西北高地に於ける殆ど半永久的の工事內に在る優勢なる敵砲に對し快戰を求め、午後二時より四時に亘り砲戰最も熾盛を極め、此間敵砲は時々沈默することありしと雖も、遂に之を撲滅するを得ず、又敵の歩兵は兵力を增加し、我左翼に壓迫し來り、漸次危險を感するに至れり、是を以て同縱隊の攻擊前進大に澁滯せり。

之を要するに軍は敵陣地の中央を突破して敵を兩斷し得たりと雖も、兩翼は夜に入るも尙ほ之を攻略するを得ず、加之二十六日午後四時前より起りたる迅雷大雨の爲めに、各山頂は終に烟霧を以て掩はれ、遂に攻擊の目的を遂行するに至らずして夜を撤するに至れり、此夜紅砂嶺及び大西溝方面に於て敵の企圖せし數回の逆襲は常に無効に歸し、我は此機に乘じ紅砂嶺を占領し、同嶺に在りて最も威力を逞しうせし敵砲八門を奪取せり。

二十七日雲霧を冒して各縱隊は再び攻擊前進に移りたるも、敵の一部は依然頑强に抵抗し、黃昏に至り漸く紅砂嶺より孫家塞南方高地を經て、大西溝北方高地に亘る線を占領するを得たり。

此戰鬪に於て最も壯烈を極めしは、紅砂嶺附近弓張嶺附近の夜戰にして、敵は月明に依りて我兵の前進を察知し、激烈に射擊するのみならず、岩石を山頂より墜落し、我兵の之に觸れて死傷せしもの甚だ尠からず、然れども我兵は頑として射擊を開始せず、堅忍不拔以て急峻なる山嶽を攀登し、敵陣地に突擊せり、從て損害の光景は最も悲慘を極めたり、但し夜襲の際に於ける損害は比較的多大ならず、又左縱隊方面の敵は頗る優勢なりしを以て、同縱隊は苦戰最も勉めたり。

敵の兵力は歩兵六十五大隊(狙擊第二軍團及び戰列第十軍團の全部幷第十七軍團の半部)砲百二十門にして、其大部は遼陽方向に退却し、一部は近く尙ほ軍の前方に停止しあり。

軍は尙ほ追擊前進を繼續中なり。

二十六、二十七兩日の戰鬪に於て、我軍の死傷將校以下約二千にして、鹵獲は砲八門彈藥其他多數なり、敵の死傷は未詳なるも多大なるべしと信ず。

次で九月一日大本營の公報したる戰況は左の如し。

三十一日夕迄の着電に依れば遼陽方面の戰況左の如し

右翼軍は二十七日湯河右岸の地區を占領したる後更に攻撃を續行し、其右縱隊及中央縱隊は頑強なる敵の抵抗を擊破して紅砂嶺の全部及孫家塞北方高地を占領し、次で雙廟子及石咀子に向ひ逐次敵の抵抗を擊破しつゝ前進し、同日夕より二十九日朝迄の間に、雙廟子東方高地の敵を擊退して該高地を占領せり、然れども左縱隊は啊山子東南方高地にある敵の頑強なる抵抗の爲め、該高地以北の線に前進する能はざりし。

寒坡嶺附近に於て我軍の爲め擊退せられたる約二師團の敵は、二十九日小屯子北方に在る軍橋を經て、太子河右岸に退却しつゝあり。

軍は昨夜より二十九日朝に亘り連續前進を勉め、右縱隊及中央縱隊は雙廟子より石咀子西方に亘る線に進出するを得たり、左縱隊は今朝に至り大石門嶺及啊山子附近の敵を擊退し、ヤユチ及孟家房に向ひ前進せしも、該地附近の敵は本日に至り著しく其兵力を增加したる爲め、未だ其目的を達するに至らざりし。

遼陽街道を前進したる諸軍は、昨二十八日敵を猛烈に追擊したる後、二十九日尙ほ其前進を續行し、其中央軍を以て來家堡より黑牛庄に亘る線を、左翼軍を以て黑牛庄以西漁家臺に亘る線を占領し、別に中央軍の一縱隊は、遠く軍の右側ウエイジヤゴウに前進して、右翼軍左縱隊と連繫し、該方面の敵を擊攘し、孟家房方向に前進せり、遼陽海城街道方面の敵は、首山堡南方高地より新立屯高地を經て方家屯東方高地に亘る線を占領したるもの〻如く、此各高地には堅固なる防禦工事ありて敵の大兵團堅固に之を守備せり、此の如き情況に於て、各軍は其占領せる陣地に於て夜を徹せり。

翌三十日拂曉各軍は、各其前面に在る敵に向つて攻擊前進を起したる結果、敵は其退却を遂行し能はざる情況に陷りたるもの〻如く、依然孟家房北方高地より早飯屯南方方家屯東方及新立屯西方にある高地より、首山堡西方高地に亘る線を占領したり、之に對し各軍は全力を擧げて之を攻擊し、各方面とも此に激烈なる戰鬪を惹起せり。

孟家房及早飯屯方面

右翼軍の左縱隊は、三十日拂曉より孟家房及ヤユチ附近の敵に向ひ更に攻擊を繼續せしも、敵は午後一時頃に至り益〻其兵力を增加し、午後三時頃に至るも、敵の陣地を奪取するに至らざりし。

中央軍より派遣せし一縱隊は、早飯屯南方高地に向ひ午前六時頃より砲擊を開始し、最初は攻擊大に進捗せしが、午前十時より敵の大縱隊遼陽方面より前進し來り、該縱隊に

向つて恢復攻撃を行ひ、午後に至り敵は益〻其兵力を増加して、少くも二師團以上となり、其砲數は五六十門に達せり、之が爲め其右翼は一時危殆に陷りしも、勇戰奮闘の後午後三時頃に至り、右翼軍左縱隊と連繫するを得て、敵を早飯屯南方高地より擊攘し、ウエイジャゴウ附近に亘る線を奪取するを得たり、然れども敵は尙ほ頑強に攻勢を取り午後五時に至るも交戰酣なり。

方家屯、新立屯方面

中央軍の主力は、左翼軍の一部と共に三十日朝來方家屯東方高地に亘り占據せる敵に向ひ、ダワより其西方高地を經てシャオヤレズイ附近の高地に亘る間に展開して攻撃せしが、此方面の敵は堅固なる陣地に據り頗る頑強に抵抗せり、之に對し軍は盛に砲撃を行ひ、攻撃準備をなしつゝあるも、午後五時迄には未だ敵陣に突入するを得ざりし。

首山堡方面

左翼軍の主力は三十日拂曉より攻撃運動を開始し、午前十一時頃に至りマエトウレより大趙家臺に亘る線を占領し、首山堡西方の高地に在る敵に向ひ攻撃を開始せり、此方面の敵は其右翼をグワヅヤヅイ西北部落に託し、盛に機關砲を以て射撃し、軍は其全力を擧げて之を攻撃せしも、更に攻撃の進捗を見るに至らずして午後四時半となれり、此に於て軍は其豫備たる一兵團を其左翼に增加せり、是より先き午後二時頃遠く軍の左側を前進せし我縱隊の砲兵は、王二屯附近に達し首山堡附近の背後を射撃せり。

各方面に於ける敵の全兵力は詳かならざるも、漸次增加して今や其砲數は首山堡高地以東のみにても約百門に達すべく、且つ各方面の敵の陣地は堅固に構成せられ、其副防禦は容易に我歩兵の近接を許さゞりし。

右の如き情況に在て午後七時過ぎに至るも、尙ほ攻撃は繼續せり、夜に入りて敵は首山堡附近より我左翼軍に向つて夜襲をなしたるも、我が爲め擊退せられ、之に次でシャオヤンズイ北方に在りし左翼軍の一部は、首山堡南方高地の敵に向つて夜襲を行ひ、此の如くして彼我激烈の戰鬪を交へつゝ三十一日朝に至り、尙ほ激戰は繼續せられつゝ午後に至りたるも、未だ戰機の發展を見るに至らず、又孟家房、早飯屯方面に於ても、我軍は頗る優勢なる敵に對して、奮闘其位置を保守しつゝあり。

以上の狀況を以て午後零時二十分に至り、我左翼軍の一部は新立屯西方高地を占領するを得たり。

各軍に對する敵の兵方は、合計約十二、三師團なるもの〻如し。

次で九月一日以後大本營への着電は、着々として我軍の成功を報じ來れり、內或は前報と重複するもの無きに非ざるも、其成功の情況を知悉するに必要あるべきを以て一括して之を下に掲ぐ。

遼陽攻撃各方面戰況（九月一日大本營着電）

右翼軍方面

昨三十日夕迄に徐家溝北方高地を奪取せし右翼軍の左縱隊の一部は、日沒後益〻兵力を增加せられたる前面の敵より猛烈なる射撃を受け、三十日夜中に再び徐家溝南方高地線に退却し、該地附近を固守するの狀態となれり、而して三十一日朝其方面の敵兵は逆襲せんとする模樣ありしも、遂に前進し來らず。

右翼軍右縱隊及び中央縱隊の大部は、三十日夜十一時より運動を起し、鎌刀灣附近に於て太子河を渡り、皇姑墳方向に前進し、三十一日午後四時には ハンジャラヅイよりサンツアゴウの線を占領する筈なるも、其後の狀況詳ならず。

敵の砲兵一中隊黑茨臺北方に位置し、又ツオフアンゴウ北方高地には工事をなすを見る此前面には概して敵兵多からざるが如し。

中央軍方面

中央軍右縱隊方面に對する敵の砲兵は、前日（三十日）の如く活潑ならざるが如しと雖も、彼我の戰鬪は依然猛烈にして、該縱隊は從來の陣地を固守し居れり。

同軍の左縱隊の方面の戰鬪も、三十一日朝來頗る猛烈なれども、容易に敵陣地を攻略するに至らず。

方家屯附近の敵は、三十一日午後四時過ぎ西北方に移動しあるの報あるも、未だ其情況を詳にせず。

左翼軍方面

右縱隊は三十一日午前三時頃より夜襲を決行し、既に數回突撃を行ひたるも奏功確實ならざるを以て、更に兵力を增加して、正午頃新立屯西南高地の一部を奪取するを得たり。

中央縱隊は三十一日午前一時敵の夜襲を擊退し、敵を鐵道線路に壓迫し、漸〻其左翼に向てする敵の逆襲に對し、左縱隊の一部と協力して之を擊退し、攻撃を繼續しつゝあるも、未だ首山堡西方高地を略守するに至らず。

三十一日午後六時に至るも、左翼軍は全力を擧げて攻撃を續行中なり、午後三時頃若干の砲兵を有する兵力未詳の敵の歩兵、首山堡西北約二里半の白臺附近に現はる、依て豫備の一部をして之に對せしめあり。

左翼軍は更に全砲兵を以て猛烈なる砲撃を爲し、後總強襲を行ふ筈なり。

首要高地の占領（九月一日午前大本營着電）

九月一日拂曉我左翼軍は、猛烈果敢なる強襲に依り、新立屯西方高地及び首山堡西方標高九十九の高地を全く占領せり、我損害は多大なるべきも未だ詳ならず。

敵軍の退却追撃（九月一日午後大本營着電）

中央軍及び左翼軍前面の敵は總て退却を始めたり、兩軍は目下追撃中。

遼陽大掃蕩戰況（九月二日午前大本營着電）

敵は我猛烈果敢なる攻撃に堪へず、一日早朝以來遼陽方向に退却し、左翼軍の一部及び中央軍は猛烈に之を追撃中、敵は太子河右岸に撤退せんとして遼陽附近に大なる混亂を起しつゝあり、我戰利十珊知牟加農は、遼陽停車場附近を盛に砲撃しつゝあり。

右翼軍は、一日午前十一時黑英臺の敵を攻撃中、左翼軍の首力は、二日早朝より更に敵を太子河に壓擠せんとす。

二十九日以來我軍の損害未詳なるも、多分一萬内外ならん。

敵兵追撃續行（九月二日夜半大本營着電）

中央及び左翼軍前面の敵は太子河右岸に退却を續行し、其一部は遼陽南方より西北に亘る工事線及び木廠（太子河右岸）の東北方高地を占領し、兩軍は敵を追撃してタテブジフより、西八里庄を經て揚家林子に亘る線に到達し、攻撃を續行中にして、明朝迄に太子河右岸に進出するを得るらん。

右翼軍は黑英臺西方標高百三十一の高地にある敵を攻撃し、今朝該高地の一部を占領したるも、其後の戰況は未だ詳ならず、而して軍の右翼畑臺石炭坑方面には、敵兵漸次集

合しつゝあるが如し。

殘敵の抵抗繼續（九月三日午前大本營着電）

敗殘の敵は今尚ほ遼陽城外にありて抵抗を繼續す、我中央及び左翼軍は之を攻撃中。

遼陽大掃蕩續報（九月四日午前大本營着電）

三日午後九時迄の狀況左の如し。

右翼軍方面

右縱隊は其一部をサンツアゴウ附近に留め、其右側の掩護に任じ、其主力を以て西進す。

中央縱隊は未だ百三十一高地を全く奪取するに至らず。

左縱隊は、虎頭崖附近に在りて百三十一高地の敵と對峙す。

中央及左翼軍方面

遼陽城南側及西側の敵に對し尚ほ攻撃を續行す、遼陽停車場附近の倉庫らしき建物は、本日悉く燒夷せられたり。

遼陽大掃蕩の結了（九月四日午前大本營着電）

滿洲軍總司令官の遼陽占領に關する報告、左の如し。

九月三日より四日に亘る夜間及四日朝にける戰鬪にて、遼陽は全く我有に歸せり。

太子河右岸の情況は、其後未だ精確の報に接せず目下取調中。

我軍の死傷は多大なる可きも、未だ詳報に接せす目下取調中。

かくて九月六日の午後に至り、全く遼陽を占領したるの詳報は、滿洲軍總司令部の報告に依り公にせられたり、事固より重複を免れざるも、特に之を左に掲ぐ。

我諸軍は八月下旬鞍山店湯河沿附近の攻撃運動を開始せり、其經過左の如し。

右翼軍は八月二十四日より運動を開始し、二十五日夜より二十七日に亘り劇戰の後敵を撃退して、紅沙嶺、孫家臺、高峰寺に亘る線を占領して尚ほ追撃を續行し、二十九日英字堡、石咀子、响山子の線に達し、三十日夜より三十一日に亘り軍は其主力を鎌刀灣に於て太子河岸に移し、其一部を太子河左岸に殘置し、中央軍と連繫して動作せしめたり、軍の主力は九月一日より黒英臺西方附近にある敵に向ひ、攻撃を開始せしが、敵の抵抗頑強にして且つ前日よりの兵力を增加せしを以て、攻撃容易に進捗せす、然れども四日間に亘る劇戰の後、九月四日正午過ぎ遂に敵の陣地を略取せり、九月四日太子河左岸に在りし同軍の一部を、更に太子河右岸官屯に移したり。

中央及び左翼軍は、二十六日より運動を開始し、敵を壓迫して二十七日下石橋子、侯家屯、蘇馬臺の線に達す、然るに此日下房身鞍山店の防禦陣地に據れる强大なる敵は、遼陽方面に退却を始めたり、依て中央、左翼軍は直に追撃に轉じ、敵の一部隊を驅逐しつ

つ二十九日中央軍は、潘家嶺沙河の線、左翼軍は沙河漁家臺の線に達す、敵はヤユチ北方高地より早飯屯南方高地、新立屯東西の兩高地を經て、首山堡西方高地に亘り、堅固に陣地を構成しあり、故に中央軍は更に之が攻撃に着手せり、此情況に於て、左翼軍は首山堡附近の敵を攻撃し、以て中央軍の戰況に應じ、協力敵を攻撃せり。

三十日中央軍の右翼は、右翼軍の左翼たる一部と共に、ヤユチ北方高地に亘り占領せる敵に對して攻撃を開始せしも、敵は遼陽方向より强大なる增援を得、中央軍の右翼は其略取したる位置を一時支持するの已むを得ざるに陷りたり。

此戰況に於て本官は左翼軍に命じ、一意迅速に首山堡附近の敵を撃破するの任務を與へたり、同日中央軍の左翼及び左翼軍も、亦新立屯及び首山堡附近の敵に對して攻撃を開始せしに、敵は頑强に抵抗し屢〻逆襲を試み、攻撃甚だ困難なりし。

然れども兩方面の敵は、我軍の連日連夜の猛烈なる攻撃に堪へず、三十一日夜半に至り遂に我軍の撃退する所となり、遼陽方面に退却し、兩軍は直に追撃に移りたるも、敵は再び遼陽城の南端及び西端を圍繞せる堅固の堡壘線及び木廠東北方高地に據り頑强に抵抗し、我兩軍は九月一日より三日の夜に至るまで遼陽に對する攻撃を繼續し、以て遂に敵堡壘線を奪取し、四日朝全く遼陽を占領せり。

敵は三十日に至る迄汽車にて增加兵を遼陽に輸送したるの兆候あり、而して我に對せし

敵の兵力は未だ詳ならずと雖も、總數少なくも約十二師團なるべし、今や敵の大部は未だ煙臺以北に退却せざるもの〻如く、其一部は迎水寺附近に停止しあり、停車場附近の倉庫及び鐵道橋幷に太子河の架橋は、敵之を燒夷せり、我左翼軍中央軍は太子河左岸に停止し、一部隊を以て木廠北方高地及び鐵道橋附近を占領する筈なり。

二十五日以來我の損害に就ては、未だ正確なる報告に接せずと雖も多大の數に達すべし敵の損害に就ては未だ詳ならず。

敵が全力を擧て半永久的に構築したる、數段の防禦線に對し、十日間に亘る攻撃を以て遂に目的を達し、多大の犧牲あるにも拘はらず、士氣頗る旺盛なり。

九月九日引續き遼陽大捷の續報は達せり、曰く。

右翼軍の中央縱隊は既に去る四日午後十時より前進を起し、達蓮溝（煙臺停車場と炭坑との中間に在り）附近に於て優勢なる敵と衝突し、苦戰の後五日朝に至り之を西方に撃退し、該地を占領せり。

同軍の左翼縱隊は、五日午後一時半闌泥舖（煙臺の南方）を占領し、其砲兵は房身附近より退却する敵の縱隊に向ひ三四十分間追撃射撃をなせり、又右翼縱隊は五日午前十時半戰鬪の後玉門子山（煙臺の東方）一帶を占領せり。

敵は退却を續行し目下其騎幕は十里河、刘三家子、紅陵堡（凡て煙臺奉天間）の線に在り、荒地岡胡盧屯（煙臺の北方）以南には敵を見ず、又板橋堡（奉天煙臺間街道上）東方高地には、一帶に散兵壕及び肩墻らしきものありて監視兵あり、敵の主力大概渾河の以北に退却せしもの〻如く、孤家子、八家子、林盛堡、官林堡（奉天煙臺間）には兵力未詳の敵兵あり、大東山堡に於ける沙河の橋梁は敵兵之を破壞し、サンヂブーは敵の騎兵尙ほ之を占領せり。

去る五日敵は約一萬の負傷者を奉天以北に運搬したるの情報あるも、未だ全損害の實數を推測するに至らず、敵は戰鬪間巧に屍體を運搬し去りたる形跡あり、然れども尙ほ遼陽附近に委棄しある屍體數三千以上なり。

敵は遼陽を退却するに際し停車場の諸倉庫を大抵燒棄したれども、尙ほ糧食品其他莫大の戰利品あり、敵は辛うじて火砲を持去たるも、彈藥車は之を彈藥庫の傍に集積爆發せしめたり、然れども各堡壘砲臺に棄却せし彈藥は頗る多大にして、未だ其數を積算するに遑あらず、遼陽附近に於て鹵獲せし彈藥の內十五珊米及び十八珊米加農の彈丸あり、之より察すれば敵は重砲を有したるも、全く使用するに至らざりしものならん。

此の如くにして敵軍の兵略要地として死守せし遼陽は、我が軍數日の奮戰激鬪に依りて、遂に全く之を占領することを得たるなり、而して其各軍個々奮戰の狀況に至りては、各〻其軍司令官若くは參謀長等よりの報告に依りて詳かなり、即ち綜合して之を左に揭ぐ。

右翼軍戰鬪詳報（九月十二日午前大本營着電）

二十八日より五日に至る戰鬪報告

一、戰況

八月二十八日

第一縱隊　は少數の敗殘兵を驅逐して夕刻に至り、太子河左岸に沿ふ英守堡より雙庙子に亘るの線を占領せり、此日同河は增水の爲一の徒涉場を有せず、其橋梁は敵兵悉く之を破壞して退却せしを以て、同縱隊は同河右岸の地に兵を進むるを得ざりし。

第二縱隊　縱隊の主力は孫家寨北方高地の敵を、其左翼隊は同地西北方高地上の敵を攻擊し、草家峪南方高地より標高二百四十三を經て小嶺子北方に亘る線を占領し、草家峪西方高地及大石門嶺（望報臺の東南約二吉米の鞍部）に在る敵と相對峙して夜を徹せり。

第三縱隊　は午前十時來進擊前進を繼續し、歩々抵抗する敵を驅逐しつゝ夜に入りて四方臺より啊山子に亘る高地線を占領せり。

同二十九日

第一縱隊　は前日占領せし線に在つて、太子河右岸に移るの準備を爲し。

第二縱隊　右翼隊の一部は、敵の監視哨を驅逐して午前八時過石咀子を占領し、其左翼隊は午前六時過大石門嶺を占領せり。

第三縱隊　は徐家溝南方高地線を占領しヤユチ孟家房の高地線に在る敵狀を偵察せり。

同三十日

第三縱隊　は拂曉より孟家房ヤユチの高地線に在る敵を攻擊し、勇戰奮鬪して遂に徐家溝北方の高地を奪取し得たるも、夜に入りて敵は兵力を增加し、野戰電燈を照して盛に同地を射擊し、同高地上の我兵は極めて苦戰せり、同左翼隊は午後六時望報臺東方の高地を占領し、爾後第三縱隊に協力せり。

第一縱隊　は雙庙子吊水樓間に一部を殘置し、主力を以て午後十一時より鎌刀灣附近にて太子河を徒涉し、第二縱隊の主力は一部を石咀子に殘置して、第一縱隊に續行せり。

同三十一日

本溪湖縱隊　は午前四時臥龍村附近にて太子河を渡り、威寧營に在りし敵歩兵を擊攘し之を追うて本溪湖を占領せり。

第一及第二縱隊　第一縱隊及び之に續行せし第二縱隊の主力は、敵の妨害を受くることなく、全く渡河を終りて太子河右岸に進出し、夕刻迄に官屯よりサンツアゴウを經て水泉に亘る丘陵線を占領せり。

但し野砲兵は此夜太子河に架設せる軍橋の完成するを俟て渡河し、以て所屬縱隊に合せ

り。

第三縱隊及び第二縱隊の左翼隊　は昨日の位置にありて現狀を維持せり、敵は拂曉より逆襲し來らんとするの模樣ありしも遂に來らず、依然砲戰を繼續せしのみ。

九月一日

第一縱隊及第二縱隊　の主力は、黑英臺の北方及西南方高地及其北方の地區に向ひ、拂曉より攻擊を開始せり、敵は黑英臺西北及スイクワンドウン西方及南方高地、並に其北方の村落附近及ツォフアンゴウ北方高地に、遮蔽の砲兵陣地を設けて盛に我を砲擊し、加之若干の砲を有する敵の一縱隊は、第一縱隊の左側に向て前進し來り、爲めに我攻擊進捗せず、夜半に至るも黑英臺附近に彼我の銃砲聲激烈なりし。

第三縱隊　孟家房附近高地の敵は退却を始め、第三縱隊は午前六時乃至十一時の間に於て、全くヤユチ北方より孟家房北方に亘る高地線を占領せり。

本溪湖縱隊　の一部は、午前八時より敵と激戰の後、午後三時之を北方に擊退して香山子北方高地を占領せり、午後五時に至り敵は再び南下し來りたるも、再び之を擊退せり。

同　二日

第一縱隊　天明後第一縱隊は、其右側に進來せし敵を攻擊し、苦戰の後石炭坑附近より、

大窑西方約二千米突の高地に亘る線を占領せり、然るに此方面の敵は、午後に至り漸次增加して其砲數は約六十門となれり。

第二縱隊　の主力は、連續せる戰鬪の後午前二時過遂に黑英臺西北高地を占領し、其一部はスイクワントウン高地端より百三十一高地に向ひ攻擊を試みたるも敵の集中砲火を受けしのみならず、午前十時頃敵の大部隊より逆襲せられ、遂に其目的を達することを得ず、單に黑英臺西北の高地を保守し得たるに過ぎざりし、敵は爾後第二縱隊の占領せる高地に向ひて、兩側方より砲約五十門を以て猛烈なる砲擊を行ひ、之に對する我砲兵は有利の砲兵陣地なき爲め、敵砲に對して有利の砲戰を交ふるを得ず、之れが爲め同縱隊の困苦は殆んど極度に達し、各將卒は前夜來一回の食、一滴の水をも得るを得ず、各自携帶の精米により僅に饑を忍びしのみ、是前面及側背より受くる敵砲彈の爲め、全く交通を杜絕せられたるによる、日沒來敵の步兵二三旅團は、第一第二縱隊に向て逆襲し來り、同時より黑英臺附近の銃聲は最も猛烈を極めたり、恰も好し此日午後招致せられたる第二縱隊の左翼隊は之に赴援し、死力奮戰したるも容易に敵を擊退し終るを得ず、夜半に至るも銃聲尙ほ盛なり。

同　三日

軍の前面に逆襲し來りし敵は、全く擊退せられたり、然れども敵は依然百三十一高地よ

り其北方の地區を嚴守し、且つ煙臺東南の地區及び羅大臺臭井子附近には、強大なる部隊集屯せり。

此の日第一、第二縱隊は現狀を維持するに止まり、又第三縱隊の一部の來援を得たり。

同　四日

第三縱隊　拂曉來各方面共極めて沈靜なり、招致せられて急行したる第三縱隊は、早朝官屯に到着せり。

午前十時標高百三十一高地の敵は全く退却し、我兵之を占領せり、茲に於て軍は直に追擊運動を開始せり。

本溪湖縱隊　は平臺子附近を占領し、一部を殘置して奉天方向を警戒せしめ、主力を以て煙臺に向て急進し、正午石炭坑北方三家子の西北方高地に進出し、午後六時戰鬪の後玉門子山を占領せり。

同　五日

第一縱隊　昨夜半來第一縱隊は、小達連溝附近に於て稍や優勢なる敵と衝突し、其結果彼我混戰に陷り、戰鬪激烈を極め、午前六時三十分に至り遂に之を西北方に退擊し、之を追うて達連溝立林溝の線を占領して停止せり。

本溪湖縱隊　は拂曉來戰鬪の後玉門子山一帶を占領せり。

第二縱隊　は午後一時三十分三道嶺を占領し、其砲兵は房身附近より退却する敵の縱隊に向ひ、三四十分間之を射擊して混亂せしめたり。

第三縱隊　の主力は、午前八時頃羅大臺附近に達して停止せり。

二、我に對せし敵の兵力

太子河左岸にありて我に對せし敵は、主として二十六、七日に於ける戰鬪後退却せし敵の一部にして、其第二縱隊方面にありしものは約一師團なるべく、第三縱隊方面に於ては少なくも一師團半なるべし、又太子河右岸に於て一日以降我に對せし敵は、線列第三、第九、第三十五、第五十四師團、狙擊歩兵第二、第二十二聯隊及びモスコー選拔歩兵を混合したる三師團半以上にして、其後方及び我右側にありしものは少くも三師團を下らず。

三、彼我の死傷

二十八日以後に於ける我軍の死傷は、未だ正確に調査し得ざるも、約四千なるべし、敵の死傷も亦詳ならざれども、戰場に遺棄したる死體等より推察すれば、少くも我と同數以上なるべし。

左翼軍戰鬪報告（自八月卅日至九月五日）

第一線首山堡附近の攻擊

八月三十日軍は首山堡附近の敵を攻撃する目的を以て、第一縱隊を右翼、第二縱隊を中央、第三縱隊を左翼とし、午前五時沙河の線を發して前進す。

午前六時三十分第一縱隊の先頭櫻桃園西北の部落より頭臺子に亘る線に達せしとき、首山堡南方鞍部附近より敵の砲兵約二中隊我に向て射撃を開始す、此時野津軍方面に當り稍や盛なる砲聲を聞く。

諸偵察に依るに、敵の陣地は首山堡西方及び南方高地、新立屯西方高地、方家屯東方高地に亘り、極めて堅固なる堡壘を設け、且つ其周圍に多數の鐵條網あり、第一縱隊は之を正面より攻撃するの不利なるを以て、首力を以て黑牛庄東方高地より、先づ新立屯西方高地の東南凸角を攻略せんとし、午前七時頃より砲撃を開始し、野津軍の左翼と近く相連繫して攻撃準備をなす、第二縱隊は道路不良の爲め行進遲滯し、其第一線は午前十一時頃大趙家臺東南及び東北部落に達し、次で其砲兵の大部は到着して、首山堡東南方鞍部の敵砲に向ひ射撃を開始せり。

午後一時頃第一縱隊の攻撃は大に進捗せしも、未だ高地脚より攀登することを得ず、第二縱隊の右翼は第一縱隊の左翼に連繫し、其左翼は大趙家臺附近より敵の右翼を包圍しつゝ攻撃前進す、其砲兵の一部は未だ戰場に到着せず。

此時第三縱隊の主力は興隆臺附近に在り、又我騎兵團は王仁屯附近より敵の側背に運動し、其野砲を以て敵の側背を威嚇せり。

午後四時頃敵の歩砲兵は益〻增加の模樣あり、其右翼はグウヅヤツイ西北方部落に亘り所々に機關砲を備へ其抵抗頗る頑強なり、第二縱隊は全部を擧げて攻撃を續行せしも頗る苦戰に陷り、其左翼は著しく危險に迫りたるを以て、第三縱隊の歩兵の一部を其左翼に增加するの已むを得ざるに至れり。

之より先き第一縱隊長に歩兵一聯隊を增屬し、尙は砲兵一大隊を增加して攻撃を援助せしむ、該砲兵大隊は午後三時四十分頃櫻桃園に陣地を占め射撃を開始せり。

新立屯西方高地の東南角を攻撃中なる第一縱隊の右翼隊は、方家屯高地の敵砲及正面突出部の角面堡より猛烈なる側射を受け、一步も前進することを能はざるの苦戰に陷れり、此の如くして第一、第二縱隊は全力を擧げて攻撃を續行するも、敵の副防禦と猛烈なる歩砲火の爲め突撃を行ふに至らずして日沒となれり、此に於て軍は夜暗に乘じ副防禦を破壞し强襲を決行し、若し成効せざれば更に拂曉攻撃を行ふに決す、此日我砲兵は道路不良の爲め一齊に其の砲數を配列することを能はず、故に終日の砲撃も終に敵砲を萎靡せしむるに至らざりしは大に遺憾なりき、敵は此戰鬪間輕氣球を以て我運動を視察し、屢〻其軍隊を諸方面に行動せしめたるを以て、其企圖の決戰に在るべきを察知し、充分の戒心と奮勵を促せり。

三十一日午前三時頃より第一縱隊の步兵は、猛烈果敢なる夜襲を決行せり、拂曉頃其左翼たる步兵聯隊は、首山堡南方高地の南部を奪取せしも、前面及び側面より猛烈なる射撃と北部高地よりする優勢敵の逆襲を受け、苦戰の後多大の損害を受けて、高地脚に退却するの已むを得ざるに至れり。

右翼隊も亦非常の困難を冒し、多大の損害を顧みず前進せしも、副防禦堅固にして敵火猛烈且つ高地の攀登頗る困難なるにより、終に高地脚に伏臥して起つこと能はざるに至れり。第二縱隊は午前一時より屢〻敵の逆襲を擊退し、次で夜襲を斷行せんとし、猛烈なる敵の機關砲火を冒して終に敵を鐵道線路迄壓迫し、敵陣を距る五十乃至百米突に近接せしも高地上の敵より瞰射せられ損害甚しく、之れより突擊に轉ずること能はずして天明となれり、其後第三縱隊步兵約五大隊は、第二縱隊の左方に展開せしを以て、大に戰勢を恢復せり。

午前七時步兵三大隊を本道方面より前進して、第一縱隊の左翼隊に協力せしむ。

情況以上の如くにして、第一、第二縱隊は全力を擧げて攻擊を續行し、又我全砲兵隊も各〻有効距離に近接して猛烈に敵壘を砲擊せしが、未だ以て攻擊の進路を開くに至らず、而して前日の降雨の爲め、彈藥の補充に苦痛を感じたり。

正午頃我砲兵の威力は大に發現し、新立屯西方高地の東南部は著しく破壞せられたり、此に於て第一縱隊の右翼隊は、獅子奮迅の勇を皷して該砲壘に突入し、午後〇時三十分終に之を奪取せり。此に於て一部の立脚地を占むることを得たるも、他の堡壘の敵は依然頑強の抵抗を爲し、且方家屯の敵砲兵より猛射を受け、又前進すること能はざるに至り、正面及第二縱隊方面も亦同一の情況にして前進を繼續すること能はず、午後五時頃第三縱隊長の報告に依れば、午後三時頃兵力未詳の敵の步兵（若干の砲兵を有す）首山堡の西北約二里半ベイタイに現はれ前進中なりと、依て豫備たる第三縱隊の殘餘をして之に當らしめたり。

騎兵團は第三縱隊の左翼前方に行動し、北方の敵に對して軍の左側を掩護し、且つ遼陽方向を捜索す。

午後七時に至り軍は全砲兵を擧げ、一齊に猛烈の砲擊を加へたる後、更に强襲を斷行するに決せり、此砲擊は敵の各堡壘に多大の損害を與へたるが如し。

此夜各方面の步兵は充分に準備を整へ、副防禦の破壞を努め終に勇猛果敢なる突擊に依り、第一縱隊は新立屯西方の高地を、第二縱隊は首山堡西方標高九十九の高地を、第二縱隊の增援隊は本道方面の高地を全く占領せり、時は九月一日午前三時頃なりき。

我に對せし敵の兵力は步兵約二師團（捕虜の言に依れば西伯利豫備隊第三師團の全部狙擊步兵第五師團同第一師團の一部）砲約五十門なるが如く、午前三時我突擊の頃より漸次

遼陽方向に退却せり、第二縱隊增援隊歩兵の一部は之を追蹤して午前八時頃西八里庄附近に達せり、軍は第三縱隊をして之が追擊に任じ、首力は占領したる陣地に集合整頓す。

追擊戰

九月一日第三縱隊は午後一時より追擊運動を起せり、此時敗退したる敵の大集團は停車場附近にありて、午後四時頃より列車の貨車數を增加し續々退却中なり、之に對し我砲兵團の有効なる追擊射擊は、停車場附近に大混亂を生ぜしめたり午後(?)時頃第三縱隊の砲兵は、九家庄子附近に達しジグウアン西南側に在る敵の砲兵を射擊せしに、暫時にして敵砲は沈默せり、第三縱隊は尤家庄子東北方の村落よりハンバオシャン附近に亘る線を占領して、遼陽附近の敵情を捜索す、軍は戰場附近に宿營し翌二日を期し全力を擧て前進に決す。

九月二日午前七時第一第二縱隊は前進を起し、逐次第三縱隊の右方に連繫せんとす、諸情報に依れば敵は遼陽停車場西方よりジグウアン附近を經て、遼陽南方に亘る防禦工事に據り、更に抵抗を爲んとするが如し、仍て直に之を攻擊す。

第二線遼陽附近の攻擊

午前八時頃第三縱隊方面に於て先づ砲戰起る、鐵道線路に沿うて前進したる第二縱隊の先頭も直に展開し、第三縱隊に連繫す、第一縱隊の先頭は午前九時頃より十時の間に、スイリチジュアン附近より西八里庄附近に達せり、其砲兵は西八里庄西南高地に砲列を布き午前九時四十分頃チエンジャリンズイ附近の敵砲を射擊せり。

午前十時野津軍方面に砲聲を聞く、同十時三十分頃より野津軍は攻擊前進に移り、其第一線は東八里庄タテブジフの線附近に達せしを知る、諸報告に依るに敵の右翼は停車場西北方約一里より停車場西南及びジグウアン附近より、遼陽南方に亘り、其中央及び以東には極めて堅固なる堡壘ありて、防禦設備完備せるが如し。

正午頃第三縱隊の第一線漸次前進するや、敵の砲兵二中隊は、楊家林子東北方に現はれ砲火を開始し更に一縱隊は之に續て南進し、該方面の敵兵稍や增加し、其右翼は漸次西方に延伸する狀あり、第三縱隊は益〻攻擊を力行せしも敵の抵抗頑强にして戰鬪持久の有樣となれり、此の如くして全砲兵は砲戰を繼續せしも、敵の工事堅固にして其抵抗死守的なるに依り、終に突擊を行ふに至らずして日沒となれり、此夜第三縱隊の右翼の一部は、一度ジグウアン附近の敵壘に向ひ突擊を試みしも副防禦機關砲の縱射に止阻せられ目的を達せず。

此日停車場附近に火災起れり。

三日拂曉より砲擊を開始す、敵は依然頑强の抵抗を繼續す、我砲兵は敵の小銃彈の達す

る點迄前進し、堡壘及機關砲の破壞に勉めしに依り、一部の敵は所々散亂の狀を呈せしも他は依然頑强に抵抗し我歩兵の突擊は尙困難の狀態にあり、此に於て更に砲兵の射擊を集中し、其成果を待て突擊前進を行ふことゝなり、終に午後七時に至り、此時我歩兵は二百乃至三百米突迄接近しあり、全砲兵は更に最後の猛火を行ふ、此に於て全線期せずして總攻擊となり、歩兵戰盛に起り、夜に入るも尙止まず、此の如くして其夜〇時三十分終に敵陣に突入して其第一線堡壘を奪取し、全線萬歳を連呼して壯烈を極めたり。此日停車場附近火災益〻熾なり。

四日午前二時第二縱隊の一部は、停車場第三縱隊の一部は遼陽西北端を占領し、尙進んで太子河の線に向ひ敵を追擊せり、敵は終に太子河右岸に退却す、此際鐵道橋は燒夷せられたり、然るに對岸には尙ほ敵の歩兵若干ありしを以て、消火すること能はざりし。

敵の死守的防戰

此戰鬪の情況に就て判斷するに、敵は首山堡附近の陣地を固守し、極力我軍の前進を拒止し以て他方面に於て攻勢を取り、茲に決戰を賭したるが如し、而して遼陽附近第二線の抵抗は、黑木軍に對する敵軍の側背を安全ならしむるが爲め、時間の餘裕を得んことを勉めたるものならん、全般に就て今回敵の防戰は實に死守的にして、決して退却の意圖なかりしことを推知し得べし。

中央軍の戰報(九月二日午後大本營着電)

軍は第一線を以てタラブジフより東八里庄をを經て、西八里庄の線を占領せり。

本日(二日)は尙は前進を續行し、成し得ればシンチエンより遼陽方面に亘る線を占領し左翼軍の運動に聯繫せんとす。

同上(自九月三日至九月四日)

九月三日午前五時より、軍は前日に於ける攻擊を繼續し、遼陽南端に於ける敵陣地を攻擊せり、其概要左の如し、軍の右縱隊は敵の火力未だ衰へずと雖も、我砲彈漸次減少し直に補給の見込なく、而も敵に近接し、五十餘門の敵火の下に永く停止するときは、徒に損傷を增すのみなるを以て、比較的敵火の威力減衰せしユイフウアンシヤウの敵壘に向ひ、午後六時斷然突擊を實行せり。

軍の左縱隊は是れより以前既に敵壘に近接しありしを以て、屢〻突擊の好機を窺ひしも重砲及機關砲(チエンジヤリンズイ附近の敵砲)の威力衰へざる爲め、未だ之を實行するの機に達しあらざりしが、右縱隊の突進するを見之と相連繫して突擊前進に移れり。

右縱隊の中央隊及び左翼隊は、猛烈なる敵の銃砲火を冒し堅固に設備され在る數線の副防禦物を排し、累々たる死屍を越えて敵壘に肉薄し、午後七時五十分の頃歩兵第二十聯隊は、ユイフウアンシヤオの東側に在る敵の角面堡に突入し之を占領し續て他の歩兵一

大隊も此隣隊の左翼に連り、堡壘の西側に向ひ突入せり、左翼隊は敵の抵抗非常に頑強なるを以て遂に其前方二百米突の線に一時停止するの止むなきに至りしが、日沒を待ちて敵壘に突入せり、中央隊が敵壘占領後も尚ほ城壁より猛射を受けしと戰ひ、午後十時二十分遂に前諸隊は南門を占領して夜を撤せり。

左縱隊はチエリンジヤンの北端より前進せるも、敵壘の銃砲火衰へざるを以て右縱隊と共に前進すること能はざりしが、午後零時半頃遂に勇を鼓し全線敵壘に突入し、追擊隊を以て遼陽城の北邊を占領せり。

三日に於ける戰爭の死傷は目下取調中なるも、今迄に知り得たるもの概要左の如し。

右縱隊約三千名

左縱隊約七八百名

勇敢なる突擊を行ひたる步兵第二十聯隊の情況

此聯隊は夙に鞍山站の戰に於て聯隊長及大隊長一名を失ひ、續てウイジヤゴウ附近の戰に於て大隊長二名を失ひ居りしが、一昨二日再び後任聯隊長及大隊長を失ひ、最早佐官一名も無きに至りたれば、丸井少將は代りて此方面の指揮を取るに至れり、此聯隊の名譽をして殊に顯著ならしめたるは、昨日の突擊前進にして、一線兵は續々斃れ、豫備隊は之を推進するも漸く將に逡巡の狀現はるに至れり、江上大尉は聯隊の指揮を取り、自ら軍旗隊を率ゐて散兵線の前方に突入するに至り、全聯隊は俄然勇氣を鼓舞して種々の副

防禦物を踏破して敵壘に突入し、天皇陛下の萬歲を歡呼するに至れり、然るに此名譽を贖ふ爲めには、非常なる損害を拂ふの已むなきに至れり、某大隊の如きは將校一名も無く、上等兵は中隊を指揮し、一中隊の兵員十四五名に減じたるもあり、此の如き混亂の現況に於て之を精査する能はざりしも、此聯隊のみにて少なくも千二三百の減耗に達したり、然るに斯くの如き情況をも顧みず、四日天明後直に追擊隊を遼陽の東端に出せしが渡河材料は昔昨夜敵の爲め破壞せられたるを以て、已むなく對岸に進むこと能はざりし。

以上連載する所の諸公報を對照閱讀すれば、以て如何に我軍が遼陽攻擊に際して苦戰奮鬪せしかを知るに足るべく。隨て其損害の多大なりしは固より言を俟たずと雖も、敗軍の敵兵が尙ほより多くの損害を被りしも、亦論を俟たず、即ち九月十一日大本營着電總司令部調査の報告に依りて遼陽に於ける敵の配置と損害とを擧ぐれば左の如し。

遼陽附近に集中しありし敵の兵力は、第二第四第五第七第十七軍團及び其他の軍團の若干部隊なり、其配置は遼陽西北面に一軍團、南方面に一軍團、其後方に一軍團、我右翼軍に對して一軍團、遼陽西北方太子河右岸に一軍團なりしが如し、首山堡方面の指揮官はスタケルベルクなりし、ミシチエンコは、最初遼陽西南方面に在りしが、我右翼軍も太子河右岸に移りたるに依り、更に遼陽の東方に移り、次で太子河右岸に在りし軍團も、

亦此方面に增加せられたり。

露軍の損害は鞍山站撤去以來、遼陽陷落迄の總計二萬五千人以上に達したること確實なり。

ミシチエンコは、九月三日遼陽東方の戰鬪に於て戰死せりと聞く。

敵は遼陽の戰鬪前より。同地停車場に多數の列車を進備し、戰の不利なるを見て連續三日乃至四日間、死傷者及兵器並軍需品を還送し、倘ほ剩まれる軍需品は燒棄したるもの多きも、彈藥車小銃彈、砲彈等の我鹵獲多く、又ダムダム彈若干を發見せり。

以上は滿洲軍總司令部が俘虜其他に依り探査情報したるものなれども、遼陽の役に於ける敵軍行動の顚末は、クロパトキン將軍が九月十二日附を以て、本國に報告せりと傳ふるものこそ、最も正確にして且つ詳細なるものなれば、乃ち左に揭げて彼我對照の便に供せんとす。

各方面よりの詳報に接し、玆に本職は八月二十六日以來の戰況に關し、左の報告を爲し得るに至れり。

我滿洲軍は八月二十六日を以て三群の陣地に據れり、即ち左翼はベテスより安平に至り中央はリアンデイアンサン、右翼は鞍山站に據る。

日本軍は同日を以て、我前進陣地の全線に對して攻勢を採り來りしも、我が中央に對する彼等の攻擊は擊退せられたり、安平に於ける我左翼は其陣地を維持したりと雖も、敵は極力奮鬪の後ベグの我陣地を奪ひ、以て湯河に沿ふて陣せし我が左側軍團の退路を危くせんとするに至れり、之と同時に敵の大兵鞍山站に於ける我が左翼陣地に對し、迂回運動を爲すを發見せり、是に於て本職は、リアンデーアンサン及び安平に於ける我陣地を利用し、時日を得て以て敵に重大の損害を與へんが爲め、各前進陣地に於ける我が諸軍團を殘らず遼陽へ引揚げたり。

我軍前面の地勢山岳多くして、特に南方戰線に到る道路が降雨の爲め不良なりしにより、遼陽に向ふ二日間の進行は、最も困難なりしに拘はらず、東方戰線に於ける軍隊の誠忠により、整然之を實行するを得たり、大砲は盡く之を曳き來り、又山路を經て殘りなく行李を運搬せるも其困難は殆ど信ず可らざるほど多大なりき、而して大砲若干門は山間を通じし歩兵之を運搬せり、而して散開地に於ける進行は更に一層困難なりしにも拘はらず、中央及左翼は砲及び行李を盡し遼陽に運び來るを得たり、右翼は鐵道（雨の爲めに最も甚しき損害を蒙りたる）の西方地區を橫過するの必要ありて、爲めに其進行は特に困難なりき、敵は我が後衞を追擊し、後衞は之に對し頑强なる抵抗を努めたり、右翼軍の一砲兵中隊は退却中其砲を沼地に曳き込み、將に泥中に沒せんとせり、之を救はんが爲め全力を盡し、一門毎に二十四頭の馬を附し、同時に若干の歩兵中隊は長綱を

以て之に助力したり、然るに人馬共に深く泥中に沒し、歩兵の多數は自身の自由を失ひ其同僚に依りて曳き揚げられたり、後衛を指揮せしルトコビスキー少將は、右大砲の曳き揚を掩護し、長く其陣地に踏み留まりたる爲め、其部隊は大損害を蒙り、同少將自身並に第四東部西比利亞狙撃聯隊長ラバン大佐は、此處に戰死せり、然れども前記大砲は砲車の頂上まで泥中に沒し、遂に之を放棄せざるを得ざりき。

軍は八月二十九日兵力を遼陽に集中し、一軍團は太子河の右岸陣地を占領し、他の軍團は左岸を占領す。

八月三十三十一兩日、日本軍は大勢力を以て我が前進陣地を攻撃したるも、到る處莫大の損害を以て撃退せられたり、我が右翼及び中央に於ける猛烈なる戰鬪は遂に接戰と爲り、本職をして特別豫備のみならず、我軍總豫備線の一部を戰線に增援するの必要に迫らしめたり。

黒木軍の大兵が太子河の右岸に渡りたる事は、八月三十一日に於て明となれり、八月三十、三十一兩日中我が左翼に對せし黒木軍の攻撃が、我が右翼及び中央に對せし敵の攻撃に比し、遙に微弱なりしを以て、黒木軍の主力は我が左翼を迂回し、我が軍の交通線路を絶たんとするものなりと推定せられたり。

是に於て我が前進諸陣地より本陣地に軍隊を引揚げ、黒木軍に對して大兵力を集中するの決心を爲せり、我陣地に於ける橋梁數の巨多なりしこと、並に之に聯絡する道路築造方の適好なりしに因り、前述の攻勢を取るべき各軍團は、夜暗に拘らず九月一日朝までに右岸に達するを得たり。

敵は我軍の放棄せし前進陣地を九月一日夕方に至るまで占領せず、同夕方より遼陽に對し砲火を開けり。

戰利品は一も敵手に落ちず。

本職は左の作戰計畫を採れり、即ち各隊は太子河右岸に渡りたるに付き、軍はシイクワンタンより烟臺炭坑附近の諸高地（該諸高地は十三大隊より成るヲルロッフ少將の率ゆる枝隊之を占領すべき筈なりし）に亘り陣地を取るべし、軍はシイクワンタン附近を旋回點として、日本軍陣地即ち官屯附近の太子河岸より煙臺炭坑附近に至る陣地の右側面に向て行動すること。

右攻勢運動は、九月二日即ち各軍隊が夫々指定の陣地に配置せられたる時を以て始まれり。

九月一日夜右翼に於ける軍團長より接手せる報告に據れば、日本軍は攻勢に移り、我が軍に取りて極めて緊切なるシイクワンタン陣地の西北方地方を占領し、同地方を占領せし露軍聯隊は退却の止むを得ざるに至りたりと云ふ。

因て翌日右地方を恢復する爲め、其の軍略を一變するの必要を見たり、シリクロンタシ・村及び同村附近一帶の高地は、漸〻九月三日の夕方を以て我が有に歸せり、同村東北方の諸高地（其前夜我が軍同地より擊退せられたる）に對する我突擊は、同日午後六時を以て始まれり、最初は成効せざりしが激戰は夜に入るも尙ほ止まず、我は屢〻同諸高地を占領せしも、遂に一時撤退の必要に迫りたり、是れ我多數の枝隊が之に加はり、互に混雜して命令の統一を保つこと甚だ困難に陷りたるに因る、然れども各枝隊の指揮官は攻擊を繼續し、遂に欲する所の陣地を占領し、以て我右翼軍行動の目的を達せり。

煙塞炭坑附近に於ける我左翼に於て、オルロツフ少將の率ゆる枝隊は、九月二日同炭坑南方の諸高地を占領し、以て南に面する頗る鞏固の陣地を得たり、次で同少將は南方數露里の陣地に在る敵に對し、二個砲兵中隊を以て砲戰を開始せり、同少將は又其一部隊を高地より派遣し、シヤキエツン村方面に於ける敵を攻擊せり、此行動は高粱中に於て行はれ、該部隊は正面及び側面射擊を受け混亂して退却を始めたり、高地に殘りし部隊も亦西方に退却せり、此時オルロツフ枝隊は他の諸隊を距ること二露里にして、オルロツフ少將は負傷し、又フオーメン將軍は負傷後死去せり。

我軍が以て攻擊の根據地點と爲さんとしたるシイクワン・タン附近の陣地は、我が軍九月二日夜を以て之を放棄せざる可らざるに至りしを以て、長し、午後五時頃諸高地の全部及び烟塞炭坑を占領せり、サムソノツフトニヤ將軍は其

所屬西比利亞コザック騎兵を下馬せしめ、勇氣を鼓して陣地を防禦せしも、徐々と擊退せられたり、而して敵は今や極めて鞏固なる諸高地上の陣地に占據せり、我右翼軍は既往五日間に受けたる損害に拘らず、此敵を攻擊せんとしたるも、甚しき危險あるを以て遂にリリアンカン方面に退却せり。

日本軍の右翼が我と接觸を保ち、且つ其迂回行動の旋回點と爲さんとしたるシイクワン・タン附近の陣地は、我が軍九月二日夜を以て之を放棄せざる可らざるに至りしを以て、本職は奉天へ退却の事に一決せり、右退却は九月七日を以て完結せり。

遼陽撤退は九月三日午後を以て始まり、翌朝終了せり、一切の武器は之を運び去りたるも糧食は撤去に暇あらずして之を燒棄せり、糧食の分量は八日間我全軍を支ふに足りしものなり、船橋は我軍之を取り外したる上運搬し去りたるも、假設船橋は燒夷し、鐵道の橋は破壞したり。

軍は整然たる秩序を以て退却したり、敵は追擊を企てたるも我之を擊退せり

九月三、四兩日我は東方よりの迂回行動豫防の警戒を爲したり、日本軍は南方よりの何等活動を示さゞるも、黑木軍は東方より攻擊の勢を取れり、タリエンカンに於ける船橋を守備せし我が諸部隊は、九月五日特に猛烈なる夜襲を受け、我は其陣地を維持せしも重大なる損害を蒙りたり、右戰鬪の最も猛烈なる方面に對せし一聯隊は、五百九名の死

傷者を出せり、我か左翼に對する攻撃の危險は、九月五日夕方に至りては既に消滅せり。

大砲の撤去行李の運送は、至大なる困難に際して首尾好く實行せられ、又奉天への退却は強勢なる後衛騎兵隊の掩護を以て、九月七日終了せり。

我は八月三十日以來奉天到着に至るまで、何等委棄せしものなし、工兵は各戰鬪を通じて誠忠を以て其任務を盡し、軍の退却中は道路を開鑿又は修繕し及び鐵道交通を援助し多大の利益を與へたり。

八月二十八日より九月五日までの我軍の損害は、戰死四千負傷一萬二千と概算せらる。是れまで如何にクロパトキン將軍が豫定の退却を以て敗北を糊塗し來りしと雖も、茲に至りて最早繕縫し能はざるは、實に笑止の極と云ふべきなり、然れども此役我軍も亦頗ぶる多大の損害を蒙り、九月十日の調査に依れば死傷總數實に、

一萬七千五百三十九名

にして其區分は左の如し。

右翼軍	四、八六六人
中央軍	四、九九二人
左翼軍	七、六八一人
計	一七、五三九人

右の內士官以上の死傷數左の如し。

死者	一三六人
傷者	四六四人
計	六〇〇人

豈驚くべきの數ならずや、而して我第四師團長小川中將は實に此役に於ける負傷者の一人なり。

尙ほ此役我軍戰利品の多大なるは、亦實に驚くべきものにして、各軍其主なるものを合算すれば、即ち左の如し。

小銃	三、五七八
同彈藥	一、六三八、七三〇
砲兵彈藥	一〇、〇五六
砲車	一中隊分
彈藥車	一二九
馬匹	七〇
圓匙	一五、九八五

十字鍬	五、六三九
斧	二、五七〇
刀	七五〇
拳銃	八〇
回光通信機	三
反射鏡	三
携帶電話機	六
罐詰	
材木	一八、九一五
米	二、五〇〇本
馬糧	二、〇〇〇石
外套	一三、六二〇石
	六、四〇〇着

此外別に石炭四十四萬八千斤と、輕便鐵道用軌鐵合計六千二百五十米突を鹵獲したりと云ふ。

此等戰報の到達するや、天皇陛下は九月一日を以て、左の勅語を滿洲軍總司令官に賜はれり。

滿洲軍は克く諸軍を糾合し、各路齊く防備堅固なる敵を擊退し、遂に之を遼陽に壓迫せり、朕其勇武を嘉す、以來日夜劇戰を繼續するを聞き、深く其勞苦を懷ひ、轉た軫念に堪へず。

朕は爾將卒の勇武に信賴す、爾將卒其れ益〻奮勵せよ。

次で又遼陽陷落の報達するに及び、天皇陛下より更に左の勅語を滿洲軍に賜はり、同時に　皇后陛下及び　皇太子殿下よりも優渥なる令旨を賜はれり。

遼陽は敵の兵略要地と爲し、夙に防備を嚴にし、軍資を集積し、全力を竭し死守せし所、今滿洲軍萬死を冒し、百艱を排し、奮戰激鬪數晝夜を連ね遂に之を拔く、朕深く其功烈の偉大なるを嘉す。

惟ふに其畫策愼重にして果斷、其運動整齊にして敏活、而して爾將卒之を貫くに忠誠勇武を以てするに非ざれば、焉んぞ能く此に至るを得ん、抑〻作戰の前途は尙ほ遼遠なり、爾將卒其れ自愛堅忍、更に全局の大成を期せよ。

勇敢なる歩兵第二十聯隊

余はこれより遼陽大戰の情報を記するに臨みては、先づ劈頭第一勇敢なる歩兵第二十聯隊即ち福知山聯隊が、最も多くの損害を拂ひて贏ち得たる功績よりして叙述せざるを得ず、即ち此聯隊こそは遼陽大戰に於て野津軍の中堅として、遼陽城先占の名譽を荷ひたるもの、

なればなり。

歩兵第二十聯隊は八月三日海城を距る約三里の所に於て、又々嶮悪なる山路に指し掛り、同六日栃木城占領に付き下賜せられたる勅語の捧讀式を執行し、同十日敵の一隊と衝突したるも、暫時に之を撃退し、同廿四日迄タンカツイチフなる一村落に宿營し、其翌廿五日より鞍山站攻撃の運動に着手し、廿六日東天稍〻白らみ渡りたる頃敵と衝突して此處に激戰を開始せり、敵はタウビンゴーの北方高地に陣地を占領し、同日午前七時頃より或る砲兵隊と共に敵に向て攻撃を始め、敵も猛烈なる射撃を以て我を迎へたるも、そは僅二時間ばかりにして午前九時に至り、敵は全く其の高地を打捨て悉く退却したり、此時聯隊にては前進の命令を發し敵を追撃したるに、敵の砲兵は我が歩兵を目懸けて射撃を爲し、中々危險の模様なりしが、午前九時二十分頃我一隊敵兵が據りて以て我を射撃せし塹濠を奪取せり、當時敵は能く彈着距離を測り、敵彈と共に我兵士が山上より山下に墜落負傷する有様なりし故、巖石を楯とし暫し砲彈を避けしめたるも尚ほ砲彈破片の爲め負傷したる者少からず、殊に某大隊長森少佐は同日午前十一時四十分頃敵彈の爲に頭部を砕かれ即死し、同時に桂聯隊長も腹部に重傷を負ひ、二十七日遂に戰死せり、かくて此夜は山上に露營したるが降雨の激しかりし爲め、全身濡鼠の如くなれり、此日桂大佐、森中佐は戰死し、蘆原中尉、本庄大尉は負傷せり。

八月二十七日命あり曰く、前面高地を占領して終日鞍山站を砲撃せよと、乃ち同夜十二時を以て一同出發泥濘なる山上を踏み越え、二十八日午前七時頃漸く目的地に到着したるも、降霧甚しく、殆ど咫尺を辨ぜざる有様にて、砲撃を試むること能はず、午後に至り雲霧の晴れたるを幸ひ、愈〻敵兵砲撃に取掛らんとしたるに敵は何時しか逃竄して一兵も居らずとの報告に接し、山上に登りて前方を望めば、山下の敵は僅に一連の防禦工事を施し、穴中より頭部を出し射撃するの設備を整へ、而して敵の騎兵は此處彼處に一團となりて運動せしが、午後四時頃三發ばかり我れに射撃を送くりたる儘、二回迄汽車を發して遼陽方面に向て運轉せり。

二十八日夜十二時出發七嶺子を過ぎ調年臺に前進したるに、前日我が聯隊が損害を蒙むりたる敵砲兵の陣地あり、依て晝餐後直に敵陣地に向て進むこと二里強、敵兵如何にと偵察すれば、敵は今や當さに退却中にてありし、翌日前進約半里の處より山に上り見れば、遼陽は早や目先き三里の處に近づき、敵は高塔上より屢〻通信を試み居るが如く、同時に敵は輕氣球をも飛揚せり。

二十九日愈〻砲戰を開始し、午後五時頃我が聯隊の屯營せる某村落に敵彈飛び來たりて火災を起し、又我が後方隊に命中して若干の死傷者を出せり、午後七時頃又もや敵彈の爲め十數名の負傷者を出したるが、此時原野少尉も亦負傷せり。

三十日出發愈〻遼陽總攻擊を開始せられ、早天より砲戰益〻盛んにして、萬雷の一時に轟き渡るが如く、光景壯絶を極め、我歩兵某聯隊は一小丘に據れる敵を擊退して之れを占領したるも、前方の進軍容易ならず、敵は巨大の砲列を布き、連發せる砲彈は我が歩兵の散兵線上に破裂し、爲めに味方の兵數は時々刻々に減少せり、午前十時某隊は第一線となりて、ヴヒアゴーと云へる村落を占領する任務を以て前進し、多大の困難を極め、彈煙硝雨の裡漸〻ウイジャコーなる村落に達したるに、敵は我が進擊を知りたりけん、砲擊愈〻烈しく、我れは村落北端の石垣を楯として防戰したるが、此時納大尉負傷し住田大尉代りて大隊を指揮し、頗る苦戰したるが、次で天方少尉又々負傷したる爲め、某中隊の如き其將校は唯一人となり、特務曹長、曹長を以て小隊長となしつゝ同夜十時頃まで戰鬪を繼續せり、此時山上にある敵は歩兵約一中隊許にして、前面に在る砲兵は少くとも砲二十門を有し、其砲兵の前面には歩兵濠内に潜み居たりと云ふ。

三十一日露營、九月一日は附近の砲戰を視察し、二日同聯隊は第一線となりてシユシガトンと云へる村落の北端迄前進せり、此處は遼陽南門の南方約千二百米突にあり、而して其前線は敵を距る約三丁の位置迄行進したることゝて、彈丸四邊に落下し、爲めに多數の死傷者を生じたりと云ふ。

三日拂曉より愈〻遼陽城に向つて全線の總攻擊を開始し、而して野津軍の攻擊點は、同城

の南側面にして、第二十聯隊實に之が中央隊たりしなり、而も同方面は敵陣中の最も堅固なる陣地にして永久築城たる二個の閉鎖堡あり、而して其中間は、鞏固なる散兵壕を以て連結し、其前面には先づ鹿柴を設け、次に數重の鐵條網を連鎖し、尙は其後方には多數の狼穽を穿ち、或は地雷を埋設せる上此等副防禦物の前面は、平地の高粱を刈倒して射界を清掃せるを以て、我が兵は全線悉く敵の射界に入り、進擊容易ならず、之を以て軍の第一線は夜暗を利用し、進んで敵前三四百米突に至るや、忽ち敵の發見する所となり、銃彈を蒙むる急雨の如く、到底前往するに由なきを以て、已を得ず一旦中途に停止せり、然るに敵の射擊は天明後益〻猛烈を加ふるのみならず、我は暴露せる敵前に起つことなれば、死傷相繼ぎ八木下聯隊長先づ傷き、代て聯隊の指揮を取りし第二大隊長今井少佐亦傷き、今は聯隊を率ゆべき上長官無きに至りしより、江上大尉は聯隊を指揮し、丸井少將又自ら此方面全隊の指揮を取らざるを得ざるに至れり、是に於て少將は豫備隊たる第三大隊を戰線に增加し、現狀を維持して午後に至りたるが、其間敵の射擊は寸時も止まず、我歩兵は平地に伏したる儘或は劍を以て地を掘り、或は手を以て土を掘り、僅に身を匿す丈の掩體を造りて、及ぶ限りの應射を爲し、以て命令の至るを俟てり、然るに時刻の移るに從て益〻死傷者を續出し見る〳〵死傷者は山を爲すの慘狀を呈するに至れり。

此際第二大隊は損害最も甚だしく隊中の將校は平方中尉一人を殘して他は悉く死傷し、中

尉爲めに大隊の指揮を採れり、殊に其第七中隊は、中隊長以下の將校皆倒れ、曹長下士も亦一人の全きものなく、上等兵遂に中隊を指揮するに至れり。

斯る苦戰中挺身傳令の任務に服せし聯隊付七名の傳令卒は、最も勇敢に其任務を盡せり、然るに是等の傳令卒も悉く死傷し、續て增加せし六名の傳令卒亦殆んど全滅するに至れり。

之を聞く小行李付輜卒なる者は元來戰線の後方に控ふる豫備隊まで彈藥を運び、豫備隊之を受取りて更に第一線まで運び行く例なるに、此日は豫備隊已に出盡せし爲め、輜卒は自ら進んで此任に當り、戰鬪部隊をして斯る激戰なりしに拘らず、彈藥に缺乏を生せしめざるを得たらしめたるは其功實に偉なりと云はざる可らず。

此朝同聯隊の第六、第七、第八中隊及他の一箇中隊とは、拂曉より南門前の敵線に向て突進せしが、是れ亦彈丸猛雨の如く、途中に伏すこと三回午前七時半漸く最先頭の鐵道豫定線路に先着せしが、四箇中隊の兵員中此地點まで達したる者僅に四十六名に過ぎずして、其餘は悉く途中に於て死傷したり、而して此四十六名中十六名は間もなく死傷し、殘る三十名は限りある彈丸なれば、敵に向て無益の射擊を爲さず、終日空腹を抱へて時機の到るを待ち居たりと。

以上は僅其一端を窺すに過ぎざれども、全線悉く斯る壯烈なる前進運動を敢行し、遂に我

が指揮官をして敢て全滅を辭せず直往邁進すべしとの決心を爲さしむるに至れり乃ち三日正午過ぎより他の師團と協力して、敵壘に突擊するの準備に掛り、乃ち門司大佐の左翼隊に歩兵一箇大隊を增し、丸井少將の中央隊に歩兵一箇大隊半を增加し、更に各砲兵隊に命じて之が掩護射擊を行はしむ。

茲に於て丸井少將は、午後四時前より突擊準備に取掛り、即ち歩兵第二十聯隊の第二大隊（中谷大尉指揮）同第三大隊（古賀大尉指揮）及び他の歩兵部隊（太平嶺の名譽大隊和田少佐指揮）の三箇大隊を、山縣少佐の指揮に屬して突擊隊と爲し、歩兵第二十聯隊の第一大隊（住田大尉指揮）をして此攻擊を援助せしむ、而して外に若干中隊を豫備隊として、松田少佐の指揮に屬せしめたり。

斯くて中央隊は彈藥の補給、擔荷の用意等一切の準備を了り、午後七時過突擊動作を始むるや、我砲兵隊は齊しく敵陣を聶擊して之に聲援す、待ちに待ちたる敵の機關砲は、此處ぞと俄然砲門を開いて發火を始め、同時に深濠堅壘に據れる敵の歩兵部隊は、最も劇烈に一齊射擊を爲し、飛彈恰も驟雨の如く、而かも距離は豫て測れり、銃砲亦新式の精銳、加ふるに地の利を以てす、勇敢も猛烈もあらばこそ、我兵の斃るゝもの忽ち戰塲に算亂し、流石の突擊隊も此猛烈なる彈雨に遇ふて、稍〻逡巡の狀見はるゝや、聯隊長代理江上大尉は毫然立ちて自ら軍旗中隊を提げ、最先頭に突出し、高く聯隊旗を押樹てゝ諸隊を麾けり

之を見たる諸隊は爭でか猶豫すべき、一時に起て喊聲を揚げ累々たる味方の死屍を踏み越ゑ乘り越ねつゝ、ユイファンミヤオなる敵の最堅壘を目蒐けて突貫す、此時丸井少將は豫備隊を麾きて突擊隊の後を押して奮進せしめしかば、朝來流石頑强なりし敵も、此猛勢に避易し、氣喪し膽沮して忽ち潰走し、茲に步兵第二十聯隊の軍旗は先占の名譽を荷ふて遼陽城頭の壘上に飜り、萬歲の聲數里の外に徹せり時正に午後七時五十分なりしと云ふ。此の如く我が一部隊已に敵壘の一角を拔く、乃ち遼陽城を圍繞せる敵の防禦線は忽ち缺陷を生じ我諸軍は其虛に乘じ潮の如く殺入して、各其關門を占め、敵の全線一時に大動搖を來しかくて遼陽の大戰は遂に全く我が勝利に歸し、赫々たる福知山聯隊の名譽は、永く我が丹靑の上を照らすに至れり。

首山堡の激戰

首山堡は遼陽の關門にして、遼陽の死命は實に同地の得喪にあり、之を以て敵は半永久的の防禦工事を施し、天然の要害と人工の防備とを以て、陣地頗る堅牢を極む、然れば此激戰に於て我小川中將を初め參謀長の如き亦負傷するに至れり、而して敵兵は首山堡西方標高九十九米突の高地に其首力を集め、勢力凡そ六箇軍團と稱せられ、我が軍は大久保師團を中央とし、小川師團其左翼に大島師團其右翼となり、又別に某旅團は小川縱隊の豫備隊となり、更に右翼の中央軍に連繫して、遠く東北に戰線を延長せり。

かくて三十日拂曉より我軍は攻擊を開始したるが、中央大久保師團は更に其兵力を兩分して左翼右翼とし、右翼は飯田少將之を指揮し、左翼は小泉少將之を指揮し、午前九時先づ右翼の一隊は標高九十九米突の山麓なるナレコーレ附近の陣地に、左翼隊は大道家臺附近に亘りて展開し、漸次に敵を壓迫しつゝありし際、午後一時三十分原砲兵隊は泥濘の惡路を冒して到着し、即時に小道家臺の南方鐵道線路の西方なるシュメンザー畑地に砲列を布き前面優勢の大敵に對して猛烈なる砲火を開けり、此に於て前面の步兵も之に力を合せ、ナレコーレの西方鐵道線路附近より遙に東北方に延張し、自然に敵の側背を壓迫し、正側兩面より猛烈なる小銃火を浴せ懸け、砲銃交〻發して戰鬪次第に猛烈となりしが、敵亦能く戰ひ我軍容易に之を奪取する能はずして夜に及べり、此に於て各師團は戰形の儘夜に入り月前に敵と相對壘せり。

然るに此日早朝午前六時より打續きて、敵の陣地全面に亘り激烈なる砲聲を聞きしが、其右方遙の砲聲こそ、敵が沙河以東より前進せる我右翼大島師團と砲火相接せるものなり、同軍團も此日シュランシ及び其東方の地區に展開して終日敵を攻擊せしも、是れ亦一擧敵を突くこと能はず、憾を呑みて黃昏に達したるが、左翼なる小川師團に至りては、元と此戰鬪に參加するの目的にあらざりしも、大久保支隊の小泉隊が非常の苦戰に陷りたれば、該師團の某旅團は進んで敵の右側に當り是れ亦非常の奮戰を爲したり。

此に於て大久保師團は夜襲を以て是非とも敵の陣地を奪取せんと、午前四時を以て之が決行の準備を爲したりしに敵兵は殊勝にも我軍が未だ夜襲を決行せざるに先ち、彼より先んじて我陣地に向て殺倒し來り、其數凡そ歩兵十箇聯隊の多勢なりしも、勇敢なる我軍は物の見事に之を撃退し終れり、加之我軍は此機に乘じ更に猛進して敵陣を奪取すべく、三十一日午前二時を以て猛烈なる夜襲を決行せしも、敵は其陣地を堅守して動かず、數種の副防禦を設け、機關砲を亂發して防戰し、容易に本陣に突入するを得ず、將士共に憤激更に一段の勇氣を鼓して突進し、遂に敵壘の前面を占領し、近きは僅に五十米突を隔つる迄に迫りしも、彼一歩も退かず我又た一歩も進むを得ず、互に目睫の間に在て睨み合ひの儘各自の陣地を確守せしが三十一日の朝に至り、敵は更に其兵力を增加しければ、我軍は益〻苦戰を重ぬるに至りたり。

此時勇猛なる大久保師團は敵の中堅たる標高九十九米突の高地の山麓なる、マエトーレ、ボーヅャヂンに向つて攻撃を試み、敵も亦幾回となく逆襲し來りたるも、我軍は其都度之を撃退したり、此時大久保師團の苦戰は殆ど其極度に達せんとし、中にも江口支隊の如きは同大佐先づ傷き平山加藤の兩少佐を始め、多〻の負傷者を出し、一時は該支隊は全滅に歸したりと迄噂されし程にて、其苦戰は實に筆舌の能く名狀し得る處にあらず。

更に大島師團に至りては、此日首山堡東面の新立屯附近なる高地を攻撃せしが、是れ亦一

勝一敗の姿にて進行し、某支隊は未明シャヲヤンスイ前方の山地に進撃し、之を奪ひたるも、三面より來る敵の砲流火に包まれて已むを得ず退却するに至り、關谷大佐爲めに名譽の戰死を遂げ後に陸軍の軍神と稱せられたる橘少佐も亦戰死し、同支隊中無事に生存する將校は僅に三人のみに至りたり、以て同支隊の如何に苦戰に陷りたるかを知る可きなり。又た某旅團は此日中央大久保師團と大島師團との間にありて、激戰し、其渡邊隊にありては支隊長負傷し、市川少佐以下十餘名の死傷を出し、是れ亦非常の惡戰を爲したり。更に小川師團に至りては、左翼に在りて大久保師團の苦戰を目撃し、之を救援せんが爲め午後三時首山堡西方鐵道線路の左側なる大趙家臺に至りしに、敵の弾丸は雨の如く來り、奮進せる小川中將を初め參謀長も共に輕傷を負ひ、市野、大木兩副官の如きは、身に三十餘箇所の彈丸を受けて戰死せり、蓋し師團長の負傷と共に副官の二人までも戰死したる如きは、日露戰爭中多く見ざる所、以て其激戰の度を推知するに足るべきなり。

全面の戰況此の如く猛烈慘憺なるを以て、中央縱隊の大久保中將は憤慨甚だしく、自ら各隊を叱咤指揮し、縱令兵團全滅に歸するも敵の首力を衝て其陣地を奪取せずんば一歩も退く可らずと、將士亦必死を期して奮闘せり、午後五時半に至り各方面の砲兵陣地及砲兵旅團よりは、盛に敵壘を砲撃し砲彈雨の如くなりしが、恰かも好し南山戰利品の十五珊舊砲數門は、首山堡を距る東南四千米突の高地に砲列を布き、又此日午前よりキンハン屯に在

りし南山の戰利品六珊知、八珊知、十三珊知半、加農砲等の一隊も、首山堡西南三千五百米突の陣地に在る砲隊と共に盛に砲火を開きたれば、左右兩翼の歩兵は之を機會として驀然突進猛撃し、大に敵兵に打撃を加へたるも、敵は尙頑として退却せず、此に於て大久保師團は、翌一日午前一時夜襲を爲して最後の總攻撃を爲す事とし、時刻に至り飯田旅團の將校下士は、鐵條網痕穿地雷等の副防禦を蹂躙し、鐵道線路を蹈み切りて或る地點に迄進みしが、小泉旅團も亦一分時五百發を發射し得る猛烈なる機關砲の彈雨を冒して或る地點に進み、非常なる困苦と莫大の死傷とを以て遂に頑強無比なる前面の強敵を撃攘し、午前二時廿分首山堡西方標高九十九米突の高地及同地一帶を占領したり、斯くも數日晝夜に亘り攻撃を續け、漸く敵の首力陣地を奪取したる事とて、上下の將卒何れも雀躍狂喜し、聲を限りに萬歳を絶叫したる其壯絶快絶の狀は、譬るにものもなかりきと云ふ、是と相前後して大島師團も亦多大の損害を物ともせず、突撃に重ぬるに突撃を以てし、遂に新立屯西方の高地を占領し、而して小川師團も其首力を以て大趙家臺に突進し、某旅團及び大島師團の一隊も同時にダズーイン西方高地を奪取して茲に全く遼陽の死命を制するを得たり。

黒英臺の激戰

黒英臺にして敗れんか、我軍は直に煙臺に出で以て敵軍の退却に大打撃を加ふるを得べし故に敵は全力を盡くして此處に防戰し、五回までも夜襲を試みて我軍を撃攘せんとせり、

然れども我黒木軍に屬して岡崎少將の率ゐたる北越旅團の一隊は、此優勢なる敵軍に對し、二日二夜眠食を廢して能く之を撃攘するを得たり、此の如きの激戰必ずや記する所なかるべからず、乃ち該師團に在りて戰況を目撃したる某將校の談話を假りて黒英臺激戰記を叙せんか。

九月一日井上縱隊は皇姑墳より左斜に前進し、岡崎隊は井上縱隊の前進に伴ひて運動を開始し、黒英臺の北方饅頭山を占領すべしとの命令あり、井上縱隊は乃ち午前五時程を發し岡崎隊は馬場大佐の一隊を井上縱隊に續行せしめ、又谷山大佐の一隊を續行せしめ、砲兵步兵の若干中隊を以て右側の警戒に任じ、谷山隊の山本中隊を殘し、馬場隊の宮川大隊を豫備とし、午前六時皇姑墳を出發せり、岡崎隊は井上縱隊の運動に伴ふ豫定なりしに、待つこと久ふして井上縱隊遂に來らず、兎角する中皇姑墳の北方に在りし我砲兵は、スイクワントン及び黒英臺の敵砲に對し射撃を開始し、敵砲亦た猛烈に應戰せり、須臾にして歩兵は黒英臺北方の敵と小銃火を開き其勢猛烈を極む、午後四時頃井上縱隊の左翼木越隊より岡崎隊へ通報あり曰く、某隊サンッアゴウまで前進したるに、煙臺方向より兵力未詳の敵の大部隊我右側に運動する模樣なるを以て、其敵狀を確むる爲め一時前進を中止することゝせり、知らず貴隊は如何なる動作に出でんとするかと、岡崎隊長以爲らく、黒木野津兩軍は遼陽に入り、新臺子附近に敵を追撃し敵は潰亂退却中なり、而して黒木軍の任務は側

背攻撃に在り、今にして前進を躊躇せば我の側背攻撃は爲めに時機を失せん、前面の敵縦令我に比して優勢なるも、之を撃破するに難からず、且つ敵の砲兵は高粱畑に掩はれ陣地分明ならざるも、井上縦隊の山砲と我砲兵と協力攻撃せば之を沈黙せしむる易々たらんのみ、而して井上縦隊は必らず一部を敵の左側背に殘し全部前進すべし、然らば我が右側は井上縦隊之に當らん、今や諸部隊は前進中にあり、之を中止せば却て我不利を招き、敵の激射を受くるに至らんと、即ち此際前進を中止するは斷じて不可なりと、又之を師團長に通報するは責任上可なるに似たれども、徒らに往復に時間を費し遂に前進の期を失するの恐れありとし、木越隊に向ひては中止は不利と考ふるにより前進すと通報し、師團長に對しては照會の時間なきを以て獨力饅頭山を占領することに決心せり、一旦之を占領したる以上、若し井上縦隊の前進遲延せば全く孤立すべし、豫め之れに對する決斷を乞ふと通報し、更に馬塲、谷山の兩聯隊長にも通報したる後、馬塲聯隊の右側空虚とならんを慮り、特に宮川大隊の三中隊を右側に増加せり、兎角する中時刻空しく移るを以て皇姑墳に在る我砲兵には、饅頭山一名臺山を砲撃せよと命じ、井上縦隊の山砲にも砲撃を依頼したり、此時木越隊より第二の通報に接す、曰く某歩兵隊を以て貴隊を援助せしむべしと、午後六時頃軍より命令あり、曰く岡崎隊は木越隊と共に可成本日中に饅頭山を占領すべしと、既にして又木越隊の副官來り、該隊の前進を報じたるも、饅頭山は我旅團之を占領すべし、

貴隊は乞ふ右側の警戒に任せられよと答へ、七時頃に至りて彼我の砲戰大に起る、井上縦隊の山砲亦陣地を進めて猛烈なる攻撃を加へ、饅頭山頭の爆發彈は宛然烟火の如く壯觀を極めたり、七時二十分日全く暮る。

暗夜の攻撃は容易に行ふべからず、乃ち已むを得ず攻撃は翌二日拂曉より開始するに決し、岡崎少將は前きに増加したる某隊の三箇中隊を引率し、黒英臺の東北高地なる陣地に赴きたるに、黒英臺東北半部は同隊既に之を占領したり、乃ち直に副官を十六聯隊に走らし、左半部を占領すべきの命を下せり、副官命を受け山を下りしに、十六聯隊より左半部は奪取せり、右半部を取らんとの通報來るに逢ふ。

二日午前三時十六聯隊の山本中隊を、黒英臺の西南方スイクワントンに遣はし、之を占領せしめ、山本中隊は監視兵を驅逐し、拂曉該高地を占領し防禦陣地を作れり、乃ち更に下林大隊の三中隊を派遣し、之を援助せしむ天明後前面を望みたるに、スイクワントンの砲はサフートンに退き、ツオフハンゴウ北方の鞍部に重砲あり、黒英臺附近に八門の重砲あり三面我を包圍するものゝ如し、午前七時頃軍より渡邊少佐來る、岡崎旅團長高阜木大隊長を呼び、敵狀に付き鼎立謀議中、サフートンの砲兵は儼然發砲を開始し、伊藤副官彈丸に中り左胸部を貫通せらる、旅團長と渡邊少佐は乃ち掩堡に入りたるに、敵は砲撃百發以上に及び、少尉と少佐は頭上一面の泥沙を被れり、就中ツオフハンゴウに在る三十八門の重

砲は、轟々爆々山野を震撼し激しく我を射撃せり、我兵悉く掩堡に隠れ沈着にして敢て動かず、此時一將校は敵狀展望の爲め外出し、少將命を下して曰く、敵の歩兵前進する時敵の砲聲止むべし、其時銃劍を以て突撃すべし、夫れまでは晝寢をなすべしと、一週餘日の攻撃前進に大疲勞を感じたる我兵は、命を受くるや否や砲烟を蒙りつゝ快然として掩堡に眠れり、須臾にしてスイクワントンに在りし山本中隊及び下林大隊の前面に、二箇大隊の敵兵前進し來れり、倘ほ其後方に大部隊あるが如し、少將は對抗の不利を察し退却を命じたるも、下林大隊長は之を見棄るは殘念なれば飽くまで死守すべしとて聞かず、乃ち更に十六聯隊より二個中隊を派遣し、之を援助せしめたるも、敵兵優勢なりしかば我兵非常の苦戰に陷り、遂に一旦占領したるスイクワントンを退却するの止むなきに至れり。

此日は我隊終日敵砲に擊ち詰められ、頼みに思ひし右翼の木越隊は遂に出で來らず、黒英臺及び附近村落の寺院には砲彈霰の如く落下し、出でゝ水を汲まんとすれば忽ち浴せかけらるゝ虞あり、之が爲め陣地と村落との交通杜絶し、散兵濠に在る兵は一滴の水をも得る能はず、一粒の飯をも喫する能はず、唯だ唾液にて生米噛るより外なき窮境に陷れり、已むを得ず夜に入らば一箇大隊許りにて、サフートンに奇襲を行ふべしと、空しく日の暮るゝを待ちたるに、何ぞ計らん此方より試むべく期したる夜襲は、先づ敵によりて決行せられたり、日の暮るや否や敵の約三箇聯隊逆襲し來れり、十六聯隊の正面に二箇大隊ばかり、

三十聯隊及び赤柴大隊の正面（赤柴大隊は日暮前三十聯隊の右翼に增加したるもの）に六箇大隊ばかり各隊孰れも從軍僧を先頭に立て軍樂を奏し突撃し來れり、夜の九時頃銃聲益〻猛烈にして近きは百米突或は七十米突に接し、殆ど我を包圍せんとせり、岡崎少將は射撃によりて敵兵の所在を知り、又我兵沈着の程度を知らんと欲し、九時頃突然射方止めの喇叭を吹奏せしめたるに、忽ちにして我銃聲一時に止み、敵の銃聲のみ盛に起れり、旅團長は之を以て我兵の沈着且つ勇敢なるを知り、嬉し涙に軍服の袖を濕ふしたりと云ふ。

此夜敵は十六聯隊の前面に二回の逆襲を試みたるも、三十聯隊の九中隊と力を合せ撃つて之を走らし、敵は死屍約三百を殘して退却せり、三十聯隊の正面には三回逆襲し、漸次兵力を增加し近接したるものは、手投げ榴彈の如き爆裂彈を我散兵線に投げ附け、其の機に乘じて勢激しく突撃し來れり、之れが爲め馬場大佐以下將校十四名負傷し、下士以下二百八十四名の負傷者を生じたるも、我兵沈着にして動かず、凛々たる勇氣愈〻奮ひ、突撃に次ぐに突撃を以てしたれば、流石頑強の敵をして遂に退却の止むなきに至らしめたり、其後愈〻敵の大部隊來襲せりとの報に接し、旅團長は豫備隊を引率し十六聯隊と共に正面より進み、馬場大佐は右翼より迂回し、敵に大痛棒を喰らはす計畫なりしに、敵は其の敵し難きを悟りけるにや間もなく退却せり。兩聯隊は乃ち追撃を止めて部隊を整頓せり、三日朝より我砲兵は陣地を占めて敵を攻撃したるが、敵は僅かに應戰したるのみにて意氣更に

振はず、此の如くにして黒英臺は正確に我北越旅團に依りて占領せられたるなり、此激戰に於て我死傷實に千名以上に達せしが敵の死傷者亦甚だ多く同一の場處に七百餘の死屍累々とし、尚ほ高粱畑に八九百あり、之に車輛にて運搬し去りたる分を合算せば、其死傷我に倍したるや疑ふべからずと云ふ。

以上固より此大戰に於ける一斑を叙述するに過ぎずと雖ども、頁數限りあり、獨り之を詳述するの餘裕を有せず、唯だ其梗概を知るに止めて此に擱筆するものなり。

敵國軍用ジャンクの拿捕と敵の掃海艇爆沈

九月二日細谷第三艦隊司令官の報告に曰く。

去る二十五日威海衛を發し、旅順口に向ひ糧食を輸送せんと企てたる露國軍用ジャンク二十六隻は、二十八日二十九日の兩日圓島及南三山島附近に於て、我封鎖艦艇の拿捕するところとなり、青泥窪に送致せられたるを以て、聯合艦隊司令長官の訓令に依り、取調の上其船舶及載貨を沒收し、乘員は三隻の清國帆船に分乘せしめて解放せり。

同日同司令官は又敵の掃海艇爆沈の旨を報告せり曰く。

八月三十一日敵は、朝來小蒸汽船四隻艦載水雷三隻特種掃海艇四隻端艇數隻を旅順口外に出し作業を爲せしが、午後二時二十五分城頭山下約一海里の所を掃海しつゝありし敵

の特種掃海艇一隻は機械水雷に罹り爆沈せり。

義勇艦隊の創設

有栖川大將宮殿下を總裁と仰げる我が海事協會は、九月九日内幸町なる同會に於て義勇艦隊創設委員會を開き、有地男爵委員長として松尾日本銀行總裁を會計監督に推薦し、左の建設趣旨及要綱を議決し、普く世人の贊同を得て其目的を達せんとす。

帝國義勇艦隊建設の趣旨

海國たる我日本の富强は主として海事の振興に須たざる可からず、我政府夙に見る所あり年々巨資を投じて海事奬勵に努めたる結果、造船及航海の事業は年一年に進歩の狀態にありと雖も、海事の範圍たる廣且つ大なり、苟も海事に關する凡百の事物一整之を振興し、相須つて完全なる發達をなさんと欲せば、擧國の民人奮て其經營に任せざる可からず。

是に於てか吾人は公共團體の我海事に必要にして、官民相應じて海事全體を振興するの一大急務なるを思ひ、同志相謀つて帝國海事協會を組織し、誓つて海國民の本分を盡さんことを期したるは、實に明治三十二年十一月にてありき、爾來五閲年、國家の爲め攻攻企劃する所ありしが、時勢の進運は自から吾人をして一大飛躍を試むるの機運に乘せ

しめ、日露の事あるに及びて倍〻船舶の不足を感じ、本年二月總會に於て戰時補助船舶（義勇艦隊）製造に努むべき事を決議せり、爾來各國の制度を參照し實際を調査し、苦慮精考の結果益〻其感を深うするものあり、敢て天下同憂の士に訴へ此企劃を實行せんとす。

抑〻本邦の海運事業は日清戰役以後頓に長足の進歩をなしたりと雖も、最近の調査に依れば、總噸數千噸以上の汽船僅に百九十四艘五十二萬二千八百四十二噸にして、其內遞信省の檢査に依り航海奬勵金下附認許の資格ありと認められたる船舶は、四十五艘十九萬五千四百四十五噸に過ぎず、而かも其多數は一朝事あるの日に當りて、軍國の急に趨かざる可からざるを以て、貿易通商植民より延て外交に至るまで一大頓挫を生ぜざるを得ず、其影響する所國力發達の點に於て長く回復す可からざる傷害を蒙るのみならず、上に記す如き僅少の船舶にては、軍事輸送すら完全に遂行すること能はざるを慨む。

而して我海軍の現勢力は如何、軍艦の不足は官民共に認むる所、之が擴張を圖るべきは夙に朝野の唱ふる所なるも、新興國の日本は新たに施設經營すべき事業尠からず、爲めに軍艦製造の事は十分に其目的を達するに至らずして止みしが、日露の事起りて軍艦の不足を感ずること深く、戰爭の前途を憂ふるものありしも、幸に我が將士の機敏にして勇敢なる毎に攻勢を取りて敵艦隊を畏縮せしめ、數回の交戰を經て極東の海上權全く我れに歸したりと雖も、將來の日本は今日の日本にあらず、列國環視の下に行動すべき日本は之に伴ふべき十二分の覺悟あるを要す、單に一國の獨立を保持する上より云ふも、東洋の永久的平和を保全する上より云ふも、列强の現勢に鑑みて最も適當なる方法を選び、海軍力增進の道を講ぜざる可からず。

蓋し海軍の實勢力は商船の增加を待て擴充し、航路の伸張は海軍の補導に依て其効を全うするものなれば、完全なる海事の發達を計らんと欲せば、勢ひ軍艦と商船の駢進を期せざる可からず、而かも我國に於ける刻下の事情は力を雙方に專らにすることを容さず、今後の海軍は國民自覺の力と當局者其人を得て大に擴張せらるゝ所あるべしと雖も尙ほ之を助長し有効ならしむる爲め、戰時補助船舶（義勇艦隊）を建造し、一面海軍力の扶殖を圖ると共に一面商船の不足を補うて通商貿易の增進を計るは、將來多大の希望を有する我日本が列國の大勢に後れざらんことを期する所以にあらずや。

吾人の所謂戰時補助船舶なるものは、露國に於ける義勇艦隊及び英國に於ける「キユーナード」汽船會社船舶の如く、平時に在ては普通の商船として交通運輸の業務を執り、一旦事あるの日に當つては直ちに國家の命令に服し、或は假裝巡洋艦として或は各種の補助船舶として一大活動を試み、航海業の促進を圖ると共に海軍力の發現を增大ならしむるに在り、彼の英國が世界の海王として無數の船艦を有するに拘はらず、尙ほ且つ年

年巨大の補助金を投じて「キューナード」汽船の擴張を圖るが如き、彼れが多年の經驗に徴して補助船舶制度の實際有効なることを認識したるに由る、又之を露國に見よ、彼れが遠く絕東の地に於て其國防移民商工業の進度を顯著ならしめ、兎も角も日本海陸の精鋭を此處に引受け未曾有の大戰爭をなすに至れるもの、其一半は露國義勇艦隊の活動より其經營を迅速ならしめたるに歸せざる可からず。

斯の如きは普通の營利的事業と自から其選を異にし、利害の外に超脫し、終始一貫公共的觀時及び事變に於ける軍事行動の振作を目的とし、從て假裝巡洋艦其他特殊の船舶は、之を念を以て專心是れが發達を計らざるべからず、一般普通の營業者に向つて到底其企劃を待つ可きにあらず、國民協力して之を經營するの至當なるを認め、本會自から進んで之れが創業の任に當らんとす、然れども其計畫頗る遠大にして、擧國一致の協力を待つにあらざれば之れが成功を期すべからず、冀くは大八洲の同胞擧つて吾人の此企劃を助成せられんことを。

要　綱

第一條　帝國義勇艦隊は、男女を問はず全國民の義金を以て之を建設す。

第二條　船舶の構造に關しては、關係當局大臣の指示を承け之を定む。

第三條　帝國義勇艦隊船舶は、總て日本帝國に於て之を製造す。

但時宜に依り適當と認むる船舶を購入することあるべし。

第四條　帝國義勇艦隊船舶の維持方法は、創設委員會に於て之を定む。

第五條　義金は金一千五百萬圓を募集するを以て目的とす。

第六條　義金醵出者には、本會理事長より總裁に具申し、左の區別に依り徽章を贈與す。

一、一人にして義金一圓五十錢以上を醵出したるもの

二、一人にして義金十五圓以上を醵出したるもの

三、一人にして義金三十圓以上を醵出したるもの

四、一人にして義金二百圓以上を醵出したるもの

五、一人にして義金五百圓以上を醵出したるもの

第七條　一人にて金三百圓以上の義金を醵出する者は、本會理事長より總裁に具申し有功章を贈與す。

第八條　義金は義勇艦隊建設の目的以外に支出することを得ず。

敵巡洋艦レナの武裝解除

九月十一日午後一時半一隻の露艦忽焉として米國桑港なる金門灣頭に現はれ、平然投錨して船體修覆に着手せんとせり、船は假裝巡洋艦にして露國義勇艦隊に屬するもの、現名はレ

ナと稱すれども曾てヤーソン號と呼ばれし者長四百九十三呎、幅五十四呎三吋、速力十九節半、噸數一萬二百二十五噸、千八百九十五年英國ヘツバムに於て建造せる所に係り、着桑の當時乘組員士官二十一名船員四百九十七名、搭載砲數二十三門、艦長をバーリンスキーと呼ぶ、其言ふ所によれば同艦は浦鹽を發して途上薩哈嗹島バヤニワに立寄り、夫れより直に桑港に針路を取り、日を閲みする十有九日、浦鹽を去てより三十一日にして米國に來れりと、然れども其船體破損の個所に照して同艦が太平洋上漂泊せしはこれ以上なることを疑ふ可からざるもの〻如く、而して同艦が卒然入桑の目的は、畢竟日米間通航の我が商船を拿捕せんとするに在りて、殊に九月二日香港出帆の東洋汽船會社所屬船亞米利加丸を取て押へんとするにありしに似たるが、終に其機を逸せるのみならず汽罐に破損を生じたるより、其修繕旁〻日米間航行の商船に就き開知する所あらんとし斯くは入港せるものなるべしと。

桑港船舶審檢官は同船に到りて親しく調査する所あり、結果同艦は修覆の必要ある旨を報告したるが、兎に角同國官憲は中立國際の條規に依り、直に同港に碇船中の自國軍艦に命じて嚴重なる監視を爲したるが、後我が駐米高平公使よりの抗議に依り、同艦が航海に堪へ得る迄の範圍に於て其修繕を許すも、遂にケープホーンを廻りて歸國するか、或は浦鹽港に赴くか將又戰爭終局迄武裝を解きて同港に滯留するか三者其一を擇ばざるべからざるの嚴談を爲し、遂にベーリンスキー艦長自ら武裝を解き、乘組員一同交戰繼續中は米國領土內に抑留せらるゝことを希望する旨を回答するに至り、漸く其局を結ぶに至りしこそ笑止にも亦憫れなれ。

郡司大尉の遭難

九月三十日ペトロパウルスク（カムチャッカの地名）發の報なりとて、ルーター電報は、左の可驚報告を爲し來れり。

五月十八日以來數隻の日本帆船、勘察加沿岸に顯はれたり。

六月中旬日本の郡司大尉は、海軍豫備兵百五十名を率ゐ、小銃及び大砲を以て勘察加西岸ジャウイノ及マリギンスに上陸し、村落を掠奪し住民を放逐し、人民に對して日本の主權を認むべき旨の布告を發したり、又ジャヴイノ寺院の軒には、日本國旗を掲揚し且布告を掲げて曰く「此領土は今後日本に屬す是を認めざるものは死に處す」と、六月十三日豫備大尉シャップは、百名の國民兵を率ゐてペトロポーロスクより帆船に搭し西岸に派遣せられ、又下士の率ゐる十名の分隊は、ボルシエレックより陸上にて派遣せられたり右二隊は七月二十六日ジャウイノより遠からざる所に於て相合し、日本兵を敗り郡司成忠は捕はれたり、露兵の損害は戰死一名負傷四名なり、日本兵には十七名の戰死あり、

彼等は其負傷者を運搬し去れり、日本國旗及び布告は撤去せられたり、露兵は又日本帆船五隻を焼き凡て七十名の日本人を殺せり。

次で函館辨天町水島儀詰所の出雲井一なる人が、自ら遭遇したる事實なりとて、歸來人に語る所に依れば、同人は七月一日全勝丸に乘組みて函館を出帆し、十二日目に占守島に寄港したるに、折から郡司大尉は男子の一行を引連れて出漁中なりしを以て、殘留の婦人連に内地の事情を語り、夫れよりイチャ川と云ふに到り上陸荷運の準備を整へ居る中、計らずも川端の砂中に日本人十名許目も當てられぬ最期を爲せるを發見したれば、直ちに之れを掘り出して取調べたるに、右は全く海越丸乘組員にして、死體は皆砲丸を印し、中には劍を以て頭を破り胴を切りたるもあり、何れも死後二週間を經ざるものと認めたれば、こゝに初めて自ら危險の位置にあるを知り、取敢へず同地を出帆してコンパ川に向ひ、夫れより他九隻の漁船と共に漁業に從事せる中、八月九日朝二時半頃不意に露兵歩卒百名許顯はれ來りて攻撃を開始し、全勝丸以外の八隻は悉く焼き拂はれたれば、其船員漁夫共百四十七名の内百二十四名を全勝丸に收容し、（他の二十三名は山間に逃れたり）途中幾多の困難を經て、八月二十七日無事函館に歸港せり、又其後占守方面にて遭難したる帆船續々歸還したれば、同人は中に就て其實驗談を聞きしに、明徳丸と云ふ一船ヲゼルナヤに寄港上陸したる時、川端に砲臺を築き砲を置きたる所あり、又小屋の跡ありて新臺二十一並立し、小屋

の柱標木等には無數の彈痕あるを認めたり、同船員の聞く所によれば、郡司會長曾て同村落に大砲を打込み、土人を追ひ拂ひたるも、其後土人二名來りて降伏の意を通じ、併せて他の土人一同に降伏說諭を願出たるを以て、會長は通譯澤田及び醫士某と共に土人に從ひ行きたるに、二三日を經るも歸り來らず、四日目に及びて土兵襲撃し來り、在島員七名外船員十四名を殺害したるものなりと云へり、尚報効丸はヲゼルナヤにてボート七隻を分捕し船員七名にて占守に回航したりとの風說あり云々と、稍〻前報と符節を合する所あり、而して其後歸來の遭難者が語る所に依れば、此等の遠洋漁業船は、前記全勝丸の外、喜福丸貫通丸、住吉丸、大慶丸、寶生丸、長昌丸、榮昌丸、榮壽丸の八隻にして、何れも百噸前後の風帆船なるが皆遠洋漁業の目的にて北千島近海に航泊し居りたるが、八月八日飲料水汲取或は食料用鮭漁業の爲め、東察加のコンパコン河に溯り碇泊せり、然るに八月九日午前四時頃武裝したる一隊の露兵（凡そ百名許にして服裝一定しあらず）突如として現はれ來りたるも、武器無き漁夫等は之に抵抗すべき力を有せず、已を得ず着の身着のまゝにて身に危險なき中にと河口指て逃走したり、然るに露兵は八隻の船舶に漕寄せて是等に火を放ち、悉く焼棄したる上再び彼等を追撃したれば、恰かも好し河口に碇泊し居たる函館谷地頭町水幟麟多所有帆船全勝丸に救を求め、百十四名の避難者は悉く是に乘り込めり、夫れより全員を調べ見たるに、石川縣吉井吉次郎所有喜福丸乘組賄夫鹽田藤太郎外三名、船長翅

谷庄三郎外十七名と外に實生丸船長野田長七の見えざるにより、全勝丸船長に救助方を依頼したれども至難の事なりとて應せず、其儘直ちに出帆して二十一日擇捉島茨寄に着し、總員百十四名は茲に上陸し、全勝丸は直に出帆したり、扨て一同は藥取戸長役場の保護を受け、二日分の食料を貰ひ筆生の案内にて紗那に出で、同地の役場にては三井、高木の漁舍を借受け一同を收容し保護せり、其内郵船北見丸函館より入港したれば、半數だけ是れに乘じて來り、尚殘部は次便船にて送還さるゝ筈なり、此地にて貞一丸遭難の事を初めて聞けるが今彼地に殘留せる喜福丸船長以下の運命も是れと同じかる可きを疑はず云々と、由是觀之、彼等は日露開戰中大膽にも露領に渡りて漁業に從事し、遂に以上の如き危難を受くるに至りたるものなり、唯だ郡司大尉に至りては、其後敵國に捕虜となりて生存し居る事は明白なりしも、其果して何等の行動に依りて捕虜となるに至りたるやは、暫く不明なりしも三十八年十二月同大尉が送還歸朝せらるゝに及びて、全く明瞭なるに至れり、今左に同大尉が新聞記者に語りたる談話の要領を掲げて其顚末を明にすべし。

私の勘察加へ行くことになりました目的は、昨年の五月末頃でした、鳥羽丸と云ふ船が占守に參り、內地の新聞を持つて來て呉れまして、初めて日露開戰のことを知りましたが、同時に同船員の談に、內地の漁船十二三艘今回勘察加へ參つたとのことを聞きましたから、夫れは又如何なる目的を以て往つたものであるかと尋ねますと、委しく知らぬ

が、何でも海戰の結果日本が大捷を得て、已に海上安全になつたに付き、茶、砂糖、麥粉等を積み魚と交換する位の考へだらうと思ふが、自分等も時宜によつては往つて見ようと思ふて、模樣聞き旁〻本島へ來たとのことであつた、そこで私は夫れは大變なことである、武器でも持つて往つたのかと聞くと、夫れもどうだか知らぬとのこと、夫れでは無暗と往つて上陸しようものなら、此方は經驗もなき輩ばかりで必定遣らるゝに相違ないのみならず、若しも幸ひにして鬪爭に勝つたとしても、無暗に打ち合ひをしたとしては後日如何なる面倒なことが持上ることがないとも限らぬによつて、兎も角も自ら同島へ往つて彼等の目的も聞き、且つ自分の意見も明かして、何とか爲ねばならぬと云ふことが一つと、今一つには斯く戰爭中であつて見れば、第一今後の自分等の占守に於ける糧食其他事業交通上の關係もあるから、勘察加の模樣を探知して置く必要が生じたので、此二つの目的を果たす爲めに愈〻往くことに決した次第でありました。

愈〻往くことになりましても、自分等の船が何時來るか判からぬから、鳥羽丸に便乘することゝし、醫者の小田直太郎と通譯の澤田三郎と外に海員岡野新吉の都合三名と共に、七月初めに占守を出帆し、途中一二港を一寸覗いてオゼルナイに着き、兎も角も上陸しましたが何の音沙汰もなく一向何が何やら譯が辨からぬから、少しく內地に踏み入つて偵察して見ようとのことであつたけれども、何樣陸上偵察などには少しも經驗のないも

の許りと來て居るから、まア〳〵其内にと兎や角して居る内に、突然一人の男が現はれ
書面を持つて來たから受取つて見ると、名宛も何にも無いが、中には英文と露文の同文
で、本島には豫ねて浦鹽及び亞米利加から總べての糧食品を持つて來るのであるが、本
年は日露戰爭の爲めに交通杜絶して食糧に缺乏を告げ甚だ困つて居るから、是非砂糖麥
粉茶を少しにても賣つて呉れ、代價は貨幣なり毛皮なりにて必ず御拂ひすると書いてあ
るから、お前は何處から來たか何と云ふものかと片言交りの通譯で尋ねると、自分はカ
ルソンと云ふものであつたが、外に調べ樣もないから此村の村
長は居るかと尋ねると、居ると云ふから、そんなら此處へ連れて來いと云つてやつた處、
直ぐに一人の男を連れて來たから、貴公は村長かと聞くと、然であるとのことで、同人
の云ふには糧食缺乏した上に病氣が流行して甚だ困つて居るから、是非食糧と醫者を貸
して呉れと、眞實らしく申出でた、そこで約束の時刻に一定の場所に往つて見ると、誰
れも居ないから不思議なことだと思ふて居る内、突然百二三十名の土人が手に手にお粗
末ながら武器を携へて、バラ〳〵と現はれ出で、何を爲るのかと唯あつけにとられて居る
内に、其内の一名が自分等の邊り近く進み寄りて、お前等は兎も角も吾等の云ふがまゝに
ペトロパウルスク迄往つて呉れと云ふから、此處で無理に爭ふ譯に行かぬのみならず、
兎も角もペトロパウルスクまで往つたら譯が判るだらうと思ふたので、云ふがまゝに從

いて往くと、自分共四名は皆別々にされてしまつた。
夫から自分はペトロパウルスクに五六日も獨りで居たが、燈臺の看守らしい奴が遣つて
來て、色々慰める樣なことを言つて呉れたけれども、何樣通譯に別れてしまつたから向ふ
の言ふのも、こちらが言ふのも更に言葉が通ぜぬので、只出さるゝものを喰ひ、手眞似
で話して居たが、五六日も經つと自分は齒痛が起つたので同所の病院に乞ふて入れて貰
つた、ところが曩きに別れた醫者の小田も來て居たから、爾來又漸く二人連れとなつた、
其後自分は碌々茶も呑まぬ内に齒痛は止んで引續き同所に居つたが、本年四月に至り更
に自分は少しく奥なるミルクヲ村へ往けとのことで三晝夜で往き着いた、醫者は同時に
隣村へ送られたとのことで、共に本年八月迄其儘で居たところ、更に又コレヤキーと云
ふ村に自分は遣られた、此村には曩きにペトロパウルスクに居た長官連中一人も殘らず
逃げて來て居たので、凡そ一箇月半も此處に居る内、彼等から日本軍愈〳〵勝ちと極り、
まだ批准濟みとはならぬがポーツマスに於て談判落着平和條約成立したとのことを聞い
た、その時は流石に嬉しかつた、其前とても色々土人共から戰爭の話を聞かぬでもなか
つたが、何にしても言葉が善く通ぜぬのだから、何時も不得要領に終つて居たのであつ
たが、今此話を聞いて始めて安心と同時に喜悦禁じ得なかつた、そうこうして十月末日
に露國義勇艦隊の一部が入港して、愈〳〵同艦隊中の一艦に乘込み浦潮へと廻されたが、

着港したのは十一月十二日で、恰も浦潮大騒擾眞最中であつたから、船から熾に火の上る處を眺めた、船中にては別に爲すこともなく暮して居たが、何時迄も歸へしそうな風もないから、歸すものなら早く歸へして呉れと申出た處、此時丁度連勝丸が入港したので、同船へ移され本月三日同港を出帆し、五日敦賀着六日同地出發濱松に一泊の上今朝歸り着いた次第です。

以上御話し申上げた樣の始末で、同行者さへ別々に爲され、小田の外は行衞消息更に相知れぬ次第ですから、勿論烏羽丸のことはどうなつたか少しも知りませんが、同嶋滯留中土人共から日本人漁夫十七名殺されたと云ふことを聞きましたから、若しこれを事實とすれば同行者中二名即ち澤田岡野も恐らく同樣の悲境に陷りはしなかつたかと豫想するのみです、私共が斯樣のことに相成りましたのは、其初めは何の爲めか更に判りませんでしたが、後で思へば初め村長云々から手紙の一件から、總べて彼等の術中に陷つたものであると云ふことを心付きましたが、唯自分は海軍の豫備軍人であるから、捕虜とでも思うて取扱つたのでしよう、ですから自分では何だか更に判からず、只以上申した通り言はゞまゝについて廻つて歸つて來たと云ふに過ぎぬのであります、從つて同嶋の事情等に就ても、境遇が境遇故取調べることなども充分には出來ませんでしたけれども、多少は又

た同嶋に關する意見も無いではありませんペトロパウルスクへ廻はされた以來、何處にても海軍の豫備將校として待遇されましたから、取扱ひは先づ寬大で、居常自由の行動を許され、又飮食の如きも塲所によつて相違はあれど、概して此土地に於ては先づ上等の方でした。

國民後援會の毛布募集

我が國民後援會に於ては左記の趣旨に依り、全國各新聞通信社の贊同を得、廣く天下に檄して毛布を募集したるに、之に應ずる者岫を出づる雲の如く、忽にして其數約二十五萬枚の多きに達せり。

趣意書

我忠勇の軍人が滿遼の野に奮闘して連りに露軍を破るは、國民の感謝して措かざる所、其勁敵と戰ひ又苦熱と闘ふの艱難辛苦は、吾等國民の同情に堪へざる所なり、今や既に秋冷の候に入れり、滿遼の地は忽に冬季に移るべく、前途尙遼遠なり、久しく炎熱に戰へる軍人は、更に氷雪の裏に苦寒と闘はざるべからず、其困難蓋し炎天熱地の間に立つに超えん、クリミヤの役英佛の軍冬營の準備不充分なりしが爲め、寒威に斃れたる者敵の劒火に死せる者より多く、其慘毒今に至るまで人を震慄せしむ、我當局の冬營に對する必ず

充分なるべきは吾等の信ずる所なり、然れども國民は之を以て自ら足れりとすること能はず、且つ遠征の勞に服する軍人に對し、吾等國民當局の爲す所を裨け以て其及ばざる所を補はゞ、同胞の軍人に對し以て誠情を表すべく、又以て有益の効果を收めん、蓋し冬季の準備は多々益々可なるべきが故なり、其方案種々あるべしと雖も、差向き我等の急要を感ずるは毛布の供給なり、國民及各自所有の毛布を出し之を陣營に寄贈せば、慰藉實用兩ながら目的を達すべし、五枚を所持する者一枚を出し、二枚を有する者一枚を出し、全國に通じて之を行はゞ、一擧して數百萬を得んこと敢て難きにあらず、母其子の出征に際し手づから縫ふて送る所の襯衣は拙なりと雖ども、縫工が巧みに製する美麗の衣服に優るべし、吾等同胞の心を籠めて集めたる家々の毛布は、軍人を尉藉する點に於て固より新舊の別あることなし、吾等前記の趣意に因り、廣く全國の同胞に告げ、其所有の毛布を集め當局に依頼して之れを陣營に寄贈せんとす、全國の有志此意を諒とし吾等の運動を助け此目的を達せしめんことを切望に堪ず、謹で全國忠愛の諸君に告ぐ。

實行手續

一、東京市に於ては實行の手續を擧げて各區役所に依頼し、其快諾を得たり、毛布を寄贈せんとする有志者は、區役所と御打合せあらんことを乞ふ、尙毛布募集勸誘方は左の如くなり。

一、毛布には凡そ竪五寸横三寸の白布を縫付け、寄贈者の住所氏名を記せしむること。

二、寄贈者には領收書を交附することゝせり。

三、募集期限は東京市は十月十日を以て〆切とす。

旅順港口の强行偵察

九月十三日我が艇隊は、夜に乘じて海軍大尉川浪廉治指揮の下に旅順港口に强行偵察を試みたり、此行川浪大尉以下悉く戰死し、生還する者僅に三人、以て如何に其働きの壯烈なりしかを知るに足るべきなり、當時の光景は其生還者の一人原田二等水兵の談話に依りて詳なり、曰く。

予等は川浪大尉指揮の下に十三日夜某地を發し港口に迫りたり、夜色黯憺として濤聲の喧豗を聞く、黃金山其他の諸砲臺より照射する敵探海燈の凄然海面を光被するは、予等の行動に取りて大に不利とする所なるも、四圍の光景正に予等の任務に於ける好個の舞臺となり、予等は最も敏捷に敵の探海燈を避けて恙なく港口に達することを得たり。然るに予等の任務は此位置を以て滿足に遂行する能はざるより、更に深く港内に突入せんと試みし折柄、港口附近に据付けある敵の探海燈は忽ち予等の潛行せるを發見し、直に陸上各方面に傳へて探海燈を集照し來り、如何にしても隱るゝ能はざるを以て探海燈の

他に移るの時期を待ちたるも、既に港口に達し最も彼等に接近したることゝて、遂に引返すの餘儀なきに至らしめたり、依つて直ちに艇首を轉じたるが亂射雨の如く注ぎたる敵の一彈乘艇に命中し進退の自由を失ばんとするに至りたれば、急ぎ百米突許り港外に向つて引返したり、敵は予等の行進を見るや直に猛烈の亂射を加へ、第二の巨彈を受くるに至れり。

此時指揮官川浪大尉は艇外に吹飛ばされ其影を失ひたる外、武田二等兵曹、安田、山中兩機關兵及び前田一等水兵等大負傷をなし、更に丹羽兵曹をも奪ひ去りたり、斯くて戰友森本兵曹は川浪指揮官の海上に浮べるを發見し、直に之を引揚げたるに、大尉は此時既に片脚を失ひ居たりき、我艇は第一彈に因りて破壞せられたる以來、一時行進の自由を失ひ徒らに敵彈の的となりしが、更に第三彈を受くるの不幸に會せり、此時再び二名の戰友を斃され、予は砲に接近佇立し居たりしが、第三彈に因りて右手と膝とに負傷し、同時に大爆聲の爲めに襲するに至りたり、又前田一等水兵は斃れ森本兵曹は右足外三箇所に火傷を受けぬ、其他三名海中に飛ばされたる者あり。

予等は猶勇氣を百倍し來りしかば、如何なる手段を取るも敵に接近し刺違へて死なんものと心矢竹に逸れども、如何せん船は意の如く動かず、砲彈は急霰の如くなる折柄、指揮官の命として各自其欲する所に隨つて生命を全くせよと傳へられしに依り、予は三箇所の負傷を受け居たるも、板を抱いて海中に躍入り、他の友艇に達せんとせしが、我艇上には既に殆んど人影を認めざれども敵彈は我附近に集中落下し、跳ね上るを見る煙は恰かも幕を張りたる如くにて他の友艇との間は甚だ接近したるに拘らず、明かに之を認むる能はざらしむ、予は再び我艇に引返し負傷の痛苦と波濤の困難を犯し、辛うじて歸着したるに、艇上には健全なる者一人もなく、唯松村一等水兵のみ漸く身體の自由を有し居たるのみ。

予は松村に依りて引上げられたるも、身心既に疲勞を極め何事をも爲す能はず、且寒氣に堪へ難きを以て直に下甲板に降り毛布を纏ふて臥したり、斯くて艇内に殘存するは銃創を被りたる者のみにして慘憺たる光景痛絶を極めたり。

此時敵の水雷艇三隻は港内防材の側らにあり、我艇とは約五六百米突の所より我艇に迫らんとせしも容易に近づき來らざりき、而して陸上の砲臺は自個の水雷艇を破壞するの惧あるを以ての故か、俄かに砲火を休止したり、此時友艇疾走し來るありて數間の所に停止し、其乘組の一人は直に海中に跳入り網を以て予等の艇に結び付けたれば、予等は我愛せる艇と共に兩艇に曳かれて、歸途に就くを得ることゝなりたるが、顧みれば全員一人の健全者なく、森本兵曹、前田一等水兵及び予と三人のみ呼吸を存せり、指揮官以下他の十名は壯烈の最期を遂げ、死骸だも留めざる者さへあり、中に佐藤機關兵の如き

は重傷を負ひながら戰友に對して「大きに失敬するぜ」とて莞爾として最も悲壯の最期を遂げたり、斯くて予等の某所に歸來したるは十四日午前八時頃にして、慘憺たる光景の裡に無念の涙を飲むこと八時間に及べり云々。

軍人特別賜金の規定

二十七八年役及び北淸戰役には、戰死者に對する特別賜金少將二千百圓以下、兵卒は各級通じて百五十圓に過ぎざりしが、今回其額を增加し左記の割合を以て下賜せらるゝことゝ爲りたり、尙は此の下賜金に充つる五分利付公債は、額面百圓を實價九十圓に換算して附與せらるゝ筈なり。

戰死者（負傷後死亡共）		出征中傷病歸朝後死亡		從前の戰死者	
少將	五、〇〇〇		一、二五〇		一、一〇〇
大佐	四、〇〇〇		一、〇〇〇		一、五〇〇
中佐	三、三〇〇		八三〇		一、二〇〇
少佐	二、五〇〇		六三〇		九〇〇
大尉	一、八〇〇		四五〇		六〇〇
中尉	一、四〇〇		三五〇		四五〇
少尉	一、一〇〇		二八〇		三六〇
曹長、一等兵曹	七五〇		一九〇		二五〇
軍曹、二等兵曹	六九〇		一八〇		二五〇
伍長、三等兵曹	六一〇		一六〇		
一等水兵	五六〇		一四〇		一五〇
二等水兵、上等兵	五二〇		一三〇		
三等水兵、一等卒	四七〇		一二〇		
四等水兵、二等卒	四四〇		一一〇		
五等水兵	四一〇		一〇〇		

軍艦平遠の沈沒

細谷第三艦隊司令官よりの報告は、吾人に最も多くの驚きと悲みとを與へたり曰く。軍艦平遠は、九月十八日鳩灣方面に於て哨艦任務に從ひし儘行衞不明となりたるを以て其後引續捜索の結果、礁脈島にて同艦乘組の下士二人卒二人を發見せり、其口供並に濟遠艦長より提出せる捜索始末書等に依り案ずるに、平遠は陸軍掩護の爲め出動中、去る十八日恰も哨艦の任に當りしに、薄暮に至り天候險惡の徴を呈し、風雨强盛となりしを

以て歸航を企てたるものゝ如くなりしに、途中に於て敵の浮流機械水雷、忽然同艦の右舷中央部に觸れて爆發し、四邊暗憺たる光景の裏に僅に四五分の後全く沈沒せりと云ふ、當時艦長航海長及當直將校は艦橋上に在りしものゝ如く、其他の人員は概ね端舟二隻の準備に着手せしも、何れも覆沒したるを以て、衆皆意を決して自ら海中に投せしが、其多くは遂に怒濤に堪へずして戰死せしものと認む、其後濟遠等の熱心なる捜索にて、前記四名の生存者を發見せしも、其他のものに就ては、今日迄尚其狀況を詳にすること能はざるは、眞に遺憾に堪へざる所なり、蓋し水雷爆發の慘狀に加ふるに、其後吹き續ける强風怒濤は、此災厄をして更に大ならしめたるものならん。

即ち其生存者は僅に此四名にして、艦長大佐淺羽金三郎以下百九十七名は、行方不明となりたるなり、唯だ乘組員中少佐山口泰次郎以下十名は、遭難以前より特別任務を帶びて陸上に在りたるを以て、此難を免れたり。

平遠は明治二十一年の進水に係り、清國に於て建造せる鋼鐵二千百噸の一等砲艦にして二十七八年役清國より捕獲せる軍艦なり、此老砲艦の奇異なる艦歴に付ては、某海軍士官の逃懷能く之を詳にせり、乃ち假りて之を左に抄叙せん。

彼は我明治二十一年清國福州馬尾の船廠に於て建造せられ、北洋海軍の一艦として定遠鎭遠等の手足となり、二十七年日清間の交渉漸く切迫せるに當りては、北洋海軍右翼總

兵林泰曹の指揮の下に、數隻の僚艦と共に仁川に至り、雄風堂々我れに對して威嚇を試み、尋で屢〻偵察の任務に服せり、彼の黃海の戰の際には、彼れと廣丙とは本隊を離れ運送船を護衞して太平河口に碇泊しありしが、日清兩海軍の主力端なくも黃河の北部に衝突して、奮鬪數刻に渉り清國艦隊漸く紊亂して苦境に陷るを見るや、彼は決然錨を抜き彈雨を冒して單獨我本隊に向ひ驀進し來り健氣にも二十六珊の巨彈を我旗艦松島に報ひたりき。

斯くして彼れは戰場を逸走して旅順口に遁れ、後威海衞に潛み遂に北洋艦隊の全滅と共に我軍の收容する處となり、爾來或は練習艦となりて幾多の良兵員を養成し、或は艦隊に編入せられて大演習に參加し、我海軍に貢獻せるもの亦少からざりき、三十七年二月日露の平和は終に破裂せり、我聯合艦隊は咄嗟旅順方面に活動を開始し、萬砲雷擊先づ敵軍の兵氣を挫折せしめて、一戰又一戰、常に攻勢を取りて敵手を旅順口港內に壓迫しつゝありしが、髮染めて旭將軍を泣かしめたる老勇士の概ある彼れ平遠も、亦某艦隊に屬して戰場を驅馳し、初め某海峽の守備に任じ、後五月頃に至りて數回陸軍運送船を遼東半島に護送し、又其上陸を掩護せり、後陸軍の南山を攻撃するや、彼れは筑紫、赤城、鳥海及第一水雷艇隊と共に西山分遣艦隊に屬して金州灣に進航せしが、是れ實に彼れが本戰役中に於ける大活動の一なりき、當時敵軍は嚴重なる防禦を施せる砲壘に據りて頑强

なる抵抗を試み、我陸軍頗る苦戰の狀あり、我分遣艦隊之を看て直に砲火を開き敵壘に向つて猛撃を加へ、海岸近き敵壘は之れが爲め一時殆んど沈默に歸せり、尋で我陸軍の一部隊は强雨の下にありて水淺き海中を徒渉し、敵の側面に望んで突進す、是に於て平遠筑紫は艦隊を先頭に立て航路の深淺敷設水雷の有無を檢しつゝ海岸に接近して之を援護し、他艦亦再び全力を盡し、敵に砲火を濺ぎて陸軍に相應ず、敵遂に支ふる能はず蘇家屯を捨てゝ退却せしを以て、轉じて南關嶺附近を砲撃して（林鳥海艦長の戰死せしは此時）薄暮に至り、陸軍の既に全く目的地を占領したるを看て戰闘を止め、某地に歸航せり金州灣より某根據地に歸着せる平遠は、復直に某灣に至りて晝間は陸兵及軍需品の揚陸を援助し、夜間は警戒に從事すること實に三十餘日、纔て七月初旬より日々敵の敷設水雷を掃去しつゝある際、同月五日南三山島附近に於て濃霧中海門が敵水雷に觸れて沈沒するに會し、危險を冒して之に接近し、其乘員を收容すること百五名の多きに及べり、而して彼も亦七十餘日を隔てゝ海門と其運命を共にするに至りしは、眞に痛惜の限りにあらずや。

露帝の手書と黒鳩公の宣言

露國皇帝は十月四日バリナ司令官グリッペンベルグ大將に命ずるに、第二滿洲軍指揮官を以てし、同時に左の如き手書を下賜せり。

日本が集注せる猛烈なる精力と、日本人が戰場に表はす狂勇の擧動とは、朕をして更に戰陣にある兵力を增援して、短日月の間に決戰的成功を希求せしむるに至り、玆に朕は別箇の軍を組織して足下に委せんと欲す、一をクロパトキン將軍に委ね、他を足下の率るに任ずる所以のものは、尨大なる軍隊の不統一を防がんが爲めの微衷のみ、二人相謀りて朕の意に負かざらんことを期せよ、朕は作戰實戰の上に於ける足下の手腕を確信せり、皇天希くは大勳を足下に奏せしめて、朕が帝國に禍祉を下さんことを。

而して又クロパトキン將軍は同月八日を以て、軍隊に對し左の宣言を發布せり、曰く。

敵は卑劣にも旅順口に於て宣戰布告前に於て我海軍を攻撃し、爾來海陸共に同樣の方法を採れり、之にも關らず露軍は常に勇敢壯猛に戰ひ、以て大に祖國を辱めざるものあり然りと雖も敵は之が爲めに屈服せざるのみならず、依然として傲然其終局の大捷を期しつゝあり、我在滿洲軍は常に小挫折に屈せずして兵氣旺盛なりと雖も、其兵力に於ては未だ日本軍を破倒するに足らず、故に我軍の勇敢にして且つ名譽あるの任務を果し終局の勝を制するは、何ほ前途遼遠の事に屬す、此故に日本軍の攻撃に對しては、大石橋鞍山店及遼陽に於て敵を擊破せしに關らず、本官は尙時機不到來となし前進攻撃の機にあらずとなし、常に退却の命を與へたり、汝將卒は其陣地を撤去するに當てや、勇敢に防

衛をなして敵屍山積の慘狀を呈せしめ、尙且つ敵の爲めに阻害を受けずして餘裕綽々たるものありたり、遼陽の戰の如き、五日間の激戰に我前衛及本隊の陣地を遺憾なく防衛し得たる結果として豫定の如く新陣地に退却せり、又實に奉天に退却せんとするや、黑木將軍の攻擊を受け最大の困難を嘗めたり、道路泥濘にして殆ど通過し得ざるも意とせず、終日行進して尙且つ大砲及二輪車の如き、夜間手力を以て運搬し、一つの大砲、一名の捕虜若くは負傷兵をも遺棄せずして、殊に荷物列車の如きは全く破損を生ぜずして奉天に退却し得たるは、偉とするに足るなり。

本官は奉天に退却を命ずるに當て、頗る心中忍ぶ可からざるものありしと雖も、其退却が却て將來時機來らば敵を擊破して又立つ可からざるに至らしむるに於て、必要なりとの確信ありしを以て忍ぶ可からざるを忍び、涙を振て退却を命じたるなり、我皇帝は本官に與ふるに敵に對して充分勝利を得せしむるに足るの兵力を以てせり、而して其大軍を一萬ベルスト（六千六百六十六哩）の長程を運ぶの大困難は、擧國一致報國の念と熟練とを以て排擲し得たり、實に其困難たるや古今未曾有の事なり、僅々七箇月間に數十萬の兵數萬の軍馬と輜重車、莫大の糧食は、問斷なく西比利亞より滿洲に運搬せられたり今や假に在來の滿洲軍にして其兵力不充分なりとするも、新來の精兵は敵を擊破して陛下の意に稱ふは疑を容れざるなり、爾來敵は大兵を擁して我軍を包圍するの配備をなし、

專ら機を觀て攻擊し來りたるも、今や其彼我の位置は全く轉倒して、嘗てより熱望しありたる如く我意の儘に攻擊し得るの好機は來れり、我滿洲軍は實に攻勢を取るに充分の兵力あればなり。

然りと雖も我等は、强武勇敢なる敵と戰ひ提利を得るにあることは瞬時も忘る可からず、又兵力に於て充分なりと雖も、尙上下共に如何なる犧牲をも顧みず、終局の提勝を得るの大決心なくんばあらず、露國に取りて勝利の必要なるを銘心せよ、就中過去七箇月間旅順要塞を勇敢に防守したるの我軍を救援するに於て、一日も早く勝利を得るの必要なるを記憶せよ、古來露軍は我皇帝及我露國と協同しての戰爭に於て常に勇敢無比の勳業を建てざるはなく、之が爲めに宇內に名聲を博したり、故に極東に於て露國の威嚴と權利の防衛との責は、皇帝より我軍に委せられたることを忘却するなかれ、上は皇帝より全露國汝等を維持するの任は懸つて我軍の雙肩にあるを視よ、此全露國の捧ぐる祈禱を思ひ、又汝の責任の如何に重大なるかを考へ、確乎不拔の決心を以て、生を惜まずして勇往敢行吾人の任務を最終まで果さざる可からず、神は吾等を庇護せり、正に勝利疑なし。

露國皇帝と云ひクロパトキン將軍と云ひ、偖ても凄まじき勢かな、露國國民はクロパトキ

ン將軍が此尤もらしき宣言を聞きて如何に狂喜したりしぞ、十月十日のノーウエレーミヤ新聞は、殊更に社主スウォーリン自記と署名して此宣言を批評せり、曰く。

吾人は一昨八日初めて此の快報に接したるものなり、此令や語切にして意暢び、義雄衆備洵に能く露國民の意氣を發揮したるものにして、恰も日光の雲霧を破て燦然千里を照らすが如く、一呼一吸初めて自由の思あり、夫の敵を屈服せしむるの一語、實に千鈞重く、而かも之を我勇武なる滿洲指揮官クロパトキン大將より聞く、眞に肅然襟を正さゞるを得ざるの概あり、將軍久しく沈默痛神、勢を潜め力を養ひ、恬として世評に耳を假さず、自ら期する所あり、今や全軍敢然起て將軍の令を敷受す、露都も亦爲に遽かに活氣を生じ、人として我軍の好望を語らざるなく、西歐も亦將軍の命令を聞き多く愕然昂奮せしならんと信ず。

初め滿洲軍の遣東せらるゝや予はクロパトキン將軍を推して其統帥に擬し、世人も亦悉く將軍の材幹に信賴し、將軍に非ずんば能く大軍を提げて日軍を擊破するもの絶えてなしとせり、將軍は智勇倫を超え意思の堅きこと百錬の鐵の如く、森嚴冒すべからず、將軍は實に我國唯一の代表者なり、必ずや異日國敵を太平洋上に卻け、國威を發揚せずんば止まざるなり、將軍一たび遼陽を退くも奉天は之を敵に委せざるなり、否な其胸中復び遼陽の奪取を期するは炳かなり、今や將軍は元氣の充溢せる大軍を提げて前進の征途に上らんとす、國敵を屈服するの機は來れり、あはれ在天の神よ、我露鷲をして高く兩翼を張て一氣南下旅順の同胞を救はしめよ。

即ち此の如くクロパトキン將軍は非常の決心を以て、露國國民は亦此の如く狂喜して同將軍に期待する所あり、而して遼陽以後彼我の戰機は當に沙河々畔に於て練熟しつゝありしなり、其勝敗や果して如何、是れ日露兩國民は勿論恐く世界の人々が目を刮して齊く觀視を怠らざる所なりしなるべし。

勅語の下賜

以上の如く日露兩軍の戰機は當に練熟して、世界各國環視の衝に立ち、而も敵軍の決心珍らしくも亦上記の如きあり、乃ち我が　天皇陛下は十月十日を以て、桂總理大臣を召出され、左の勅語を下し賜はれり。

勅　語

開戰以降朕の陸海軍は克く其忠勇を致し、官僚衆庶其心を一にし、以て朕が命を遵奉し、着々其歩を進め今日に及ぶ、然れども前途尚遼遠なり、堅忍持久益〻奉公の誠を竭し、以て終局の目的を達する事を努めよ。

之を拜讀する者誰れか感奮興起せざらんや、果然沙河會戰の大捷快報は逐次吾人の耳朶を

振撼し來れり。

遼陽占領後の小戰闘

遼陽占領以後十月十日沙河大會戰の行はるゝまでは、絕へず各方面に於て小戰闘の行はれたるは言を俟たずと雖も、別に其戰況を叙述する程の趣味を有せず、依て左に彼我公報を掲げて唯だ其經過を知るの便に供せんとす。

其一（九月五日大本營着）

右翼軍の中央縱隊は、既に去四日午後十時より前進を起し、達運溝附近に於て優勢なる敵と衝突し、苦戰の後に至り、之を西方に擊退し、該地を占領せり。

同軍の左翼縱隊は、五日午後一時半濁泥舖を占領し、其砲兵を房身附近より退却する敵の縱隊に向ひ、三四十分間追擊射擊を爲せり、又右翼縱隊は五日午前十時半戰闘の後玉門子山一帶を占領せり。

敵は退却を續行し、目下其騎幕は十里河、劉三家子、紅稜堡の線に在り、荒地悶胡盧屯以南には敵を見ず、又板橋堡東方高地には一帶に散兵壕及肩墻らしきものありて監視力あり、敵の主力は大概渾河の以北に退却せしものゝ如く、孤家子八家子林盛堡官林堡には兵力未詳の敵兵あり、大東山堡に於ける沙河の橋梁は敵兵之を破壞し、サンデプーは

敵の騎兵尙之を占領せり。

去る五日敵は約一萬の負傷者を奉天以北に運搬したるの情報あるも、未だ全損害の實數を推測するに至らず、敵は戰闘間巧に屍體を運搬し去りたる形跡あり、然れども尙遼陽附近に遺棄しある屍體約三千以上なり。

敵は遼陽を退却するに際し停車場の諸倉庫を大抵燒棄したれども尙糧食品其他莫大の戰利品あり、敵は辛ふじて大砲を持去りたるも、彈藥車は之を彈藥庫の傍に集積爆發せしめたり、然れども各堡壘砲臺に棄却せし彈藥は頗る多大にして、未だ其數を積算するに遑あらず、遼陽附近に於て鹵獲せし彈藥の內十五珊米及十八珊米加農の彈丸あり、是を察すれば敵は重砲を有したるも全く使用するに至らざりしものならん。

其二（九月十一日大本營着）

煙臺石炭坑（遼陽の東北約六里）は我軍に於て已に之を占領したり。

其三（同上）

敵の大なる騎兵部隊は平臺子撫順街道上海浪寨に在り、又平臺子奉天街道上荒山嶺及三塊石山附近には、砲兵を有する騎兵部隊あり、范家屯、クーシヤツイ、悶胡蘆附近にも若干の騎兵部隊ありて、我と接觸を保持しつゝあり。

其四（九月十四日大本營着）

渾河以南の敵は依然現在し、其斥候部隊は絶へず我前哨線に來る、又三塊石方面には少數の砲を携行し來りて時々我を砲射することあり。

五里臺子雙臺子には敵の騎兵及少數の幕營を見る、新民屯奉天間には所々騎兵の駐屯するを見る、鐵嶺には遼河の兩岸高地に工事を施しあり。

其五(九月十七日大本營着)

敵の騎兵の有力なる部隊は板橋堡、紅綾堡、大三家子(紅綾堡西方約二里)に騎幕を成形しありて、其斥候部隊は捜索の爲め、日々五里臺子、閻胡盧屯、二臺子、大東山堡、ソタイジントン(大東山堡の西北約一里半)の線迄出没す、又長灘にも敵の騎兵部隊あり、敵の騎兵は目下上鼠色下黒色の冬服に改裝し居れり。

其六(九月二十日大本營着)

去る十七日平臺子(本溪湖北方約五里)に在りたる我一縱隊に對し、撫順方向より少くも歩兵四大隊、騎兵八中隊、砲八門、奉天街道より歩兵一大隊以上、騎兵若干砲六門を有する敵兵攻撃し來り、正午より午後三時に亘り激烈なる戰鬪をなせり、其奉天街道の敵は最も近く我守備線に迫りしが、午後四時より西北方に退却を始め、我砲兵は約三十分間追撃射撃を行ひ、多大の損害を與へたり、敵の大部は逐次退却し、其一部は尚ほ頑強に抵抗せるも午後七時に至り終に之を撃退せり。

其七(九月二十一日大本營着)

平臺子附近に來襲せし敵は、歩兵約七大隊砲兵二中隊にして、其一部は翌十八日も尚近く我縱隊の前面に停止し、主力は海浪寨奉集堡等に在るが如し。

其八(九月二十三日大本營着)

城廠附近より前進せし我一支隊は、二十日大嶺に在りし歩兵一中隊、騎兵若干、機關砲一門及三龍峪に在りし歩兵一大隊、騎兵五百、速射砲六門、機關砲一門の敵を攻撃して之を北方に撃退せり、敵の遺棄せし屍體十九、鹵獲品若干あり、我損害微少なり。

其九(十月四日大本營着)

去る三十日午後、敵の騎兵四五十騎南北長灘に來り、該地上流に在りし支那船に石油を投じ、之を燒き始めたるを以て渾河兩岸に在りし我監視兵は、射撃を以て之を妨害せり。

其十(十月三日大本營着)

一、昨二日先進支隊より出せる偵察隊歩兵一中隊、騎兵一小隊は、賓相屯に在りし敵騎五六十を撃退し、尚其附近偵察中敵の騎兵二百三十(乘馬歩兵らしきものを含む)の襲撃を受け、少時間抵抗の後歸途に就けり、敵の死傷約三十我に損害なし。

二、軍の前面に於ける情況變化なし。

其十一(十月七日大本營着)

四日僅少なる敵の騎兵鞍陽邊門附近に來りしも、我守備兵之を擊攘せり。

同日(四日)上柳河子方向に來りし敵は、歩兵一大隊騎兵十一、二中隊砲五六門にして荒山方向に退却せり、五日此方向には、敵騎二三中隊あるのみにして、其監視線は廟溝山より蟒家坟に亘れり、該隊の先頭に來りし歩兵は、何れも支那服を着し居れり。

四日僅少なる敵は平臺子、奉天街道上に在りし我監視哨に來襲せしも、之を擊攘せり、敵は死體銃器等を遺棄して退却せり、此敵は狙撃第三聯隊の者にして、總て支那服を着し居れり。

撫順街道上の松樹嘴子には三日以來敵騎約四中隊來り五日朝に至るも尙停止しあり。

去る四日南部五里街、龍王廟附近に出沒せし敵の騎兵斥候群は、徒歩せる監視哨を殘して北方柳塘溝方向に退却せり。

同日(四日)敵の騎兵小部隊は、エンカセウシより小臺に向け前進し、又敵砲約三門大臺附近より北煙臺に在る我部隊を砲撃せり。

渾河右岸長灘に在りし敵は、一部を殘して北方に退却したるもの〻如く、頭臺子附近には敵兵を見ず。

渾河左岸に在る我が前哨線にも、僅少なる敵の騎兵部隊來襲せしが、我前哨之を擊退せり。

土人の言に依れば、四日我が前哨等の爲め擊退せられし敵兵の內將校一名戰死し、下士卒五名負傷せりと。

以上我公報と時日を對照して敵國報を見れば、略其情況を推知するに難からざるべく、亦多少の趣味なきに非ず、乃ち其重なるものを左に抄錄せん。

其一(九月十四日黑旗公報)

黑木軍は鐵道線路の東二十五哩に、奥軍は線路の西三十哩の地點に在り、露軍は奉天の四圍に集中し、其後衞は奉天の南方七十哩の地に迄退けり、而して尙斷へず日本軍と接觸を保ち、休みなき戰闘を交へつゝあり。

其二(九月十八日黑旗公報)

ゼチラルレンチンカンプ及ゼチラルサムソノフは、大規模を以て偵察中激戰を生じ、多數の死傷を出せり、同偵察の結果として煙臺及ベンヂャプウに於て、日本軍が更に兵力を增加せしことを發見せり、露軍は更に日本戰線に近づきて數箇村落を占領せり。

其三(九月十九日黑旗公報)

九月十七日ベンヂャプウに於ける敵の陣地に對し强行偵察を行ひたるに、其陣地は戰備嚴重にして、少くも歩兵一個旅團砲十二門を以て之を占領せるを認めたり、哥薩克斥候ベンヂャプウの西方に於て日本輸送隊を攻擊し、馬四三十頭を其附荷と共に鹵獲せり、

ペンヂヤプウの東方には敵を見ず、敵は九月十八日其陣地より前進せざりしが、ペンヂヤプウの附近に援兵の着せるを認めたり、敵軍の大部分は遼陽を發して、既に太子河の右岸に渡渉せり。

其四（九月二十日　黒鳩公報）

軍の地位に何等の變化なし、九月十九日タワン（大嶺か）峽路の東方に於て敵支隊の行動を起せるを認めたり、九月二十日午後敵は二回右峽路に於ける我支隊の陣地を攻撃し、我が左側に迂回せんがため、四箇中隊を派遣せるも撃退せられ、其迂回運動は、我騎兵及之に附屬せる機關砲の爲めに防止せられたり。

其五（九月二十五日　黒鳩公報）

九月二十日には露軍の位地に變化なし、日本前進隊のある部分は、ペンヂヤプウよりカウトリンに向つて行動せり、大嶺峽道附近靜穩なり、但日本軍は攻勢を執つて我軍の左翼を衝かんとするの徴候なきに非ず。

既電に報じたる九月二十日の戰鬪に於て、ペテルホフ將軍は日兵を擒にし、兵器彈藥を鹵獲せり。

其六（九月二十九日　サハロフ報）

歩兵一大隊騎兵二中隊より成る敵の前衛支隊は、九月二十五日攻勢を始めたり、其目的は

マンダリン街道とツミツア村周圍の高地との間に於ける地方を偵察するにあるが如し、此運動は我軍隊の爲め防止せられたり、敵は全線退却し、我騎兵之を追撃せり、遼河の左岸に於けるダワンの以北には、敵の前進するものなし、但シャンチャン（張庄か）附近には敵の兵力增加せるを認む、又其騎兵はブーホ溪谷に現はれたり。

其七（九月二十九日　黒鳩公報）

日本前衛は鐵道の東方に於ける既報の陣地を維持せり、而して時々小部隊を以て攻勢を執り來るも、我騎兵前哨を見て退却す、サムソノツフ縱隊の前哨は、日本軍より生牛を奪取したり、ウラルコサック支隊は、九月二十五日の夜クワンヂに於ける日本軍の露營を攻撃せしに、敵は爲に恐慌したる狀を示せり、オランブルグコサック巡邏斥候は、九月二十六日午中隊の日本騎兵に對し伏兵を設けたり、敵は之に對し小銃射撃を開始せしも、間もなく多大の損害を蒙り、數名の死體を遺棄して退却したり、コサック兵は日本軍の馬匹若干を鹵獲せり。

其八（九月三十日　サハロフ報）

日本軍前衛支隊（一大隊）は、マンダリン街道に沿ひて前進し、ワーリタイタセ附近の高地を占領せるも、我騎兵支隊は之を撃退したる後數回ソトニア隊は、ツムヤツア及コヴアンダの高地に於て敵の堡壘を以て防禦せる前進陣地の塹壕より一中隊の敵を驅逐

し、之と同時に他の數箇ソトニア隊は、敵を煙臺停車場の方面に驅逐せり、塹壕中には口糧彈藥の遺棄せるものあるを發見せり、我負傷卒四名踪跡不明一名、敵の死傷二十名に下らず、九月二十八日及二十九日煙臺停車場及炭坑の前面に於ける敵の前衛は、增援せられたるを認む。

其九(十月一日サハロフ報)

ヤンシンタン及フエンチアプに對する日本前衛の攻勢運動は、九月二十九日我騎兵之を制止したり。

九月三十日我騎兵支隊は、チャンタンより日本兵を驅逐し、渾河上に彈藥を輸送中のジヤンク十七隻を燒拂ひ、日本增援兵の接近に及び退却したり。

其十(十月三日サハロフ報)

十月一日拂曉を以て日本騎兵一中隊は、クアンクアンヂアン、フエンチアプ間の地區に於ける、コサック兵前進陣地線の突擊を企つること二回に及びたるも成功せず、我兵は騎兵二箇中隊の增援を得日本兵を驅逐せり。

十月一日正午頃敵の前衛一大隊は、騎兵二三中隊と共に再コサック聯隊に對し攻勢を取り來り射擊は夕刻迄繼續したり、ミスチエンコ將軍は增援隊を送れり、敵は夕刻に及び各所共擊退せられ、其全線は我騎兵に追擊せられて、シアリオンケチエへ退却せり。

我騎兵一箇中隊々長は、敵の巡邏斥候隊に對しコシエツに於て伏兵を設け、日本士官一名を殺せり、コサック兵は日本兵の棄てたる陣地に於て、小銃用彈丸衛生材料及少數の騾馬を發見せり、我負傷者は將校二名コサック兵二名なり。

十月一日渾河と鐵道との間に於ける我前哨に對し、敵の歩兵一大隊半及騎兵一中隊は三部隊に分れて之を攻擊したり、我は來援せし他の一中隊の助勢を得て夕刻に及び右攻擊運動を防止したり、我巡邏斥候隊はチアンタン(長灘か)附近に於て二箇の日本巡邏斥候隊を驅逐し、日本兵三名を捕へたり。

東方に派遣せられたる我他の一巡邏斥候隊は、タワンホウリン(山路か)が日本將校の指揮に屬する二百の馬賊により占領せられ居ることを發見したり、コサック兵一名は射擊中戰死せり。

其十一(十月八日サハロフ報)

十月四日クリンボー(紅稜堡か)附近に在りし我巡邏斥候隊は、歩兵四中隊騎兵一中隊より成れる敵の支隊の爲に、擊退せられ、西方に向て鐵道附近迄退却せしも此處に增援を得且我騎兵隊の西方より來着するものあり、是に於て前進せる敵の背部を攻擊せしに、敵は損害を被むりてフアヂユサムプに退却するの已むを得ざるに至れり。

同日我斥候支隊は、煙臺北方四五英里の地點に前進したるに騎兵四中隊歩兵三中隊の日

本兵は倉皇退却したり、我兵は同行せる騎兵と共に敵陣地を仔細に偵察したる上、午後六時本陣地に歸還せり、我コサック兵一名戰死し將校一名及コサック兵二名負傷せり敵も若干の損害を被むりたり、我れは二名の騎兵を捕へたり。

其十二（十月十日露國司令部報）

十月八日日本軍右翼高地の周圍に於ける露軍動作の結果として、日本軍は奉天の南東約四十ウエルストなるビニアブーツウ村落附近に於て、其占領せし防禦陣地より退却せり、日本軍は先其前衛を撤退し、本隊は夜に入りて退けり、日本軍は南方に退却せるを以て露軍は直に其陣他を占領せり、奉天の南約三十ウエルストの地點に在る露軍前衛と、日本軍の間には、遼陽に面せる方向に於て屢〻小衝突あり。

以上彼我の戰報を對照すれば、縱令雙方の所報互に齟齬する所なきに非ずと雖も、勝敗は戰の常共に多少の一勝一敗は免れざりしものあるを認むるに足れり、而も此の如くにして蘊蓄したる我軍の英氣は、十月十日以後の所謂沙河大會戰に於て大發展を見るに至れり。

沙河の大會戰

遼陽占領以後殆ど一箇月間、僅に前衛の小衝突を以て、暫く國民に醫渴の快報を傳へざりし、我軍の行動は實にや鷙鳥の搏たんと欲して先づ翼を縮むるもの、突如十月十日の電報

を始めとして續々大々的快報を齎らし來れり、是れぞ即ち後に命名せられたる沙河大會戰の發端にして、古來東西の歷史上に多く見ざる所の一大遭遇戰なりとす、予は先づ例に依りて我滿洲軍總司令部公報の重なるものを列擧し、以下之に基きて各部隊の戰鬪に於ける情報を詳記せんとす、十月十日午前大本營着電の滿洲軍總司令部報告に曰く。

各軍方面の敵狀左の如し。

右翼軍方面

今九日朝敵は威寧營より太子河の左岸に移り、橋頭に向て前進し、橋頭、本溪湖間を遮斷せり、其兵力は步兵約一旅團、騎兵二千、砲二門なり、又本溪湖の東方、太子河右岸の地區には增加して步兵一旅團騎兵千五百砲八門となれり、大嶺方面の敵は約混成一旅團なり、綿花堡、八家子共に步兵一聯隊の敵あり、南に向て前進す、其後方には後續部隊あるもの〻如し。

午後二時敵の步兵約二聯隊上柳河子に進入し、又同時に敵騎一聯隊下柳河子に入り、燒達勾に進入せし敵は、其兵力一師團にして既に我陣地前に達せり。

中央軍方面

今朝迄此方面の敵は約一師團にして、前黃花店、板橋堡、柳塘溝の線に停止しありしが、午後敵の一縱隊柳塘溝より鐵道線路を南進し、其先頭南五里街に達せり、又柳塘溝

より歩兵連續前進す、其兵力三大隊を下らず、尙後續部隊あるが如し。
鐵道線路を進行中の敵は、長徑約二里にして尙其後尾を見ず、板橋堡東方高地にも約一聯隊の歩兵を見る。

左翼軍方面

此方面の敵の運動は活潑ならずと雖も、敵の主なる兵力は柳塘溝、孫家臺附近にあるが如し。

我軍の狀況

右翼軍は橋頭守備隊を應援の爲め一縱隊を差遣せり、又七日以來城廠方面にも敵襲を受けつゝあり。

本溪湖支隊の方面の敵に對しては、軍は今朝より一縱隊を以て增援し之を擊攘せしめ、目下戰鬪中なるも其狀況詳ならず。

中央及左翼軍は前面の敵に對して對戰中なり。

本官は目下の狀況に於て、敵が未だ其兵力を渾河左岸に集結せざるに先ち、之を擊破するの目的を以て、明朝より攻勢に轉じ敵の主力を求め、之を攻擊せんとす。

右翼軍司令官の報告

本溪湖支隊と聯絡を通じ得たる該隊は、九日朝より優勢なる敵と凡そ十二時間戰鬪を交へ、殊に本溪湖方面には最も激烈を極めたり、然れ共總て其の位置を維持し得たり、戚寧營には敵兵約一旅團餘あり、大嶺には昨夜遲く敵の大縱隊到着せり、土門子嶺には約一旅團の敵兵あり、敵は昨夜肉薄し來り、一部は接戰を爲せり。

軍より派遣したる增援隊は昨日午後四時頃火連寨に到着せり、其一部は午後九時頃本溪湖に到着し、一部は土門子嶺を占めたり。平山溝及大魚堡には敵兵密集しあり、平田大佐負傷せり。

次で十月十一日午前大本營の着電は、十月十日の各方面の敵狀を報じて曰く。

右翼軍方面

敵は可なり强大なる歩兵を以て、三家子の東方高地を占領しあり、又葉河勾谷地には强大なる歩兵縱隊開進しあり、燒達勾附近には敵の歩兵約一聯隊ありて、附近の高地に工事を施しつゝあり、又砲兵を有する敵は、午後二時三十分頃上柳河子下柳河子に向ひ前進せり。

本溪湖東方高地は敵の强襲に依りて占領せられ、其後又火連寨と本溪湖との中間より道路東側の高地を夜襲せられて、敵の占領する所となり、爲めに本溪湖支隊は其占領地を固守して夜を撤したりしが、今朝濃霧に乘じ本溪湖東方の高地を奪返し、又午前十一時本溪湖と火連寨間の高地を恢復せり。

右翼軍右縱隊の前面には、敵の步砲兵ありて全線之と對戰中なり。

午前十一時火速東側高地に向ひて騎兵突擊し來り、劍尖相接するまで劇戰を爲し、之を擊退せり、敵は多數の死傷者を殘して高地脚に退却せり。

本日晚に得たる報告に依れば、本溪湖方面の敵は增加せられたるもの〻如し、然れども我兵能く之と對戰しあり。

中央軍方面

右縱隊は本日午前玉門子東方高地を占領せり、左縱隊は荒地東方高地に達し、五里臺子の敵を攻擊せしも、日沒に至る迄未だ全く之を占領する能はず。

左翼軍方面

目下右縱隊は孤家子附近を占領し、中央軍の左縱隊に連繫して五里臺子の高地及二臺子附近に在る諸兵連合の敵を攻擊して雙臺子、二臺子の線を占領せり、中央縱隊は尖臺子、康家臺附近に亘る線に達し、前日來大東山堡を占領せる敵に向ひ攻擊して該地を占領せり、左縱隊は西老山屯の敵を攻擊して前進を續行し、赫家屯迄前進せり。

城廓守備隊は本日午前三時を期し、其前面の敵を夜襲し、之を東北方に擊退せり。

敵も然るもの、戰鬪は愈〻激烈を加へ來れり、十月十二日午前大本營着電十一日の戰況は左の如し。

右翼軍方面

敵の砲兵約五中隊午前十一時頃より、本溪湖支隊の正面各部を猛烈に砲擊し、右翼より一聯隊中央より五大隊の步兵を以て、攻勢を取り來り目下激戰中。

大嶺及本溪湖間の地點には砲戰を爲しつ〻ありの。

土門子嶺方面にては、目下砲戰中、本溪湖支隊より太子河左岸に出したる一隊は、敵を擊退して再び右岸に移れり。

敵は太子河上流大魚堡附近にも、若干の砲を備へ居れり、要するに土門子嶺より本溪湖に亘る本道東側の敵は、砲約八十門にして其步兵は二師團を下らず、右翼軍の主力に對する敵は、三家子より八家子に亘る線に在りて、其兵力は約四師團に下らず。

右縱隊及左縱隊の右翼隊の正面は、激烈なる戰鬪を繼續して日沒に至れり。

左縱隊の左翼隊は、中央軍の右縱隊と協力して先づ三家子附近の敵を擊退せんとしつ〻あるも、日沒迄未だ其目的を達するに至らず、然れども正面及左翼の戰況は、一般に有利に進捗しつ〻あり。

軍司令官は夜中に至るも、尙前面の敵を擊退せんことを努めつ〻あり。

中央軍方面

右縱隊は昨日來玉門子北方高地を占領しありしが、本日午前より右翼隊は右翼軍の左縱

隊の左翼と連繫し、孤架子方向に向ひ攻撃前進し、左翼隊は牡牛屯及三塊石山東方に向ひ攻撃せしも、未だ其結果を見る能はず。

左縱隊に對する敵は、范家屯、十里河、柳塘溝の線に在りて頑強に抵抗したる爲め、豫定の攻撃前進を實行する能はずして日沒に至れり。

本日左縱隊に對せる敵は、一師團弱なるが如し。

左翼軍方面

本日に於ける軍の攻撃前進は比較的進捗し、板橋堡、柳塘溝の線に向ひ攻撃を續行し、右縱隊は既に楊家灣を占領し、劉三家子方向に前進しつゝあり。

左縱隊は大油虫堡附近より靑堆子を經て、李大人屯に亘る線に前進し、其主力は靑堆子、尤家甸子附近に在りて敵の右側背を脅威しつゝあり、軍司令官は日暮迄目的點に達する能はざるときは夜間の行動をも試み、加之明日も攻撃前進を續行すべし、此軍に對する敵は少なくも二師團に下らざるが如し。

十月十二日午後の大本營着電は、漸く右翼軍の成功に近づきつゝある旨を報じ來れり、曰く。

今朝に於ける奉天方面の戰況左の如し。

右翼軍中央縱隊は、午前五時ロウコウリン山及八家子北方高地を占領し、同軍の左縱隊

は燒達勾北方高地を占領し續て敵を追撃し、中央縱隊は馬耳山を占領し得たり。

中央軍は昨夜半より運動を起し、今早朝三家子より三塊石山の西北方にある高地の線に達し、多分目下敵を追撃中ならん。

左翼軍は十里河、龍王廟、五里街附近の敵に對し、昨夜より絶えず攻撃しあるも未だ其成効を收むるに至らず、目下軍の左翼に兵力を增加しつゝ敵の左側背を包圍せんとしつつあり。

本溪湖方面の戰況は、依然持續しつゝあり。

右の情況なるを以て當方面の戰況は、最初の目的を貫徹する爲め、順境に向ひつゝあるものと判斷す。

我中央軍は昨夜半の戰鬪に於て、野砲二門彈藥車八輛を鹵獲せり。

丸井少將、久能中佐負傷、安村大佐戰死せり。

次て右翼軍左翼軍も亦漸次成功しつゝあるは、左の報告を得るに至れり、曰く。

右翼軍

本溪湖方面に於ては各所に於ける敵の逆襲を擊退し、橋頭、本溪湖間の連絡は今や確實となれり。右翼軍の首力及中央軍の追撃は大に進捗して、已に馬耳山、蟒家坟の線に達

し、砲兵を有する敵の一部隊は、包圍せられて大混亂を極め居れり、其他は逐次北に潰走せるもの〻如し。

右翼軍は本溪湖附近に在る敵の退路を遮斷するため、石橋子に向つて一部隊を差遣す。

午後三時頃（十二日）には目的地に進出するを得るならん。

中央軍

中央軍は今朝（十二日）三塊石山に於て、野砲及彈藥車八を奪取せり。

捕虜の言に依れば、クロパトキンは約三師團の兵力を擁して、右翼軍主力に對せし敵の後方に在りしといへり。

左翼軍

左翼軍の中央縱隊は、有力なる敵の抵抗を擊攘して、午後一時半頃、浪子街附近を占領し、敵砲八門を奪取せり、敵は潰亂して北方に退却せり、追擊隊は直に小東臺を經て劉三家子に向ひ前進す。

右縱隊はエンドウニウルーの北部に據れる敵の頑強なる抵抗を擊破して潰亂せしめ、目下龍王廟南部五里街に向つて敵を追擊中なり。

午後零時半頃（十二日）左縱隊は、猛烈に北煙臺を砲擊中なり。

戰鬪は愈〻我軍の成功を現はしつ〻來りて、前進追擊續々鹵獲品の多きを報告し來れり、

十月十三日午前大本營着電に曰く。

曩に電報せし以來右翼軍は、北方に向ひ劇烈に追擊を續行しつ〻あり。

本溪湖方面の敵の退路を遮斷する爲め、石橋子方向に前進せし一縱隊は、目下其運動を續行しつ〻あり。

中央軍は尙攻擊前進を繼續して本日中に東山口、胡家孤家子の線を占領せんとす、此方面の敵は夕刻に至るも續々北方に退却するを見る、黃花甸より敵の大縱隊東南に向ひて行進し、前黃家店に工事を始めたるやの報あるも未だ詳ならず、曩に電報せし左翼軍中央縱隊の鹵獲砲八門は十六門の誤りなり、尙追擊中同縱隊の右翼隊は砲四門を奪取せり、該縱隊に對する敵の逆襲は頗る勇敢なりしも、二回共其縱隊の砲兵と多數の步兵を以て敵に多大の損害を與へ之を擊退せり、左翼軍右縱隊は十里河西方に於て敵を追擊中敵砲五門彈藥車五輛を奪取し、合計砲二十五門彈藥車五輛を鹵獲せり。

總豫備隊は砲兵團と共に孤樹子附近に轉移せしめ、其一部は洪家店の敵を擊退し、左縱隊の右翼に連り攻擊前進中なり。

曩に電報せし中央軍に於て奪取せし野砲及彈藥車八は十一の誤りなり、此軍にては本日捕虜百五十名あり。

尙同夜大本營の着電は殊勝にも敵の屢〻逆襲を試みたるを報し、同時に閑院宮殿下の御戰

功を報告し來れり、曰く。

右翼軍

本溪湖方面は昨日屢〻敵の逆襲を擊退し同日午後五時頃より敵兵退却するの徴候あるを以て、此方面の我軍は今(十三日)早朝より攻勢に轉じたるも、其後の情況詳ならず。

戴仁親王殿下の率ゐらるゝ騎兵の大集團、敵の左側背に出でゝ其豫備隊を潰亂せしめたるは此方面の戰況を恢復するに與りて大に力ありし、而して此騎兵團は更に敵の背後に向ひ前進する筈。

右翼軍の右縱隊は、朝鮮嶺の敵を攻擊中、同軍の中央縱隊は蓮花山、馬耳山一帶を占領し左翼縱隊の右翼隊は燒達勾北方の高地に在る敵の殘餘部隊を攻擊中なり。

右翼軍の方面は地形に制せられ概して攻擊進捗意の如くならず。

中央軍

中央軍の右縱隊は、午前十時頃胡家、孤家子北方高地に向ひ攻擊前進に移り、二時頃には胡家、孤家子に在りし敵の砲兵先づ退却を始めたるが如し。

左翼軍

左翼軍の右縱隊は、十二日朝板橋堡を占領し、其先進隊は八家子に達せり、而して該縱隊は豫備隊の增加を受け、黃花甸附近に在る約一師團の敵を攻擊中なるも、其狀況未だ詳

ならず、然るに敵は前黃花店に數中隊の砲兵を備へて頑强に抵抗しありしが、豫備隊の一部を攻擊して其進捗今や頗る良好なり。

中央縱隊は既に劉三家子を占領し、コウスイ屯に向ひ追擊前進中なり。

左縱隊の右翼隊は、紅稜堡の敵を目下攻擊中に在り。

次て十四日午前の大本營着電は、其益〻有利なるを傳へ來れり、曰く。

左翼軍

先に通報せし以來右翼軍方面に於て、右縱隊は朝鮮嶺に於ける優勢なる敵と對峙し在りしが、增援隊の來着と共に其方面の戰況を有利に復しつゝあり。

中央縱隊は進んで蓮花山、馬耳山一帶を奪取して、優勢なる敵を攻擊中なり。

又左縱隊の右翼隊は、苦戰の後敵陣の要地たる燒達勾北方高地を占領せり。

中央軍

中央軍の攻擊は良好に進捗して、鱗家坟より胡家、孤家子北方高地を占領せり。

左翼軍

左翼軍の中央縱隊は、沙河堡を、右縱隊は黃花甸を攻擊中に在り。

日沒に至り左縱隊の右翼隊は、林盛堡を攻擊し、其一部は萬家園子を占領し、左翼隊は黑林屯富家庄の線を占領せり。

新來の增援隊は、續々煙臺及其附近に到着しつゝあり。

我軍の成功は愈〻確實にして追擊戰の勝報亦續々として來れり、十四日大本營着電滿洲軍總司令部の報告に曰く。

右翼軍

橋頭方面に於ては新に增援したる第一縱隊は、今十四日朝以來橋頭附近に到着せり、戴仁親王の率ゆる一縱隊は、今十四日拂曉太子河左岸臥龍村附近に於て、敵と對戰中なり。本溪湖土門子嶺間に於て我を攻擊せし敵は今十四日午前十一時頃より退却を始む、依て本溪湖支隊は追擊前進に移り、軍の右縱隊は十三日夜一部隊の應援を得て、優勢なる敵に對し朝鮮嶺の陣地を確實に維持しつゝあり。

軍の左縱隊は今十四日午前七時頃に至り、蓮花山及其北方一帶の高地を占領せり。

中央縱隊は昨十三日の夜靠山屯(金鐘山の東北方)高地附近を占領し、左縱隊の第一線は今十四日朝九時頃西溝山の高地を占領せしもの〻如し、要するに右翼軍方面の戰況は今十四日朝に至り益〻有利の景況に向ひつゝあり。

中央軍

中央軍は今十四日朝以來東山口より胡家、孤家子に至る線の北方一帶の高地を占領し、續て尙は攻擊前進中なり。

左翼軍

未だ確實なる報告に接せざるも、右縱隊の首力は今十四日午前十一時頃に至り、黃花甸東北方高地を占領したるもの〻如し。

中央縱隊は今十四日朝七時頃沙河堡南方の高地を占領し、其一部隊は乾家窪子に在りし敵の歩兵を攻擊して、砲十門を奪取せり、敵は潰亂して東北方に退却せり、今十四日朝以來林盛堡達連屯の間に敵の歩兵約五中隊、マダイデントンに約一中隊、陣地を占領しあり軍の左縱隊は之に對し攻擊中なり、萬家園子に在る左縱隊の一部に向ひ、今十四日朝敵の歩兵約二大隊砲兵一中隊逆襲し來りしも、之を擊退せり。

十月十五日午前大本營の着電は、我軍の追擊愈〻急にして多大の鹵獲品あり、而して前後敵の損害は三萬を超ゆべき旨を報じ來れり、即ち左の如し。

右翼軍の方面

軍の右側本溪湖支隊に對せし土門子嶺及大嶺附近の敵は、十四日午後に至り我攻擊に堪へ兼ね退却せんとするの模樣あるを以て、同軍司令官は該支隊長に命ずるに敵を北方及東方に急追すべきを以てせり、此に於て該支隊は即時二縱隊となり、追擊に着手し、敗敵を擊攘しつゝ平臺子、下達河方面に前進せり、敗退せし敵は、邊牛家堡附近に停止して防禦工事を構成しつゝあり。

朝鮮嶺附近に於て敵と對戰せる軍の右縱隊は、午後に至り前面の敵兵退却するの兆あるを察知し、直に之を擊退して代家塔方向に追擊し、中央及左翼縱隊は、相聯繫して西溝山附近の敵を攻擊し之を擊攘して代家塔の線に前進せり。

左翼縱隊に對せし敵は約一師團にして、奉集堡方向に潰走し、其砲兵は塔山附近に陣地を占領して尙我を砲擊しあり。

豫備隊の一團隊は、十四日朝以來微弱なる敵兵を擊退して歪頭山を占領しありしが、午後三時頃前面に敵の車輛縱隊退却しつゝあるを目擊し、直に之を追擊し且其一部隊を松樹嘴子に向ひ前進せしめたり。

中央軍方面

軍は今十四日朝以來長嶺子、蒲草窪及同家坟附近に陣地を占領せる敵兵を攻擊して、之を沙河以北に擊退し沙河の線に達せり。

左翼軍方面

黃家甸に向ひし右縱隊の主力は、十四日午後一時頃に至り敵を北方に擊退して、該地附近の高地を占領し、中央縱隊も午後に至り沙河堡南方高地に據れる敵を擊破して、該高地を占領せり、林盛堡に向ひし中央縱隊の一部と協力して激烈なる戰鬪の後午後四時頃に至り、林盛堡に肉薄突入し、終に之を占領し續て敵を追擊中なり。

林盛堡に在りし敵は、步兵一聯隊砲兵二中隊以上にして、四臺方に向ひ退却し、該地に至り停止せり、又中央縱隊の一部は、リユボク屯に向ひ敵を追擊中なり。

軍の左翼張良堡附近に位置せる左縱隊の方面に在つては、午後二時二十分頃に至り、敵兵漸次其兵力を增加し屢〻逆襲し來りたるも、該縱隊は盡く之を擊退せり、同縱隊に對せし敵の兵力は、步兵約四聯隊砲兵約十箇中隊を下らず。

之を要するに去る十日以來今十四日に至る數日間の連續せる戰鬪に於て、各方面共盡く優勢なる敵を擊破し、續て勇猛果敢なる追擊を加へ、之を渾河の左岸に壓迫し、以て彼れに多大の損害を與へ、且三十有餘門の野戰砲を奪取し數百の捕虜を得、全然彼の企圖を挫折し、其攻勢運動を根底より失敗に終らしむるを得たり。

各所に遺棄せし敵の死體は多數にして、容易に計上するに至らず、敵の損害其他共目下交戰中にして詳細に知るを得ざるも其數少なくも、三萬以上に達せしならん、又鹵獲品は前記三十餘門の外彈藥軍小銃等莫大にして數ふるに暇あらず。

十日より十三日に亘り戰場に遺棄せられたる敵の屍體にして、既に我軍にて埋葬せしもの丶みにても約二千以上にして、十四日の戰場に遺棄したる屍體も亦甚だ多數なり、其後の捕虜更に百名に達す。

次て城廠方面に於ける我軍の戰況亦有利なるを報じ來れり、曰く。

十日城廠附近に於て我守備隊より擊退せられたる敵は、平頂山附近に停止せるもの〻如し、捕虜の言に依れば、此敵は從來六道河子附近にありしマドリロフの部下なりしと、又該捕虜の言に依れば、敵の損害は將校以下約六十名なりしと、我損害は輕傷將校、山田伊藤兩少尉及杉田特務曹長にして、下士以下は僅少なり。

怎くて我三軍の追擊は愈〻急にして、成功は益〻近つけり、十五日午後の大本營着電は曰く。

右翼軍の主力は既に周家坟高地を占領して沙河の線に達したるも、約一師團の敵はミジヨウシザンにありて尙頑强に抵抗しつ〻あり。

中央軍は今や豫定の線に達して、今朝(十五日)來大なる戰鬪を交へず。

左翼軍の前面に在りし敵は、今朝に至るも沙河堡の北部及拉木屯に在りて頑强に抵抗し、軍の中央縱隊は沙河堡の占領に從事し、右縱隊の大部は拉木屯に向て攻擊前進中なり、敵は沙河堡より四方臺の間に砲兵約六中隊ありて、盛に我攻擊部隊及林盛堡に向て射擊しつ〻あるも其威力は我攻擊部隊を支阻するに足らず。

次て同日夜半の着電に曰く。

右翼軍主力の前面及中央軍の前面沙河右岸には、少數の敵兵あるも敢て大なる戰鬪を惹起するに足らず。

左翼軍の前面に於ける沙河堡及拉木屯(ラムチーン)の敵は、猶て頑强の抵抗をなしたるも、夕刻に至り我が兵遂に之を占領せり。

本日午後左翼軍の左翼後李大人屯に敵の一部現出せしも、我が一支隊は之を擊攘せり。

本日、日沒迄三道岡子附近に騎兵尙殘留して抵抗をなしつ〻あり、我中央軍の一部及左翼軍の一部は、目下之を擊攘するに努めつ〻あり。

十月十六日午後大本營着電は、漸く此激戰の靜肅に近きつ〻あるを報せり、曰く。

右翼及中央軍の前面は靜肅となれり、唯だ左翼軍の正面には激烈なる砲聲あるのみ、李大人屯方面の敵情は活潑ならず。

山田少將の指揮する部隊は昨十五日夜、三道岡子附近高地の攻擊に於て砲一門彈藥車二輛を奪取せり。

十月十六日夜大本營着電は、左の如く城廠方面に於ける其後の戰況を報せり。

城廠よりの報に依れば、平頂山に退却せし敵は、更に花尖子及興京方面に退却せり、葦子峪、小甸子方向に就ては、未だ得る所なし。

寬甸よりの報に依れば、懷仁附近に在りし敵は城廠の攻擊に敗れたる後、未だ該地に歸來せざるもの〻如し。

賽馬集より橋頭に前進せし我支隊は、十四日我騎兵團と共に牛心臺に達せり、該團の追

踞せし敵は同日家阿子（牛心臺の東北二里）に停止せり。

城廠より橋頭に向ひし我支隊は、十五日高力營の西南約四里の所迄敵を追撃せり。

十月十七日午前大本營着電追撃戰續報に依れば、

高官寨附近にありし少數の敵は、我追撃の爲め一部は花嶺他は高臺嶺に退却し、我追撃隊は高官寨を占領せり。

本集堡の西北約一千米突の部落に、約一旅團の敵兵集合しつゝあり、其砲兵は其部落の端に停止しあり。

塔山の東北方高地には、約二中隊の肩墻を見る、中央軍の前面の情況は、本十六日夕刻迄敢て變化なし。

左翼軍の左縱隊の前面には、今朝來敵は六回の逆襲を行ひしも、悉く之を撃退して多大の損害を與へたり、然るに夕刻に至り更に歩兵五、六大隊砲兵二、三中隊を有する敵は、同縱隊に向て攻撃し來り、同縱隊は目下之を撃退中なり。

昨十五日左翼軍方面に於て遺棄したる屍體は更に增加し、昨日迄に於て約四千に達せり。

尙同軍左縱隊の前面には頗る多數の死屍あるも、未だ調査に暇あらず。

同日夜大本營着電は、日露開戰以來否空前絶後の悲むべき大珍事を報じ來れり曰く。

上平臺子より代家峪に亘り占領しある右翼軍の一部に向ひ、敵の歩兵約一聯隊攻撃し來りしも、午前九時半頃我反撃の爲め潰亂して北方に退却せり、歪頭山方面の敵は尙陣地に留りあるもの〻如きも其情況詳ならず、其他右翼軍の方面には大なる變化なし、中央軍の前面にも大なる變化なし。

山田少將の率ゐる混成一部隊は、昨十六日夕左翼軍の一部沙河堡北方の敵に對する攻撃を援助せんが爲め、其右翼に連撃して攻撃を開始し、魏家樓子附近の敵を撃退し、敵砲二門彈藥車二輛を鹵獲し、其後支隊は三道岡子に亘りて展開し敵を撃退して其任務を了り、日沒後夜暗を利用して從前の陣地に退却中、午後七時頃に至り約一師團の敵は猛烈に前進し來り、支隊は兩翼を包圍せらるゝの危險に陷り、彼我の間に劇烈なる格鬪起り、其正面は之を撃退し得たるも、左右兩側は遂に之を拒支する能はざりしを以て、各隊は各一方を突破して從前の陣地に到着せり、此際砲兵は其兵員馬匹の多分を敵彈の爲めに斃され、野砲九門山砲五門は遂に遺棄するの止むを得ざるに至れり。

左翼軍前面の敵は依然昨日の陣地に停止し、各縱隊の正面は緩徐なる戰鬪を交へつゝ日沒に至れり、然れども前面の敵は前日の兵力を增加し、殊に中央軍前面には著しく其兵力を增し、左翼軍の左側支隊に對する敵兵も約混成一旅團に下らざるに至れり。

本日の戰鬪に於て我損害は約一千名に達するならん。

其後敵は健氣にも中央及右翼軍方面へも逆襲を試みたるもの〻如し、十月十八日午前大本營着電に曰く。

敵は昨十七日夜左翼軍の右縱隊の正面に、二回猛烈なる逆襲を行ひ、又其他中央及右翼軍の方面にも小規模の逆襲を試みたるも、悉く之を擊退せり、敵は多數の死屍を殘して退却せり。

十月十八日以降敵は最早活動の銳氣なく、唯だ左翼軍方面に於て屢〻逆襲を企てたるも常に失敗に歸し、中央軍右翼軍方面に於ては、偵察隊の時々出沒するの外見るに足るの戰鬪を爲したることなし、依て其公報を一束して左に揭ぐべし。

其一(十月十八日大本營着)

右翼軍主力前面の狀況は大なる變化なし、本溪湖方面より擊退せられたる敵は、重に高臺嶺方向に退却せり。

其他右翼軍方面の敵は、漸次其數を減少するもの〻如きも、小部隊の活動は依然たり。

中央部の前面に在りても狀況大なる變化なし、此方面に於て昨(十七日)夜敵兵來襲せしが、盡く之を擊退せり、本日は唯彼我時々砲戰を交ふるに過ぎず。

左翼軍前面の敵は時々綏漫なる砲擊を以て、我陣地を捜射す。

敵は我陣地前六百乃至千米突の距離に停止して、工事をなしつ〻あり。

軍の左側支隊に對する敵は、孟達堡、三家子、行家臺附近の線に停止し工事をなしあるが如し。

其二(十月十九日大本營着)

昨十八日夜右翼軍の中央縱隊は、佟家坟の敵騎を擊攘したるも、少數の敵歩兵再び同高地に侵入せり。

歪頭山の敵は、尙其位置を保守し在り。

十九日朝軍の右方高關寨附近には、敵の歩兵二大隊あり、尙後續部隊ありと目下確めつ〻あり。

中。

午後二時に至り中央縱隊の右翼佟家坟より狄々山に向ひ、敵の歩兵約二大隊、砲兵一中隊前進し來り、狄々山の後方に隱蔽せり、奉集堡北方高地より時々中央縱隊の陣地に向て砲擊す、其他左縱隊の正面には變化なし。

中央軍の前面には異狀なし、唯時々砲戰を交ふるに過ぎず。

左翼軍方面は至て靜肅なり、敵は唯軍の左翼に向て緩徐なる砲擊を爲すに過ぎず。

十八日夜左縱隊の正面に、敵兵來襲せしも之を擊退せり。

其三(十月二十一日大本營着)

右翼軍方面に於ては、二十日夕刻敵騎約二百、本溪湖東方に於て太子河左岸に移り、西進する模樣あり、又高關寨附近には、敵の歩兵約二大隊あり、尙其後方高臺嶺附近にも約二萬集合しありと。

中央及左翼軍方面にては、敵は時々緩徐なる砲兵射撃をなし、十五珊知臼砲をも發射す、又午後五時頃より四方臺附近より沙河停車場附近を砲撃せり、左翼軍方面に於ては、昨夜張良堡西方地區に於て、小銃百二十挺其他多數の武器裝具等を鹵獲せり。

其四（十月二十一日大本營着）

二十一日に於ける各軍方面狀況變化なし。

左翼軍に於ける戰利火砲の數は、調査の結果增加して四十三門となり、內二十七門は左縱隊、十六門は右縱隊に於て鹵獲せしものなり、其他彈藥車等多數なるも尙ほ取調中なり。

軍より出せし斥候は、二十日夜張良堡西方地區に於て、敵の死體二百を發見せり。

其五（十月二十九日大本營着）

廿七日右翼軍は其一部を以て歪頭山の敵を攻撃し、頗る頑強なる抵抗を受けたるも、午後四時に至り全く之を占領せり、該山を守備せし敵は狙撃歩兵第十八聯隊の二大隊なり、此戰鬪に於て敵の機關砲二門を鹵獲せり。

爾後敵は廿八日午前十時頃迄猛烈に我軍の占領したる歪頭山を射撃せしが、午後に至り全く砲撃を止めたり。

康大人山附近に集合しありし敵の大なる部隊、及邊牛录堡北方の高地端を占領し在りし敵の監視兵は、全く其影を匿せり。

其他の方面に於ては、彼我若干の砲戰を交へつゝあるに過ぎず。

其六（十月三十日大本營着）

廿八日夜敵の一部隊歪頭山に向ひ逆襲し來りしも直に之を撃退せり。

廿九日朝三時中央軍は、其前面にある無名村に向ひ歩兵一部隊を出し、之を奇襲して該村落を占領し、敵の拒守せる家屋に放火せり、蓋し此の村落は彼我前哨線の中間にありて、夜間屢〻我前哨を驅逐せしむる爲め、敵の據點となせし所なればなり。

廿八日夜十一時頃、敵兵三道岡子の高地に襲來せしも、直に之を撃退せり。

其七（十一月一日大本營着）

三十日午後左翼軍の左側支隊の前面に於て、敵の歩兵一聯隊以上騎兵約一師團（三聯隊）砲約二中隊は、李大人屯、韓山臺及其西方より壓迫し來り、支隊は此敵と相對戰し遂に之を擊攘せり、而して支隊は僅少なる損害を受けたるのみにして、敵の騎兵には反て多大の損害を與へ、敵約五六十は其馬を斃し諸方に潰亂せり、其遺棄せし屍體は十三、馬

十六なり。

左翼軍の左翼隊は、三十日夜歩兵一部隊を以て、張良堡西北約五百米突の無名村落を占領し、同村を燒夷せり。

以上予は、沙河會戰に於ける我滿洲軍總司令部の公報を列擧したれは、更に是より敵國公報の重なるものを列叙し、相對照して先づ沙河會戰の梗概を了知するの便に供し、夫れより進んで其詳細なる戰鬪情報を叙述せんとす。

十月十一日敵の參謀長サハロフ將軍の報告に曰く。

煙臺の北方に於て激戰あり、當方面の高地は露軍日本軍交〻之を占領せり、第六西比利亞狙撃隊司令官ダニロフ將軍は、脚部に負傷したるも指揮を繼續せり。

次て同將軍の發せる報告は左の如し。

十月十日滿洲軍は、前日夕刻占領せる沙河の南方八キロメートルに於ける陣地を支持せんがために增援せり、十月十日午後三時頃敵は約一箇師團及砲兵數箇中隊を以て、マンダリン街道及ッシンッ間に攻勢を執れり、敵の攻撃は我前衛の銃火により防止せられたり、敵は夕刻迄砲撃を繼續せり、十月十一日敵は鐵道の兩側及煙臺炭坑の北方に於て攻勢を執り、終日激戰あり、煙臺炭坑の東方クーアリン山路に於ける敵陣地の大部分は、我占領に歸したるも、森林より成る高地點は午後五時迄には未だ奪取するに至らず、我

軍は十月十一日終日敵軍攻撃の前面全線に亘る前進陣地を支持したり、但其中の或る地點は本陣地を強固にせんがため撤退せり。

十月十三日クロパトキン將軍の報告に曰く。

滿洲軍は十月十二日夜及十三日終日激烈なる戰鬪を繼續せり、日本軍は我中央及左翼に對し多數の兵力を集注せり、我軍は前進陣地に於て戰鬪を繼續し、以て本陣地より必要なる前衛の增援を待てり、日沒に至り始めて右翼隊は本陣地支持のため、本職の命令に依り前進陣地より退却せり、中央隊は午後二時頃本陣地に退却するの已を得ざるに至れり、本職の接手せる諸報告及自ら目撃せし所に據れば、戰鬪は猛烈を極めたり、我軍は屢次敵の攻撃に對し我より攻勢を採りて之を撃退せり、トムスク聯隊は勇敢なる防戰に於て特に勳功あり、我右側の前進陣地に於て我軍は夜間銃槍突撃を行ひ、前日夕刻奪取せられたる村落を回復せり、左側に在つては亦山路(朝鮮嶺ならん)占領の爲め激戰繼續せり、我兵は峻嶮なる斷巖を攀登し、二日間其陣地を支持し漸次敵に接近せり、同方面に於ける本日戰鬪の結果に付ては、未だ報告に接せず、本職は明日を期し、我軍の占領せる陣地を充分鞏固に防禦すべきことを命じたり。

倘同日クロパトキン將軍は報告して曰く。

午後一時迄の報告に依れば、軍の右側に於ける二箇聯隊は、十月十二日多大の損害を受

け、砲門を戰場に遺棄して退却せり、旅團長は負傷し、聯隊長たる一大佐は戰死せり。

是に於てウフノフスキー大佐は、臨時旅團長の指揮を取り、右二箇聯隊を率ゐて再び戰鬪を開始し前に失ひたる砲門の十六門を除き、他は悉く回收せり、然るに同方面に於ける十月十二日の戰鬪は、敵が夜襲を行ひたるにより結局我敗衂に歸し、陣地を放擲するの已むを得ざるに至りたるのみならず、我の回收せる砲門は再敵手に落ち、我兵は豫め備へたる沙河の陣地に退却せり。

敗衂を糊塗するに巧みなる敵將亦此言を爲す、其損害の多大なる以て推知するに足るべきなり、次て十月十四日サハロフ將軍更に報告して曰く。

十月十三日の戰鬪は繼續せり、敵は猛烈に攻勢を取り、我右翼隊殊にシャウリャオクーッ（三道岡か）方面を執拗に攻撃せるも、我兵は悉く陣地を支持し、屢〻敵の突撃を撃退せり、我右翼の終端に於ける隊も亦其陣地を支持せり、シャウリャオクーッ附近の我隊は、我右翼終端よりも地位一層前進せるを以て、其孤立に陷るを防がん爲め、薄暮まで陣地を固持したる上にて撤退すべき旨同朝命令を受けたり、退却は午後六時に始まり整然秩序を保ちて之を遂行せり、我左翼隊は十月十二日山路の攻撃を續行せり、敵は頗る頑強に抵抗せるも我は山路附近に於て岩石聳立せる高地を占領せり、然るに敵は有力なる增援を受け我隊は孤立に至るの虞あるを以て、近距離の退却を命ぜられたり、十月

十三日の戰鬪に於て、第四東部西比利亞聯隊第五イルクック聯隊第四十五ウイボルグ步兵聯隊は殊勳あり、三日間の戰鬪に於ける我損害は多大なり。

毎度ながら秩序整然たる退却を爲す敵軍の如きは、決して我軍の企及し得べき所にあらざるなり、翌十五日クロパトキン將軍は左の報告を爲したり。

去る十三日の夜敵の大勢は、奉天附近沙河の線に占據せる我部隊を攻撃せり、數回の攻撃は之を擊退したるも、最後の襲撃の爲め我中央隊は破られたり、是れより其附近に在りし部隊の右側面に於て戰鬪起れり、然るに我中央隊は他部隊より隔離せらるゝの虞あるを以て、之に增援せんが爲め、急速に數大隊を奉天街道に派遣し、攻勢を取るを得せしめたり、是に於て我軍は沙河堡を恢復して第一陣地を占むるを得たり、然るに日本軍は豫備の援兵を得て再沙河堡より我を驅逐したるを以て、本官は手許に置きし豫備隊を進めて再攻勢を取り、激戰の後遂に敵を二キロメートルの後方に驅逐したり、我右翼隊の位置は一時甚だ危殆に瀕せり、其前面と右側とは等しく敵の攻撃を蒙りたり、依て我分遣隊長は最後の場合に備へ置きたる部隊を前進せしめ、軍を側面より攻撃して數箇村を恢復し、以て沙河陣線を保持せり。

我中央陣地は他軍隊に比して頗る前進し居れり、依て豫め右側に於ける陣地を選定し、

多少防禦を施したり、我軍隊は激烈なる戰鬪の後此陣地に退却せり、我軍は四日間戰鬪を繼續し聯隊の多數は三夜間就眠せず、而も尙戰鬪を繼續するの餘力あるは、本官の充分信ずる所なり、日本軍の損失は非常に大なるべし。

次て同將軍第二の報告に曰く。

十四日の夜は無事に經過せり、午前九時頃敵は奉天街道に於ける我陣地の方面に於て、頗る大行動を爲さんとするを視て、我砲兵隊は之を砲撃せり、左翼隊長は同隊の前面に於ける敵が强力なる援兵を得たる旨を報告し來れり。

遼陽に於けると同じく、此時も亦猛烈なる砲火は天候に激變を與へ、盆を覆すの暴雨襲來し、道路泥濘河水氾濫せり、各軍隊に對しては從來の如く最大決心を以て反抗す可き旨を命じたり、唯今接したる報告に據れば、頗る優勢なる敵の軍隊は、西より東に向つて鐵道線路を通過せりといふ。

十月十六日サハロフ將軍の報告に曰く。

十月十五日正午日本軍は我右翼に對し、最も猛烈なる行動を開始せり、我軍は林盛堡に前進して之を占領せんことを試みたるも、其目的を達せざりき、同日中我軍は中央隊に砲撃を受けたるのみにして、概して比較的靜穩に經過し、我損害亦多大ならざるが如し、日本軍は昨夜ナンチンツ東北ウーデッド、ヒル（森林丘）と稱する高地に於て、我二聯の隊占據せる中央陣地を攻撃し、我兵は同高地に近き沙河の後方に退却するの已むを得ざるに至れり、其後の我兵は豫備隊の增援を受け、準備砲撃を行ひたる後同高地に突撃し、激烈なる接戰の後之を奪還し、同高地より遙に遠方迄敵を追撃せり、我右翼に於ては砲戰激烈を極め、午後敵は縱射を以て我を砲撃せり。

引續きサハロフ將軍は十七日附を以て左の報告を發せり。

昨夜は靜穩なりき、昨日中我は孤立せる丘林に突撃を行へり、敵は同丘上の陣地に火急に堡壘を設け之を占領しあり、敵の兵力は精確に分明ならざりしも、其戰鬪の猛烈なるを以て觀れば、其兵力多大なりしと察せらる、我軍は最も有效なる準備砲撃を行ひたる後、敵陣地に突貫して之を占領し、二キロメートルの距離に敵を追撃したり、戰鬪は朝迄繼續せり、日本兵は極めて頑强に其陣地を防禦して我と白兵戰を交へ、其多數は刀傷を蒙むりて塹濠內に戰死せり、我は野砲十一門速射砲一門を鹵獲せり、我の損害は未だ詳らかならず。

唯今即ち十七日午前八時には、我陣地の全線に亘りて不秩序なる砲撃を行はれつゝあり、我兵は甚だ疲勞せるも元氣旺盛なり。

是れぞ誠に敵將が日露戰爭中に爲したる報告中、空前絶後最も得意の報告なるべし、又別に十月十六日クロパトキン將軍の發せる報告に曰く。

十一月十五日午後八時頃日本軍は、林盛堡附近の陣地に對して攻勢を採り來りしも擊退せられたり、午後十一時頃敵は再射擊を開始し、一時間半之を繼續せり、我負傷者十四名。

十一月十五日拂曉義勇獵兵隊は、日本騎兵二部隊に對して伏兵を設け、敵が我前面を通過し騎兵三十二名の下馬するに及び、獵兵は前進し敵騎を捕へんとしたり、敵騎は之に抵抗し、其一半は戰死し他の一半は負傷せり、我は敵兵三名を捕へたり、敵は右騎兵應援の爲め歩兵一中隊を派したるも、我獵兵は一齊射擊を以て制止したる上、損害を受くることなく所屬聯隊に歸來せり。

次て十月十八日の同將軍報告に曰く。

十月十七日夜日本軍は孤木丘（ローンリー・ツリー・ヒル）を占領せる我前衛に對し、攻擊を試みたりしも擊退せられたり、其他交戰を報ぜる報告に接せず、十八日午前十時迄は凡て靜穩なりき、終夜降雨ありて甚しく道路を害せり。

十月十八日附サハロフ將軍の報告に曰く。

情報に據れば、日本軍は十月十七日屡〻我右側陣地を攻擊せしも、我軍之を擊退せり、同日中我軍はシユリオポウの西方に當り、沙河に瀕せるシヤランチーを奪取せり、敵はシヤランチーの附近に於て我の爲めに奪はれたる陣地に對し、猛烈に砲擊せしも、プチ

ロツフ山と稱する孤立する丘林に對しては、攻擊を爲さゞりき。

同日夕刻より夜に渉りて多數の死體を埋葬し、日本兵の屍に對し軍禮を行ひたり彼我雙方の死體は、壯烈なる接戰の證跡を存せり。

敵は我中央部に對し著大なる兵力を集中するを見る、我左翼に於ては昨日中戰鬪なし。

尙其翌十九日附同將軍の報告は左の如し。

十月十八日夜は靜穩なりき、敵は林盛堡に於て增援を受けたるに依り、同夜二等大尉デムボフスキーの率ゆる狙擊義勇獵兵支隊は、我前進陣地より敵の方向に進みて大膽なる偵察を遂げ、同支隊は戰はずして敵の野砲二門を鹵獲し、之を我陣地に後送せり。果して然りしや否や、是れ我軍司令官の公報中に見ざる所、頗る疑ふべきに似たり、之に次てサハロフ將軍の發したる報告に曰く。

十月十九日は戰鬪なし、十月十八日我騎兵はタツアンプの東方六キロメートルの前面サンデプ、カイゼンタイを偵察中敵の射擊を受けたり、敵は其後我巡邏斥候隊に會して直に退却せり、我騎兵は敵に誘致せられ追擊中、俄然サンデプに於て機關砲及野砲を有する敵の歩兵大部隊に會し、敵は射擊を開始して我追擊を阻止せり、ツルゲニエフ少尉の率ゐる巡邏斥候隊は、二百歩の距離に於て機關砲の砲火を受け、コサック兵及馬匹は悉く死傷せり、ツルゲニエフは亦自ら傷を負ひたれども、他の負傷斥候兵を糾合して遁れ

たり。

十月二十一日附サハロフ將軍の報告に曰く。

本日は戰鬪を見ず、敵は二十日夜沙河堡より倉皇退却し、我は同地に於て武器彈藥及び食糧を發見せり、右の外尚日本軍は前の砲兵陣地に於て前車四輛諸器具を滿載せる車一輛、並に曾て我の失ひたる砲一門を遺棄せり、我軍は去る十日以來鹵獲したる日本砲の總數十四門（內野砲九門山砲五門）と爲れり。

是れ眞箇に我が千秋の恨事、遂に豎子をして名を爲さしめたりと云ふべし、二十九日クロパトキン將軍の報告に曰く。

本日戰鬪の報告なし、昨日威力偵察のため派遣したる我騎兵は、步兵戰の後砲兵の掩護に依り、チャンツアンテネン（長灘か）村落を占領し、敵は三疊舖より退去せり。

十月二十八日日本軍は張良堡の西方一キロメートルの村落より、我義勇獵兵を驅攘せんと力め、終日猛烈なる砲擊を加へたり、然れども獵兵は同村落を保持し、其損害極めて輕少なり。

敵の步兵二中隊騎兵二中隊機關砲二門より成る一支隊は、ワンフアンリンの南方六キロメートルに在るタイアンより我前衞隊を擊攘せんとしたり、然れども之を擊退したり。

我獵兵隊は十月二十九日夜、ワンシンクンの南方二キロメートル頂上に佛閣ある山の方

向を偵察せり、同地は二十七日我放棄したるものなり、獵兵隊は竊に塹壕の最低線を占領したれども、高地よりの縱射を受けたり、狙擊步兵五名は頂上に登り、二十七日戰鬪の際遺棄したる露國重傷兵若干名を伴ひ歸れり、而後全支隊は射擊を續行しつゝ退却せり、他の獵兵一支隊は暗夜に乘じ、敵の塹壕即ちプチロフ山の前方にあるものに接近し、二箇の合圖の火把を揚げたれば、敵の全線に亘り警報を惹起したり、獵兵隊はルヂヤタン（柳匠屯か）南方一キロメートルのフヒンシン（房身か）を占領したれども、敵の優勢なる部隊のため夜襲を受け、ルヂヤタン方面に退却したり、然れども拂曉再攻勢を取りフヒンシンを占領したれども、同地は日本軍のため已に全く燒盡せられ居たり。

次て十月三十日同將軍の報告に曰く。

十月二十九日夜は前線に於ける戰鬪の報告に接せず、敵軍中西方より東方に向ふ行動あるを見る。

日本軍は南方及鳳凰城方面よりも增援兵を得つゝある旨の情報あり此等報告を以て之を見れば、攻勢を取る爲め兵力の集合を行ひたるものと推定するを得、我軍隊の健康は最好なり。

以上沙河大會戰に於ける敵軍の報告は極めて簡單にして、僅に彼が得意なる豫定の退却を爲したるの外、之を見るもの其勝敗の日露何れにありしやを知るに苦しむが如し、然れど

も此會戰に於ける敵の損害は極めて多大にして、我滿洲軍總司令部よりの諸報告を綜合すれば實に左の如し。

敵の遺棄したる死體　一萬三千三百三十三

內譯　右翼軍方面　五千二百
　　左翼軍方面　五千六百〇三
　　中央軍方面　二千五百十三

捕虜　七百〇九人

即ち我軍に於て明に確知すべきものゝみにて尙一萬四千に餘れり、然れば此他に敵の輸送し去りたる死體の亦多數なりしは疑ふべからず、而も聖彼得堡に於て公表せられたる所に依れば。

負傷者　五萬五千八百六十八人
戰死者　一萬二千人

に達すと云ふに過ぎず、而して之に對する我軍の死傷は、將校以下。

死傷合計　一萬五千八百七十九人

なりしと云ふ、此外戰利品として我に鹵獲したるは。

大砲	四十六門
彈藥車	三十七輛
小銃	五千四百七十四挺
砲彈	六千九百二十發
小銃彈藥	七萬八千發
刀	二十振
方匙	四十八
圓匙	四十四
斧	二十三
外套	三百五十六
携帶天幕	八十五

と計算せらるゝも、是れ極めて其概數たるに過ぎず。

此役敵軍の參加したる兵力は、固より精密に之を知る能はずと雖も、幾多の情報に依りて之を推算すれば。

步兵	約二十萬	騎兵	二萬六千
砲	約九百五十門		

なるべく、而して此役敵軍が非常の決心を以て對抗したるの事實は、左記中央軍捕獲の一將校が陳述したる所に依りて明かなり、曰く。

旅順要塞は日々益〻悲境に陷れり、然るに滿洲方面に於ては歐洲より增援兵續々來着し目下クロパトキンの奉天附近に掌握し得し兵力は九軍團以上に至れり、之を以て露帝は去九月二十七日を以てクロパトキンに今後一步たりとも奉天以北に退却すべからず、事情の許す限り迅速に攻勢に轉じ、日本軍を南滿洲に驅逐し以て旅順の急を救ふべきを命

じたり、故にクロパトキンは、其全力を提げて奉天以南に進出し、攻勢に轉ずる爲め、全軍を中央及左右の二縱隊に區分せり。

中央縱隊は第四、第五軍團より成り、サバルコフ之が總指揮を爲し、東山口、蓮花山方面に現れしもの即ち此縱隊なり。

左縱隊は二軍團より成り、日軍の右翼に向ひスタケルベルグ指揮官たり。

右縱隊は三軍團より成り、日本軍の左翼に向ふ、別に一軍團は中央縱隊の後方に續行す。

其他リチウイツチは烏蘇利地方の野戰軍を率ゐ、東方より大迂回をなし遼陽の東南方に迫り、以て日軍の退路を脅威する筈なりし。

又ミシチエンコは龍騎兵聯隊を指揮し、リチウイツチ支隊の右に連り運動せり。

中央縱隊は右に第一軍團、左に第四軍團、中央後に第五軍團位置す、第四軍團は目下西伯利亞豫備第一乃至第四軍團より成り、各師團は各速射砲四中隊を有す、第一軍團第三十七師團の右翼には第九師團の兵あるを見たり。

思ふに此度の戰爭は尙ほ永續すべし、露國は其一大目的たる最終の戰勝を償ふ爲めには、假令幾多の高價を拂ふも尙辭せざるべし、大敗の結果は、露國の一大革命邦土の分裂を來たすの時たるを覺悟せざるべからざればなり。

此度の戰鬪に於て第三十七師團、殊に其一旅團の損害の如きは非常なるものにして、第百四十五聯隊第一中隊の如きは、三塊石山上に於て全く殲滅し、又大隊長以下將校の死傷し或は捕虜となりしもの甚だ多かりし。

西伯利亞豫備步兵第三師團の損害も亦頗る大なりしが如し、此師團の各聯隊は出戰當初は約四千名なりしが、遼陽戰後二千五六百に減じ、此度の戰鬪に於て第十二聯隊の如きは僅に八百の現員となれり、其結果として大尉は聯隊を、少尉は大隊を、上等兵は中隊を指揮するの已むを得ざるに至れり、他の聯隊の景況は詳かならざれども、其損害の程度は僅少にあらざるが如し。

即ち九箇軍團と云へば十八師團にして其兵數實に二十五萬二千、砲八百六十四門を算すべく、前項と對照して多くの相違あるを見す、其空前の激戰たりしこと以て推知するに餘あるべし。

此捷報の我國に達するや　天皇陛下は滿洲軍に左の勅語を賜はり、次て　皇后陛下　皇太子殿下よりも夫々優渥なる令旨を下し賜はれり。

勅　語

我滿洲軍は、敵軍新銳の增援兵を得て大擧攻擊し來るに對し、機先を制して逆擊し、激戰數日多大の損害を與へ、遂に之を沙河以北に潰走せしめ、全く其企圖を挫折せり、朕深く爾將卒の忠勇克く前日の勞苦に堪へ、偉大の功績を奏したるを嘉す。